

解題

松陰快談

四卷

長野 確 著

長野確、字は孟確、豊山と號す、父名は祐清、伊豫川、江の人、七歳にして句讀を郷師宇田川南海に受け、弱冠にして浪華に遊び、中井竹山に師事す、竹山歿し、爰を負ふて江戸に至り、柴野尾藤、古賀三博士に見え、教を受け、初め曾て神戸本多侯に仕へたるも、一朝病と謝し、官を辭し、退いて家居し、刻苦書を讀み、古文を學ぶ、性狷介世に媚ぶる能はず、志を得ずして歿す、享年五十五、時に天保八年八月二十日なり。

此書は詩話、文話以外に、學術談あり、歴史談あり、修養談あり、書畫筆墨硯紙印章の談あり、若し夫れ徂徠、南郭、東涯、鳩巢、諸儒の詩文、學術を月旦するが如き、尤もその識見を見る、此書早く清國に傳はり、昭代叢書癸集に收められたり、原書の方卷を廢し、合せて一卷とし、且つ序文を省けり、卷内時に字句を刪れる處あり、第一卷末章の末尾の噫の字を削り、第三卷末章の末尾の一句を削るが如き、是

れなり、殆んど何の意なるを知らず、皆大義に關する所に非ず、故に今一々之を
校勘せず、一篇の跋文、今これを卷末に附載す。(京都書林積玉堂梓行)

松陰快談自序

余之僑居京城也、軒外有古松一株、夭矯翥軒如游龍舞鳳、余撫而愛之、及日之沒、山月之飛空、則涼影參差、中庭如流、時有稚子高吟曰、水上清風非有著、松間明月本無塵、余臥而聽之、不覺躍然而起、拍手和之、已而歎曰、此境界一味恨無人共享之矣、居久之聞足音、翾然則有二三客、提携而來、余爲設席、松陰與之啜茗、酌淡酒、陶然以樂、古人云、又得浮生半日閑、我輩之閑豈特半日而已哉、於是余爲之商榷古今評品文詩、其餘及山水花木書畫筆墨之末、衝口而發、無所擇也、一談一笑、未嘗不抵掌稱快也、乃謂客曰、子亦曾聽稚子之吟詩乎、水風不著、松月無塵、是得我談之意、且彼偶然高吟、以自快焉、我聽而悅之、不知客亦能悅吾之談否、然悅之亦可、不悅亦可、我快吾談、奚必問人之悅與不悅哉、客啞然而笑、且去、又來、固

無妨於我之閑也。積日累月，談益多端，因自錄之，稍積爲卷，名曰松陰快談，亦非以快人也。以自快耳。夫月之夕，松之陰，乃繙我書而快誦之，安知不復有旁人拍手稱快者哉。

文政庚辰仲夏

豐山長野確書于京城僑居老松之陰

松陰快談卷之一

伊豫 長野 孟 確 著

好同惡異之弊、不可勝言也、在國家則忠直退而佞諛進、在講學則損友親而益友疏、人之意見豈一一與我同哉、天下之事豈一人一家之所能辨哉、要之虛心平氣、惟求其善、庶幾其可、王安石好同惡異、偏見執拗、遂亂天下、東坡曰、自孔子不能使人同、顏淵之仁、子路之勇、不能以相移、而王氏欲以其學同天下、地之美者同於生物、不同於所生、惟荒瘠斥鹵之地、彌望皆黃茅白葦、此則王氏之同也、善哉言也、梅柳桃李牡丹芍藥、藹蒼燕子、

同を好み異を惡むの弊、言ふに勝ふ可らざるなり、國家に在ては則ち忠直以て佞諛進む、講學に在ては則ち損友親益みて友疏なり、人の意見豈一々我と同じからんや、天下の事豈一人一家の能く辨する所ならんや、之を要するに虛心平氣、惟だ其の善を求めば、其の可なるに庶幾し、王安石、同を好み異を惡み、偏見執拗、遂に天下を亂る、東坡曰、孔子よりして、人をして同じからしむる能はず、顏淵の仁、子路の勇、以て相移す能はず、而して王氏其學を以て天下を同じうせんと欲す、地の美なる者、生物に同じ、所生に同じからず、惟荒瘠斥鹵の地、彌望皆黃茅白葦、此は則ち王氏の同なりと、善い哉言や、梅柳桃李牡丹芍藥、藹蒼燕子、其花同じからずして皆愛す可し、天地の物を生ずる、己に同じからず、而るを況んや人に於いてをや。

其花不同而皆可愛焉、天地生物已不同、而況於人乎。

誹謗激坑焚之禍、清議激黨錮之禍、清流激白馬之禍、臺諫激新法之禍、歷代大禍多起於言語文字之激、可不畏而慎焉哉、明道先生嘗曰、新法之行、乃吾黨激成之、當時自愧不能以誠感上心、遂致今日之禍、豈可獨罪安石也、余謂當時諸公爭攻安石、不遺餘力、先生獨反之己、嗚呼、是所以爲先生也。

近歲米價至賤、亦至治之景象、蓋有田祿者、米價高則得利十倍、是徒益其富耳、鰥寡孤獨無恆產者、出錢買米、一錢高下、利害切其身、寧使富家少其利、不使窮民失其所、元何景福傷田家詩曰、春祈秋報一年期、土穀神

誹謗は坑焚の禍を激し、清議は黨錮の禍を激し、清流は白馬の禍を激し、臺諫は新法の禍を激す、歷代の大禍多く言語文字の激に起る、畏れて慎しまざる可けんや、明道先生嘗て曰く、新法の行はるゝは、乃ち吾黨激して之を成す、當時自ら愧づ、誠を以て上の心を感じしむる能はず、遂に今日の禍を致せり、豈獨り安石のみを罪す可けんやと、余謂ふ當時諸公争ふて安石を攻めて餘力を遺さず、先生獨り之を己に反す、嗚呼、是れ先生たる所なりと。

近歲米價至つて賤し、亦至治の景象、蓋田祿有る者は、米價高ければ則ち利を得ること十倍す、是れ徒らに其富を益すのみ、鰥寡孤獨にして恆産無き者は、錢を出して米を買ふ、一錢の高下、利害其身に切なり、寧ろ富家をして其利少からしむるも、窮民をして其所を失はしめず、元の何景福、田家を傷むの詩に曰く、春祈秋報一年の期、土穀の神靈知るや未だ知らずや、昨日街頭米價を寫す、三錢

靈知未知、昨日街頭穹米價、三錢一斗、定何時、讀之不覺泣下也。唐太宗時米斗三錢、後世以爲美談、然不如漢宣帝之時穀石五錢也。

天明年中、與羽饑饉、餓者盈道、羽州鶴岡有鈴木宇右衛門者、初爲某藩小吏、致仕自耕、爲人仁厚、見餓者之衆、愀然憫之、於是悉出其所有、救之、其妻亦賣衣服、鈿釵、助之振濟、田宅器物、斥賣皆盡、一日門外有少女、饑凍號哭、宇女年十歲、母謂之曰、春天漸暖、汝褻繡衣、盍脫其一、以贈之、女乃擇其美者、以授門外女、父母欣然感涕、聞者莫不歎美、嗚呼、鈴子一村小民耳、而其賢如此、世之大家富豪、自矜者、豈能爲鈴子乎、道德自任者、豈能

定めて何れの時ぞ」と之を讀んで覺えず泣下る、唐の太宗の時米斗にして三錢、後世以て美談と爲す、然れども漢の宣帝の時に穀石にして五錢なるには如かざるなり。

天明年中、與羽饑饉、餓者道に盈つ、羽州鶴岡に鈴木宇右衛門といふ者有り、初め某藩の小吏たり、致仕して自ら耕す、人と爲り仁厚、餓者の衆きを見て、愀然として之を憫れむ、是に於て悉く其の有する所を出して之を救ふ、其妻も亦衣服鈿釵を賣つて之を助けて振濟す、田宅器物、斥賣皆盡く、一日、門外に少女有り、饑凍號哭す、宇の女年十歲、母之に謂つて曰、春天漸く暖かなり、汝繡衣を褻ぬ、盍ぞ其一を脱して以て之に贈らざると、女乃ち其美なる者を選びて以て門外の女に授く、父母欣然として感涕す、聞く者歎美せざるは莫し、嗚呼、鈴子は一村の小民のみ、而して其の賢なる此の如し、世の大家富豪自ら矜る者、豈能く鈴子たらんや、道德自ら任ずる者、豈能く鈴たらんや、豈鈴子の罪人に非ずや。

爲鈴子乎、豈非鈴子之罪人耶。

瑞桂堂暇錄曰、簡池劉先祖號後溪、朱文公高弟、平生好施、不顧家有無、來謁者皆周之、一日晨坐煖閣、夫人方梳沐、有舊友來訪、公令夫人出閣、士人進見、夫人挈沐具、偶遺金釵一、公適起入內、夫人從窗隙中見、士人拾之、少頃公乃出、客退、問其故、夫人曰、偶遺小釵、彼方收拾未穩、士以貧得之、可少濟、不欲遽恐之、公與夫人俱賢如此、余謂今儒者動輒引非其義、一介不取、一介不與、然當其與之也、明目張膽、強辯曲說曰、義不當與焉、而當其取之也、唯見其欣欣之色、而未嘗聞其論義矣、清王丹麓今世說曰、有人語杜于皇

瑞桂堂暇錄に曰、簡池の劉先祖、後溪と號す、朱文公の高弟なり、平生施を好み、家の有無を顧みず、來り謁する者、皆之を周す、一日煖閣に晨坐す、夫人方に梳沐す、舊友有來り訪ふ、公、夫人をして閣を出でしむ、士人進見す、夫人沐具を挈け、偶、金釵一を遺す、公適、起つて内に入る、夫人窻隙の中より見るに、士人遺す所の釵を拾ふて懷に入れ、未だ穩ならず、公將に出でんとす、夫人、公の衣袖を掣いて之を止む、少頃にして公乃ち出づ、客退く、其故を問ふ、夫人曰く、偶、小釵を遺る、彼れ方に收拾して未だ穩ならず、士、貧を以て之を得る、少しく濟ふ可し、遽に之を恐すを欲せずと、公と、夫人と俱に賢なる此の如し、余謂ふ、今の儒者動もすれば輒ち其義に非ずんば一介取らず、一介與へざるを引く、然も其の之に與ふるに當つてや、明目張膽、強辯曲說して曰、義當に與ふべからずと、而も其の之を取るに當つてや、唯だ其の欣欣の色を見て、而して未だ嘗て其義を誦するを聞かず、清の王丹麓の今世說に曰、人有り、杜于皇に語る、某一介與へず、卻つて未だ一介取らざんばあらずと、一邊の伊尹と謂ふ可しと、余之を讀んで覺えず、捧腹絶倒す。

某一介不與、卻未一介不取、可謂一邊伊尹、余讀之、不覺捧腹絕倒。

本邦儒先如藤惺窩、林羅山、木順庵、室鳩巢諸公者、皆忠厚質直、千載傳之無弊之學也。羅山、鳳岡二先生、其學該博、和漢古今之書靡所不窺、可謂前無古人、後無來者矣。近世以博識自負者、或知彼而不知此、或知古而不知今、豈足望二先生之萬一哉。

伊藤東涯亦宏覽之士也、觀其所著制度通名物六帖之類、和漢之書籍、涉獵殆盡、可謂偉人矣。後之儒者、略讀西土古今之書、自誇其博識、殆爲東涯所笑。

禮樂制度、天文、地理、兵法、水利、算數、皆儒者分內之事、不可不知也。本邦古今之制度事

本邦の儒先藤惺窩林羅山木順庵室鳩巢諸公の如き者、皆忠厚質直千載之傳へて弊無きの學なり。

羅山鳳岡二先生は、其學該博、和漢古今の書窺はざる所靡し、前に古人無く、後に來者無しと謂ふ可し。近世博識を以て自負する者、或は彼を知つて此を知らず、或は古を知つて今を知らず、豈二先生の萬一を望むに足らんや。

伊藤東涯も亦宏覽の士なり、其著す所の制度通名物六帖の類を觀るに、和漢の書籍、涉獵殆んど盡くせり、偉人と謂ふ可し。後の儒者略ほ西土古今の書を讀んで、自ら其博識に誇る、殆んど東涯の笑ふ所と爲らん。

禮樂制度、天文、地理、兵法、水利、算數は、皆儒者分内の事、知らざる可らざるなり。本邦古今の制度事變、尤も當に詳講して明辨すべし。否、かんにば則ち以て儒と爲すに足ら

變尤當詳講而明辨焉、否則不足以爲儒矣、然非有許大之精神才力者、則豈足辨此哉、

晁氏客語曰、潛道少時嘗見溫公論性、潛道極言之、溫公作色曰、顏狀未離於嬰孩、高談已至於性命、嘗讀顧寧人亭林集曰、命與仁、夫子之所罕言也、性與天道、子貢之所未得聞也、今之君子則不然、聚賓客門人之學者、數十百人、譬之艸木區以別矣、而一皆與之言、心言性、舍多學而識、以求一貫之方、是其道之高於夫子、而其門弟子之賢於子貢、孰東魯而直接二帝之心傳者也、我弗敢知也、兩段議論足以醒覺大夢矣、

明主必能用人、暗君好自用、不能任人、荀子曰、人主以官人爲能者也、匹夫者以自能爲

す然も許大の精神才力有る者に非ずんば則ち豈此を辨するに足らんや、

晁氏客語に曰、潛道少き時嘗て溫公を見て性を論ず、潛道極めて之を言ふ、溫公色を作して曰、顏狀未だ嬰孩に離れず、高談已に性命に至ると、嘗て顧寧人の亭林集を讀むに曰、命と仁とは、夫子の罕に言ふ所なり、性と天道とは、子貢の未だ聞くを得ざる所なり、今の君子は則ち然らず、賓客門人の學者を聚る數十百人、之を艸木の區して以て別つに譬ふ、而して一に皆之と心を言ひ性を言ひ、多學にして識すを捨て、以て一貫の方を求む、是れ必ず其道の夫子よりも高くして、其門弟子の子貢よりも賢に、東魯に跳して直ちに二帝の心傳に接する者なり、我れ敢て知らざるなりと、兩段の議論以て大夢を醒覺するに足る、

明主は必ず能く人を用ふ、暗君は好んで自ら用ひ、人に任ずる能はず、荀子曰、人主は人を官するを以て能と爲す者なり、匹夫は自ら能くするを以て能と爲す者なり、

能者也、大有天下、小有一國、必自爲之、然後可、則勞苦耗悴莫甚焉、古人云、宋仁宗百事不能、惟能爲君、夫人主騷擾、不能靜淨無爲、未有能治國家者也、三代以來、惟漢文帝宋仁宗、靜淨無爲、近於恭己南面者、宜乎千載之下、仰慕其德、至今不衰也。

人主之德在知人、而知人堯舜難之、況其他乎、至愚之君、必悅媚己者、故人主能悅其不媚己者、亦可以爲英明矣、如唐太宗是也。文士齷齪不足用、而尤誤人者、假道學也、人主欲成國家之務者、必須求奇才、勿徒爲其名所誤。

近世儒先、惟新井白石、熊澤蕃山、實有奇才、可與唐宋名公比肩而無愧色焉。

大は天下を有ち、小は一國を有つ、必ず自ら之を爲し、然して後に可ならば、則ち勞苦耗悴焉より甚しきは莫し、古人云ふ宋の仁宗は百事能くせず、惟、君たるを能くすと、夫れ人主騷擾して靜淨無爲なること能はざれば、未だ能く國家を治むる者有らざるなり、三代以來、惟だ漢の文帝宋の仁宗は靜淨無爲、己を恭しむして南面する者に近し、宜なるかな、千載の下、其德を仰慕して、今に至つて衰へざるや。

人主の德は人を知るに在り、而して人を知るは堯舜も之を難しとす、況んや其他をや、至愚の君は必ず己に媚ぶる者を悦ぶ、故人主は能く其己れに媚びざる者を悦べば、亦以て英明と爲す可し、唐の太宗の如きは是れなり。文士齷齪用ふるに足らず、而して尤も人を誤る者は假道學なり、人主、國家の務を成さんと欲せば、必ず須らく奇才を求むべし、徒らに其名の誤る所と爲ること勿れ。

近世の儒先、惟だ新井白石、熊澤蕃山實に奇才有り、唐宋の名公と比肩して愧色無かる可し。

京師嘗有並河天民者、初從仁齋學、後自作一家之說、其學詭異、爲人有膽略、頗似陳龍川、要非凡庸、倘有英君、駕御之、則必有可觀焉、如熊澤氏、其學其人皆詭異、然英主用之、其功業偉然、至今賴之。

周成王任周公、而群叔不悅、蜀先主任孔明、而關羽張飛不悅、秦苻堅用王猛、而樊世仇、滕席寶不悅、唐太宗用魏徵、而封倫不悅、故曰、非希世之君、則不能用希世之臣矣、君子爲政、群小怨怒、歷世皆然、不足怪也、養犖而擢鸞皇、畜狸而搏鸚鵡、古人之所以三歎也、唐選舉志曰、凡擇人之法有四、其第一曰、體貌豐偉、余謂擇人以道德爲第一、其次取才藝、未聞以容貌取人也、果如唐制、則晏子之

京師に嘗て並河天民といふ者有り、初め仁齋に従つて學び、後自ら一家の説を作す、其學詭異なり、人と爲り膽略有り、頗る陳龍川に似たり、要するに凡庸に非ず、倘し英君有りて之を駕御せば、則ち必ず觀る可きもの有らん、熊澤氏の如き、其學其人皆詭異、然ども英主之を用ふれば、其功業偉然たり、今に至つて之に賴る。

周の成王、周公に任じ、而して群叔悦ばず、蜀の先主、孔明に任じ、而して關羽張飛悦ばず、秦の苻堅、王猛を用ひ、而して樊世仇、滕席寶悦ばず、唐の太宗、魏徵を用ひ、而して封倫悦ばず、故に曰く、希世の君に非ずんば、則ち希世の臣を用ふる能はず、君子政を爲して、群小怨怒するは、歷世皆然り、怪しむに足らざるなり、犖を養ふて鸞皇を擢み、狸を畜ふて鸚鵡を搏たしむるは、古人の三歎する所以なり。

唐の選舉志に曰く、凡そ人を擇ぶの法四有り、其第一に曰く、體貌豐偉と、余謂ふ、人を擇ぶには道德を以て第一と爲し、其次は才藝を取る、未だ容貌を以て人を取るを聞かざるなり、果して唐制の如くんば、則ち晏子の長は五尺

長不盈五尺、如我邦山本勘助、皆擯棄而弗用、豈可乎、開元天寶遺事云、明皇謂李白曰、我朝與天后之朝、何如、白曰、天后任人之道、如小兒市瓜、不擇香味、惟揀肥大者、我朝任人、如淘沙、取金、剖石探玉、皆得其精粹、據此語、則武墨取人、亦以容貌爲先歟。

不妄許可四字、蓋非君子之言矣、今人好譏者、常引以爲口實、楊升菴歎好發人陰私、以傳聞曖昧之事、或愛憎毀譽之口、而妄加誣讒於人、近日我邦儒林之習、亦如升菴之言、余因謂寧失之於過譽、勿失之於過毀。

人有媚嫉之心、猶著躬之癩、蓋欲不嫉不可得也、沉約聞人一善、如萬箭攢心、可謂小人矣、妬媚相害、古今之通弊、而近日儒林更甚、

に盈たず、我邦山本勘助の如き、皆擯棄して用ひざる豈可ならんや、開元天寶遺事に云く、明皇李白に謂ひて曰、我朝は天后の朝と何如、白の曰、天后、人を任ずるの道、小兒の瓜を市ふが如し、香味を擇ばずして、惟、肥大なる者を揀ぶ、我朝、人を任ずる、沙を淘して金を取り、石を剖いて玉を探るが如し、皆其精粹を得たり、此語に據れば、則ち武墨の人を取る、亦容貌を以て先と爲すか。

妄りに許可せずの四字、蓋君子の言に非ず、今人譏りを好む者、常に引いて以て口實と爲す、楊升菴、好んで人の陰私を發し、傳聞曖昧の事、或は愛憎毀譽の口を以て、妄りに誣讒を人に加ふるを歎す、近日我邦儒林の習、亦升菴の言の如し、余因つて謂ふ、寧ろ之を過譽に失ふも之を過毀に失ふ勿らんと。

人媚嫉の心有り、猶ほ著躬の癩のごとし、蓋嫉まざらんを欲するも得可からざるなり、沉約、人の一善を聞く、箭の心に攢るが如しと、小人と謂ふ可し、妬媚相害するは、古今の通弊にして、近日儒林更に甚し、夫れ人各命有り、

夫人各有命、而嫉之誹之、欲使之不通、不知無損於彼、而有害於己也。

古之眞君子眞豪傑、必磊磊落落、心跡明白、無所僞飾、冷齋夜話曰、東坡每曰、古人所貴者、貴其眞、陶淵明、恥爲五斗米屈於鄉里、小兒棄官去歸、久之復遊城郭、偶有羨於華軒、漢高祖臨大事、鑄印銷印、甚於兒戲、然其正直明白、照映千古、想見其爲人、由是視之、矯飾不近人情者、未必眞君子也、視於王介甫、可以見焉。

皇明世說云、劉青田始見太祖、詠竹箬曰、漢家四百年天下、盡在張良一借問、太祖大悅、青田佐太祖取天下、奇策神算、往往出於人意表、蓋似子房、而殆過之者、又善文章、余讀

而して之を嫉み之を誹つて之をして通ぜざらしめんと欲して彼に損無くして己れに害有るを知らざるなり。

古の眞君子眞豪傑は必ず磊々落落として、心跡明白、僞飾する所無し、冷齋夜話に曰、東坡毎に曰ふ、古人貴ぶ所の者は其眞を貴ぶ、陶淵明、五斗米の爲めに郷里の小兒に屈するを恥ぢ、官を棄て去りて歸る之を久しむして復た城郭に遊ぶ、偶、華軒を羨む有り、漢の高祖大事に臨みて、印を鑄印を銷す、兒戲よりも甚し、然れども其正直明白千古に照映し、其の人と爲りを想見す、是に由つて之を視るも、矯飾して人情に近からざる者は、未だ必らずしも眞君子ならざるなり、王介甫に視て、以て見る可し。

皇明世說に云ふ、劉青田始めて太祖に見へ、竹箬を詠じて曰、漢家四百年の天下、盡く張良一借の間に在り」と、太祖大に悦ぶ、青田、太祖を佐けて天下を取る、奇策神算、往往人の意表に出づ、蓋子房に似て殆んど之に過ぐる者あり、又文章を善くす、余其の著す所の郁離子を讀み、後

其所著郁離子、後又讀舶來寫本青田集、其文簡潔雄奇、蓋明文之傑然者。

王丹麓今世說曰、義興大饑、當事集紳士議賑、紳士曰、賑饑是極難事、毋輕議也、徐竹逸曰、天下難事、我輩不爲、誰爲之者、條陳數則、活數萬人、快哉竹逸、男子固當任天下難事、否則兒女子耳。

胡五峰知言三卷、張南軒序之、其書多名言、如寡欲之君始可言王道、無欲之臣始可言王佐、簡而盡焉、可以論定千古之君臣矣。

祕書二十一種中有晉乘、檣杓焉、蓋好事者據孟子、而僞作也、漢時求逸書、高價購之、姦人競僞作古書、以射貨利、孔壁古文、竹書紀年之類、蓋不少矣、列子載亢倉子、乃有亢倉

又舶來寫本の青田集を讀むに、其文簡潔にして雄奇、蓋明文の傑然たる者なり。

王丹麓の今世說に曰、義興大に饑ゆ、當事、紳士を集めて賑を議す、紳士曰、饑を賑ふは是れ極めて難事、輕しく議する毋れ、徐竹逸の曰、天下の難事、我が輩爲さずんば誰れか之を爲す者ぞと、數則を條陳し、數萬人を活かす、快なるかな竹逸、男子は、固より當に天下の難事に任ずべし、否らすんば則ち兒女子のみ。

胡五峰の知言三卷、張南軒之に序す、其書、名言多し、寡欲の君始めて王道を言ふ可く、無欲の臣始めて王佐を言ふ可しといふが如き、簡にして盡くせり、以て千古の君臣を論定す可し。

祕書二十一種の中に晉乘、檣杓有り、蓋事を好む者孟子に據つて僞作せるなり、漢の時、逸書を求め、高價に之を購ふ、姦人競ふて古書を僞作し、以て貨利を射る、孔壁古文、竹書紀年の類、蓋、少からず、列子に亢倉子を載す、乃ち亢倉子の書有り、家語に子華子を載す、乃ち子華子の書有

子之書、家語載子華子、乃有子華子之書、賈誼稱鷓冠子、乃有鷓冠子之書、孟子稱晉乘、檮杌、乃有晉乘檮杌之書、殆不可枚舉、劉炫作僞書百餘種、見北史儒林傳。

墨子亦僞書耳、胡元瑞九流緒論、據今之墨子、以證儒墨之異、嗶嗶累數百言、韓文公讀墨曰、孔子必用墨子、墨子必用孔子、不相用、不足爲孔墨、是文公辯墨子之爲僞書也、元瑞不察、以文公爲未嘗讀墨子、引墨書中之訕孔子者、以駁之、豈不謬哉、物徂徠亦以宋儒爲未嘗讀墨子、皆未察其爲僞書之過也、兵家之言、莫如孫武、其他鈐張之策、不翅理味淺短、而文辭亦不美、惟孫子文辭簡切、理致精妙、誠兵家之祖哉、有魏武注解、其眞僞

り、賈誼に鷓冠子と稱す、乃ち鷓冠子の書有り、孟子に晉乘檮杌と稱す、乃ち晉乘檮杌の書有り、殆んど枚舉す可からず、劉炫僞書百餘種を作る、北史儒林傳に見えたり。

墨子も亦た僞書のみ、胡元瑞の九流緒論今の墨子に據つて以て儒墨の異を證し、嗶々數百言を以、韓文公の讀墨に曰、孔子必ず墨子を用ひ、墨子必ず孔子を用ふ、相用るざれば、孔墨と爲すに足らずと、是れ文公墨子の僞書たるを辯するなり、元瑞察せずして、文公を以て未だ嘗て墨子を讀まずと爲し、墨書中の孔子を訕る者を引いて以て之を駁す、豈謬らずや、物徂徠も亦宋儒を以て未だ嘗て墨子を讀まずと爲す、皆未だ其の僞書たるを察せざるの過ちなり。

兵家の言、孫武に如くは莫し、其他鈐張の策、翅だ理味の淺短なるのみならず、而して文辭亦た美ならず、惟だ孫子は文辭簡切にして、理致精妙、誠に兵家の祖なるかな、魏武注解有り、其眞僞未だ知る可からず、然れども他の

未可知然比他注頗覺簡明說郭中有黃石素書一卷恐是偽書然亦確言甚多

懲忿錄二卷朝鮮柳成龍所著也記文祿三韓之役頗詳余讀武備志曰朝鮮柳承龍李德馨皆惑其國王李暎終亂國政余因疑承龍卽成龍字相似因以誤耳然觀懲忿錄柳與李皆頗有功於其國而武備志云云意一必有譌今未可考

致身錄十八條明史仲彬所著仲彬從建文帝出亡所錄頗末甚詳當時從亡者二十二人艱難崎嶇終始不變余讀之不覺流涕出亡建文四年六月十三日也

朱子著名臣言行錄當時諸家文集語錄漫記隨筆野乘稗史莫不採取語類云先生每得

注に比するに頗る明簡を覺ゆ說郭中に黃石素書一卷有り恐らくは是れ偽書ならん然も亦確言甚だ多し

懲忿錄二卷朝鮮の柳成龍の著す所なり文祿三韓の役ヲ記す頗る詳かなり余武備志を讀むに曰朝鮮の柳承龍李德馨皆國王李暎を惑はし終に國政を亂ると余因つて疑ふ承龍は卽ち成龍字相似たり因つて以て誤るのみと然れども懲忿錄を觀るに柳と李と皆頗る其國に功有り而して武備志に云云す意ふに一必ず譌り有らん今未だ考ふ可からず

致身錄十八條明の史仲彬の著す所なり仲彬は建文帝に從ふて出亡す錄する所の頗末甚だ詳かなり當時從亡する者二十二人艱難崎嶇終始變ぜず余之を讀んで、慳えず流涕す出せる亡は建文四年六月十三日なり

朱子著名臣言行錄を著す當時諸家の文集語錄漫記隨筆野乘稗史採取せざるは莫し語類に云ふ先生未だ見ざるの書を得る毎に必ず日夜を窮めて之を讀む朱子も亦

未見書、必窮日夜讀之、朱子亦自云、大略有書要讀、有事要做、又曰、書無所不讀、事無所不能、又曰、孔子、天地間、甚事不理會過、若非許大精神、亦吞許多、不得、余謂朱子亦有許大精神、母論其博學善文著述贍富、而又善書善畫、是皆非朝夕所能巧也、蓋其精神不堪喫多少辛苦、何能至此哉。

或勸陸象山以著書象山曰、學苟知本、六經皆我注脚、方伯謨勸朱子、勿著書、朱子曰、在世間喫飯後、全不做得些子事、無道理、是亦可以見二先生之異趣矣。

明胡應麟、字元瑞、號少室山人、年未四十而沒、余讀胡氏筆叢四十卷、其學該博、明儒蓋少、其比矣、王元美作元瑞傳、見弇州續稿、載

自ら云、大略書有らば、讀むを要す、事有らば、做すを要す、又曰、書讀まざる所無く、事能はざる所無し、又曰、孔子、天地間甚事ナニゴトが理會し過ぎざらん、若し許大の精神に非ざらんば、亦許多を吞み得ずと、余謂ふ、朱子も亦許大の精神有り、其博學善文著述贍富に論母く、而して又書を善くし、畫を善くす、是皆朝夕の能く巧みにする所に非ざるなり、蓋其精神、多少の辛苦を喫するに堪えずんば、何ぞ能く此に至らんや。

或ひと陸象山に勸むるに書を著すを以てす、象山曰、學苟くも本を知らば、六經は皆我が注脚なりと、方伯謨、朱子に勸むらく、書を著す勿れと、朱子曰、世間に在つて飯を喫して後、全く些子の事を做し得ざるは道理無しと、是亦以て二先生の異趣を見る可し。

明の胡應麟、字は元瑞、少室山人と號す、年未だ四十ならずして沒す、余、胡氏筆叢四十卷を讀むに、其學該博、明儒蓋其比少し、王元美、元瑞の傳を作る、弇州續稿に見えたり、其の著書の目を載す、殆んど三百卷なり、弇州曰、元瑞

其著書之目、殆三百卷、弇州曰、元瑞生僅三十、而著作充斥、乃爾、過此以往、所就又何如耶、據此言之、元瑞亦可謂奇男子矣、但恨文辭不駿潔耳。

余遭有疾、亦未嘗廢讀書、然不敢讀經史、恐其不能精細用心也、大概東坡志林、西湖志、米海岳書史、畫史、陳眉公書畫史、巖棲幽事、屠赤水考槃餘事、清言、徐文長玄鈔類摘、袁中郎瓶史、高士奇江村銷夏錄、姚首源好古堂書畫記、其他唐宋明人漫記隨筆詩話之類、或憑几讀之、或臥而閱之、亦病間之一適也、余嘗得脚疾、請一老醫診之、醫曰、病頗危篤、不宜讀書、因指几上朱子文集曰、這理窟的書、尤不宜讀也、余爲之一穴噓、而手猶不

生れて僅かに三十にして著作充斥乃ち爾り、此を過ぎて以往、就る所又何如ぞやと、此に據つて之を言へば、元瑞亦奇男子と謂ふ可し、但恨むらくは文辭駿潔ならざるのみ。

余疾有るに遭ふも、亦未だ嘗て讀書を廢せず、然も敢て經史を讀まざるなり、其の精細に心を用ふる能はざるを恐れてなり、大概東坡志林、西湖志、米海岳の書史、畫史、陳眉公の書畫史、巖棲幽事、屠赤水の考槃餘事、清言、徐文長の玄鈔類摘、袁中郎の瓶史、高士奇の江村銷夏錄、姚首源の好古堂書畫記、其他唐宋明人の漫記隨筆詩話の類、或は几に憑つて之を讀み、或は臥して之を閱す、亦病間の一適なり、余嘗て脚疾を得たり、一老醫に請ふて之を診す、醫曰、病頗る危篤、宜しく書を讀む可からずと、因つて几上の朱子文集を指して曰、這の理窟的の書、尤も宜しく讀むべからざるなりと、余之が爲に一大噓す、而して手猶は卷を釋てず、尋いで病愈ゆ、因つて謂ふ、讀書は吾が性の適する所、故に害無くして反つて益有り、然れども醫の言も亦妄に非ざるなり、虛勞症を患ふる者は痛く

釋卷尋病愈、因謂讀書、吾性所適、故無害、而反有益、然醫言亦非妄也、患虛勞症者、不容不痛禁讀書、

亡友服顯字維彰、讀書敏捷、嘗與余同讀十七史、至晉書、未半、維彰得篤疾、蓋刻苦太過之所致也、後余每閱晉書、未嘗不慘然思維彰也、維彰在、余學文、未成而卒、可惜、

享保年間有奴某者、主家破不忍去、竭力養主孤、遂得旌賞、物徂徠作傳、文見於徂徠集、一日讀宋王開灑水燕談錄、載趙延嗣事、趙哲之僕也、趙哲死、塞下、家極貧、三女皆幼、延嗣義不忍去、竭力營衣食、以給之、三女已長、趙哲之友宋白、楊徽之爲擇良士嫁之、三女皆有歸、延嗣乃去、徂徠先生石守道爲之傳、

讀書を禁ぜざるべからず、

亡友服顯字は維彰、讀書敏捷、嘗て余と同じく十七史を讀む、晉書に至つて、未だ半ばならずして、維彰篤疾を得たり、蓋刻苦太だ過ぐるの致す所なり、後余晉書を闕する毎に、未だ嘗て慘然として維彰を思はずんばあらざるなり、維彰、余に従ふて文を學ぶ、未だ成らずして卒す、惜む可し、

享保年間、奴某といふ者有り、主家破れて去るに忍びず、力を竭くして主の孤を養ひ、遂に旌賞を得たり、物徂徠傳を作る、文は徂徠集に見えたり、一日宋の王開の灑水燕談錄を讀むに、趙延嗣の事を載せたり、趙哲の僕なり、趙哲塞下に死す、家極めて貧しく、三女皆幼なり、延嗣義去るに忍びず、力を竭くして衣食を營し、以て之に給す、三女已に長じ、趙哲の友宋白、楊徽之爲に良士を擇び之を嫁す、三女皆歸有り、延嗣乃ち去る、徂徠先生石守道之が傳を爲り、以て天下を厲ます、義僕の事、彼此相似たり、而して之が傳を爲る者、同じく徂徠と號す、奇と謂ふ可

以屬天下、義僕之事、彼此相似、而爲之傳者、同號徂徠、可謂奇矣、然石之與物、其人迥別也。

客問余曰、似而非者、莫如儉與吝、其別如何、余曰、吾嘗讀明陳錄善誘文、曰、處己以儉、謂之德、待人以儉、謂之鄙、又晁氏客語曰、韓魏公用家資、如國用、謂不吝也、曾魯公惜官物、如己物、謂誠儉也、讀此二條、儉吝之別、了然明白。

張南軒先生告宋孝宗曰、嘗求曉事之臣、不求辦事之臣、欲求仗節死義之臣、必求犯顏敢諫之臣、後世人主宜三復焉。

太宰德夫紫芝園漫筆曰、周濂溪作愛蓮說、以蓮比君子、是宋儒道學之氣習、其弊也大

し、然れども石と物と、其人は迥かに別なり。

客余に問ふて曰く、似て非なる者は儉と吝とに如くは莫し、其別如何と、余曰く、吾れ嘗て明の陳錄の善誘文を讀むに曰、己れを處するに儉を以てす之を德と謂ふ、人を待つに儉を以てす、之を鄙と謂ふと、又晁氏客語に曰、韓魏公、家資を用ふる國用の如しと、不吝を謂ふなり、曾魯公、官物を惜むこと己の物の如しと、誠に儉なるを謂ふなり、此の二條を讀めば儉吝の別、了然として明白なり。

張南軒先生、宋の孝宗に告げて曰、當に曉事の臣を求むべし、辦事の臣を求めざれば、節に仗り義に死するの臣を求めんと欲すれば、必ず顔を犯して敢諫するの臣を求めよと、後世の人主は宜しく三復すべし。

太宰德夫紫芝園漫筆に曰、周濂溪愛蓮の説を作り、蓮を以て君子に比す、是れ宋儒道學の氣習、其弊や大なり、余謂ふ、屈原の離騷を作る、香草を以て君子に比す、周子の

矣、余謂屈原作離騷以香草比君子、周子之文原於此、果如德夫言、則屈子亦有道學之氣習耶、可發一察、史繩祖學齋估畢曰、左傳云、譬諸草木、吾臭味也、屈正平離騷經一篇之中、固以香草比君子矣、然於九章中、特出橘頌一章、濂溪周子作愛蓮說、謂蓮爲花之君子、亦以自況、與屈原千古合轍、不寧惟是、而二篇之文、皆不滿二百字、詠橘詠蓮皆能盡物之性格、物之妙、無復餘蘊、由是言之、德夫之論可謂陋矣。

佐藤直方曰、蘇東坡博覽強記、能文善書、然自我輩視之、東坡俗儒耳、學者欲博覽又善文章、終身不能爲真儒也、余謂然則周公之多才多藝、孔子之博學無所成名、周濂溪程

文此に原くと、果して德夫の言の如くならば、則ち屈子亦道學の氣習有るか、一察を發す可し、史繩祖學齋估畢に曰、左傳に云ふ、諸を草木に譬ふ、吾が臭味なり、屈正平離騷經、一篇の中、固より香草を以て君子に比す、然も九章中に於て、特に橘頌一章を出だす、濂溪周子愛蓮の説を作り、蓮を謂つて花の君子と爲す、亦以て自ら況ふ、屈原と千古合轍を合す、寧ろ惟に是れのみならず、而して二篇の文、皆二百字に満たずして、橘を詠じ蓮を詠じて、皆能く物の性を盡くし、物の妙に格り、復た餘蘊無し、是に由つて之を言へば、德夫の論は陋なりと謂ふ可し。

佐藤直方曰、蘇東坡は博覽強記、又を能くし、書を善くす、然れども我輩よりして之を視るに、東坡は俗儒のみ、學者博覽にして又文章を善くせんと欲せば、終身真儒たる能はざるなりと、余謂ふ、然らば、則ち周公の多才多藝なる、孔子の博く學んで名を成す所無き、周濂溪程明道の禮樂刑政天文地理兵法水利算數究めざる所靡き、朱

明道之禮樂刑政天文地理兵法水利算數、靡所不究、朱文公博覽強記、能文善書、天下之事靡所不知、是皆終身不能爲眞儒耶、設使佐藤子道博學善文、未必知道、則可矣、道博學善文、終身不能爲眞儒、則我欺誰、欺天哉、三宅尙齋屢譏佐藤氏之固陋、可謂知言矣。

伊氏之門貴博覽、其徒有成者、可以供王侯顧問之用、物氏之門貴文章、其徒有才者、可以供王侯書記之用、君子宜勿以其學之詭異而棄其所長也。

聖人爲政、自有妙用、非後人可議擬也、此而下用心、莫如公平忠恕焉、如世之腐儒、猜忌苛刻、恣髮不與己合者皆擊而排之、則其所

文公の博覽強記にして、文を能くし書を善くし、天下の事知らざる所靡き、是皆終身眞儒たる能はざるか、設し佐藤子をして博學善文、未だ必ずしも道を知らずと道はしめば則ち可なり、博學善文なれば終身眞儒たる能はずと道ふは、則ち我れ誰をか欺かん、天を欺かんや、三宅尙齋屢、佐藤氏の固陋を譏る、知言と謂ふ可し。

伊氏の門博覽を貴ぶ、其徒の成る有る者、以て王侯顧問の用に供す可し、物氏の門文章を貴ぶ、其徒の才有る者、以て王侯書記の用に供す可し、君子は宜しく其學の詭異を以て、其長する所を棄つる勿るべきなり。

聖人の政を爲す、自ら妙用有り、後人の議擬す可きに非ざるなり、此よりして下、心を用ふる、公平忠恕に如くは莫し、世の腐儒、猜忌苛刻、恣髮不與己合はざる者、皆擊つて之を排するが如きは、則ち其與する所の者、必ず讒諂

與者、必讒、誚面諛之人矣、焉能服天下豪傑之心哉、豪傑不服而國治者、未之有也。

謝肇淪文海披沙曰、黃金一種、古多而今少、漢高帝賜陳平黃金四萬斤、韓嫣以金爲彈、董卓積金成塢、而漢制、天子每聘后、輒用黃金二萬斤、今之大內豈易辦此哉、所以然者、世間糜費漸滅、唯金最多、而四夷之外、去而不返者、不與焉、由此視之、西土亦至明黃金耗滅、蓋地之出金銀銅鐵、本有限、安能副無窮之用哉、不可不慮也。

寬永中吉田侯爲執政、建議毀大佛像、以鑄錢、曰佛法以身世爲妄幻、以利人爲慈悲善根、則使佛存于今、必將割其身以利人、矧銅像乎、是與周世宗冥符、豐太閤使侍臣讀漢

面諛の人なり、焉んぞ能く天下の豪傑の心を服せんや、豪傑服せずして國治まる者は、未だ之れ有らざるなり。」謝肇淪の文海披沙に曰、黃金一種、古多くして今は少し、漢の高帝陳平に黃金四萬斤を賜ふ、韓嫣金を以て彈と爲す、董卓金を積みて塢を成す、而して漢制に天子后を聘する毎に、輒ち黃金二萬斤を用ふ、今の大内、豈此を辦じ易すからんや、然る所以の者は、世間糜費漸滅、唯、金最も多し、而して四夷の外、去つて返らざる者は、與からず、此に由つて之を視れば、西土も亦明に至つて黃金耗滅す、蓋地の金銀銅鐵を出だす、本限り有り、安んぞ能く無窮の用に副はんや、慮からざる可からざるなり。

寬永中に吉田侯執政と爲る、建議して大の像を毀ち、以て錢を鑄る、曰、佛法身世を以て妄幻と爲し、人を利するを以て慈悲善根と爲す、則ち佛をして今に存せしめば、必ず將に其身を割いて以て人を利せんとす、矧んや銅像をやと、是れ周の世宗と冥符す、豐太閤侍臣をして

書、至鄴生封六國後、叱曰、誤矣、至留侯借箸論之、乃曰、善、正與石勒合、英雄所見、符合如此。

我邦武將少年立奇功者、不可枚舉、在西土、少年以文鳴者、正相抗衡、唐李肇唐國史補曰、渾瑊太師年十一歲、隨父釋之、防秋朔方、節度使張齊丘戲問曰、將乳母來否、其年立跳盪功、後二年、援石堡城、收龍駒島、皆有奇功、是在西土絕無而僅有者。

浮田氏病篤、召侍臣曰、我將死、誰能從我者、咸請殉、問戶川肥後、答曰、夫陷堅挫銳、進不願死、臣能之、至殉則臣不能也、君若求殉者、莫如沙門、彼念誦猶能引導成佛、矧殉而導之、臣等武夫、戰場殺人不少、恐墮修羅道、且

漢書を讀ましめ、鄴生が六國の後を封するに至り、叱して曰、誤れりと、留侯が箸を借り之を論するに至り、乃ち曰、善しと、正に石勒と合す、英雄の見る所、符合するこゝと此の如し。

我邦の武將、少年にして奇功を立つる者枚舉す可からず、西土に在つて少年の文を以て鳴る者正に相抗衡す、唐の李肇の唐國史補に曰、渾瑊太師年十一歲、父釋之に隨ひ、防秋朔方、節度使張齊丘戲れに問ふて曰、乳母を將ひ來るや否やと、其年跳盪の功を立つ、後二年にして石堡城を拔き、龍駒島を收む、皆奇功有り、是れ西土に在つて絶えて無くして僅かに有る者なり。

浮田氏病篤し、侍臣を召して曰、我將に死せんとす、誰わが能く我に従ふ者ぞ、皆殉せんことを請ふ、戶川肥後に問ふ、答へて曰、夫れ堅を陥れ、銳を挫き、進んで死を願みざるは、臣之を能くせん、殉するに至つては、則ち臣能はざるなり、君若し殉する者を求めば、沙門に如くは莫し、彼れ念誦猶ほ能く引導して佛を成す、矧や殉して之を導くをや、臣等武夫、戰場に人を殺すこと少からず、恐らくは

沙門平日得寵賜十倍臣等、則以酬恩論之、
殉亦宜在沙門。

韓非子曰、越王勾踐、慮伐吳、欲人之輕死也、
出見怒蛙、乃爲之式、御者曰、何爲式、王曰、蛙
有氣如此、可無爲式乎、是歲有自剄死以其
頭獻者、是勾踐能振起士氣也、我邦武將御
其群下亦多類此、士氣不振而國久存者、未
之有也、故治世之良主、常賞敢言節行、以振
士氣、亂世之名將、必賞勇悍奮銳、以振士氣、
爲君將者、不之知、而欲士爲用、不可得也。

賀州板倉公尹、京十八年、治績甚大、老病辭
職、幕府召見、問曰、誰可代卿者、答曰、臣兒重
宗可、於是命尹、京、公明廉正、天下稱能、晉祁
奚舉其子祁午、唐狄仁傑舉其子光嗣、晉謝

修羅道に墮ちん、且つ沙門平日寵賜を得ること、臣等に
十倍すれば、則ち恩に酬ゆるを以て之を論ずるに、殉亦
宜しく沙門に在るべし。

韓非子に曰、越王勾踐、吳を伐つを慮り、人の死を輕んぜ
んことを欲するや、出でて怒蛙を見、乃ち之が爲に式す、
御者曰、何爲れぞ式する、王曰、蛙、氣有る、此の如し、爲に
式する無かる可けんや、是の歳自剄して死む、其頭を
以て獻する者有り、是れ勾踐能く士氣を振起するなり、
我邦の武將、其群下を御すること亦多く此に類す、士氣
振はずして國久しく存する者は未だ之れ有らざるなり、
故に治世の良主は常に敢言節行を賞し、以て士氣を振
はしむ、亂世の名將は必ず勇悍奮銳を賞し、以て士氣を
振はしむ、君將たる者之を知らずして、士の用を爲さん
ことを欲するも、得可かざるなり。

賀州板倉公、京に尹たること十八年、治績甚だ大なり、老
病職を辭す、幕府召し見て問ふて曰、誰れか卿に代ふ可
き者ぞ、答へて曰、臣の兒重宗可なり、是に於て命じて京
に尹たらしむ、公明廉正、天下能と稱す、晉の祁奚は其子
祁午を舉げ、唐の狄仁傑は其子光嗣を舉げ、晉の謝安は
其兄の子謝玄を舉ぐ、皆其舉ぐる所に負かず、私意を以

安舉其兄子謝玄皆不負其所舉不以私意累之賀州之舉何以異此哉。

防州板倉公尹京一日出行雖嬰兒皆避匿屏息埃其過有一兒可十歲獨不避且從而罵之公聞之命問其父姓名里居還謂府吏曰民某嘗訟乎吏檢之乃嘗訟而弗克者於是再召而接之果寃乃賜金謝之嗚呼公判無私官吏之所難知過能改聖人之所貴今防州一舉而兩美具焉豈不賢哉。

芭蕉菴桃青師事富春山人山人嘗爲半時菴澹澹作菴記其文道嘗爲桃青講南華今日三歲童子莫不知有桃青澹澹而富春山人或不知爲何人山人姓田名某字省吾號桐江從物徂徠學仕於某侯直諫弗聽請致

て之を累はさず賀州の舉何を以て此に異ならんや。

防州板倉公京に尹たり一日出でて行く嬰兒と雖も皆避匿屏息し其の過ぐるを埃つ一兒有り十歲可り獨り避けず且つ從つて之を罵る公之を聞き命じて其父の姓名里居を問はしめ還つて府吏に謂つて曰民某嘗て訟ふるか吏之を檢するに乃ち嘗て訟へて克たざる者なり是に於て再び召して之を按ず果して寃なり乃ち金を賜ふて之を謝す嗚呼公判私無きは官吏の難しとする所過ちを知つて能く改むるは聖人の貴ぶ所今防州一舉にして兩美具はれり豈に賢ならずや。

芭蕉菴桃青富春山人に師事す山人嘗て半時菴澹々の爲に菴の記を作る其文に道ふ嘗て桃青の爲に南華を講ずと今日三歳の童子も桃青澹々有ることを知らざるは莫し而して富春山人或は何人たるを知らず山人姓は田名は某字は省吾桐江と號す物徂徠に從つて學び某侯に仕ふ直諫して聽かれず致仕を請ふ亦允されず是に於て私かに去つて奥に奔る其及藤東壁太宰徳夫

仕、亦弗允於、是私去奔奥、其友滕東壁、太宰德夫、數人相共謀曰、侯必遣兵追之、恐不可脫、蓋相與出死力拒之、乃各衷甲護送、山人數十里、追兵不來、乃告別還、省吾已去遊奥、更號富春山人、後遊攝之池田、授徒自給、爲澹澹作菴記、蓋在攝時也、余常慕東壁德夫之高義、非庸儒之所及也。

岡井孝先、物徂徠友善、且有葭季之親、孝先嘗浴箱根溫泉、臨行託徂徠以妻子、既而小兒患痘、徂徠馳往視之、晝夜身不解衣帶、飲食湯藥、皆自調之、兒危篤、馳人告孝先、孝先深服其高義、與人語及之、輒嗟歎久之、余謂以徂徠之豪悍、而所爲如此、亦可見其卓越尋常矣、夫伊物之學、可謂詭異矣、然余聞

人相共に謀つて曰、侯必ず兵を遣して之を追はん、恐らくは脱す可からず、蓋ぞ相與に死力を出して之を拒がざると、乃ち各々甲を衷して山人を護送すること數十里、追兵來らず、乃ち別れを告げて還る、省吾已に去つて奥に遊び、更に富春山人と號す、後、攝の池田に遊び、徒に授けて自ら給す、澹々の爲に菴記を作る、蓋攝に在るの時なり、余常に東壁德夫の高義を慕ふ、庸儒の及ぶ所に非ざるなり。

岡井孝先、物徂徠と友とし善し、且つ葭季の親有り、孝先嘗て箱根の溫泉に浴す、行くに臨んで徂徠に託するに妻子を以てす、既にして小兒痘を患ふ、徂徠馳せ往いて之を視る、晝夜身衣帶を解かず、飲食湯藥皆自ら之を調す、兒危篤なり、人を馳せて孝先に告ぐ、孝先深く其高義に服す、人と語つて之に及べば、輒ち嗟歎之を久しむす、余謂ふ、徂徠の豪悍を以て、爲す所此の如し、亦其尋常に卓越するを見る可し、夫れ伊物の學は詭異なりと謂ふ可し、然れども余聞く、伊氏の徒、往々溫恭退讓、物氏の徒、大抵豪爽明快、皆義を重んじて利害を顧みず、善に服し、

伊氏之徒、往往溫恭退讓、物氏之徒、大抵豪爽明快、皆重義不顧利害、服善愛才、唯恐不及、要之非凡庸也、今人孰不排伊物而笑之、然視其人品、則有薰蕕之別、噫。

才を愛し、唯及ばざるを恐る、之を要するに凡庸に非ざるなり、今人孰れか伊物を排して之を笑はざらん、然ども其人品を視れば、則ち薰蕕の別有り、噫。

4

松陰快談卷之一終

松陰快談卷之二

伊豫 長野 確 孟 確 著

讀歷史諸子鈔本、不如讀一部史子也、讀諸家選本、不如讀一家全集也、欲學文章、最忌博雜、惟要精看數部、須使書味盈胸中、慎不當貪多矣、其書大抵左國史、漢孟荀莊騷、加以韓柳歐蘇三全集、反覆精讀、然後下筆、必有可觀、然不可無良師友琢磨也、否則不免獨學固陋矣、文已成、然後博讀書、則用力少、勞而收功卻多。

文章必須一氣呵成、譬猶人之一身、四支百骸各異其用、而氣之流貫於全體者、未嘗中

松陰快談卷之二

歴史諸子の鈔本を讀むは、一部の史子を讀むに如かざるなり、諸家の選本を讀むは、一家の全集を讀むに如かざるなり、文章を學ばんと欲せば、最も博雜を忌む、惟、數部を精看するを要す、須らく書味をして胸中に盈たしむべし、慎んで多きを貪るべからず、其書大抵左國史、漢孟荀莊騷、加ふるに韓柳歐蘇の全集を以てし、反覆精讀して、然る後筆を下せば、必ず觀る可きもの有らん、然れども良師友の琢磨無かる可からざるなり、否らずんば、則ち獨學固陋を免かれず、文已に成り、然後博く書を讀めば、則ち力を用ふるに勞少なくして功を收むること卻つて多し。

文章は必ず須らく一氣にして呵成すべし、譬へば猶ほ人の一身のごとし、四支百骸、各其用を異にし、而して氣の全體に流貫する者、未だ皆て中絶せず、乃ち能く生

絶、乃能生活運動、若徒有頭目手足、無一氣流通、則是木偶耳、文有抑揚開闔、操縱起伏、回抱接初、種種之法、而一氣呵成、乃稱作手、如徒拾句綴字、銖積寸累、慘澹經營、有無數斷續之痕、豈成言語哉。

本邦儒者作文、多未知篇法、而妄作也、太宰德夫文論曰、文有四法、曰篇法、曰章法、曰句法、曰字法、積字成句、積句成章、積章成篇、四者皆有法、一失其法、則不成文矣、先秦古文、以至韓柳二家、森然法度、歷歷可考、近世古文辭家作、今觀其文、非不工也、惟其字與句有法、而章與篇皆失法、故氣脈不貫、不足觀也、善哉太宰氏之言、本邦先輩論文、能及此者、蓋有之矣、我未之聞也、蓋用力於文辭者、

活運動す、若し徒らに頭目手足有りて、一氣の流通する無くんば、則ち是れ木偶のみ、文に抑揚開闔、操縱起伏、回抱接初、種々の法有り、而して一氣にして呵成す、乃ち作手と稱す、如し徒らに句を拾ひ字を綴り、銖積寸累、慘澹經營、無數斷續の痕有らば、豈言語を成さんや。

本邦の儒者、文を作るに、未だ篇法を知らずして、妄作するもの多し、太宰德夫の文論に曰、文に四法有り、曰、篇法、曰、章法、曰、句法、曰、字法、字を積んで句を成し、句を積んで章を成し、章を積んで篇を成す、四者皆法有り、一たび其法を失へば、則ち文を成さず、先秦古文より以て韓柳二家に至るまで、森然たる法度、歴々として考ふ可し、近世古文辭家作る、今其文を觀るに、工ならざるに非ざるなり、惟、其字と句法と有り、而して章と篇と皆法を失ふ、故に氣脈貫かず、觀るに足らざるなりと、善いかな、太宰氏の言や、本邦の先輩文を論じて、能く此に及ぶ者、蓋之れ有らん、我未だ之を聞かざるなり、蓋力を文辭に用ふる者、徂徠の徒に如くは、莫し、而して其作る所、猶ほ多く篇法を失ふ事、德夫の言の如し、況んや他人をや、夫れ字法句法を

莫如徂祿之徒、而其所作猶多失篇法、如「德夫之言、況他人乎、夫失字法、句法、是小疵耳、至失篇法、則安在其爲文哉。」

作文縛法、則筆端窘束、氣脈不貫矣、慣焉自放、則叙次錯置、前後支離、故必使法與我一不與之期、而合、斯謂之善文、嗚呼、是豈易事哉。

元吳萊論文曰、作文如用兵、兵有正有奇、正者、法度如部伍分明是也、奇者、不爲法度所縛、千變萬化、坐作擊刺、一時俱起、及其欲止、部伍各還其隊、元不會亂、是論文之尤善者。詩法易誤、文法難知、欲知作文之法、則莫如熟讀韓柳歐蘇之文、而又不可無良師友也、否則用力甚勞、而誤認不少、

失ふは是れ小疵のみ、篇法を失ふに至つては、則ち安くんぞ其の文たるに在らんや。

文を作るに、法に縛せらるれば、則ち筆端窘束して、氣脈貫かず、慣焉として自放せば、則ち叙次錯置し、前後支離す、故に必ず法をして我と一ならしめ、之と期せずして合す、斯に之を善文と謂ふ、嗚呼、是れ易事ならんや。

元の吳萊文を論じて曰、文を作るは兵を用ふるが如し、兵に正有り、奇有り、正は法度部伍の分明なるが如き、是れなり、奇は法度の縛する所と爲らず、千變萬化、坐作擊刺、一時俱に起る、其の止まらんと欲するに及んで、部伍各、其隊に還る、元會て亂れず、是れ文を論ずるの尤も善き者なり。

詩法は認め易く、文法は知り難し、文を作るの法を知らんと欲せば、則ち韓柳歐蘇の文を熟讀するに如くは莫し、而して良師友無かる可からざるなり、否らずんば、則ち力を用ふる甚だ勞して、誤認少からず。

文法甚嚴且明、而本無定法、一篇之中有起結、照應、波瀾、轉折、起伏、頓坐、抑揚等之法、可一々指示、而非有幾句必轉折、幾段必照應之定局也、譬猶軍法、左右前後、坐作進退、皆有法度、而戰鬪之際、變化不測、出奇無窮也、善作文者、窮言竭論、如意已盡、忽又一轉、更出人意外、而照右應左、結前起後、未嘗出範圍之外、兵以克敵爲主、出奇不克、惡在其爲奇哉、文以達意爲主、出奇不達、又惡在其爲奇哉、文以意爲主、以氣爲輔、以辭爲奴、是千古不易之定論也、造語雖巧、而氣脈不貫、主意不明、是奴婢強而主輔弱也、故能役使奴婢、而不爲奴婢役使、斯可謂善文矣、喋喋千言、意晦氣弱、將焉用文、不如不作之愈也、

文法甚だ嚴且つ明、而して本定法無し、一篇の中に起結照應波瀾轉折起伏頓坐抑揚等の法有り、一々指示す可し、而して幾句必ず轉折し、幾段必ず照應するの定局有るに非ざるなり、譬へば猶ほ軍法のごとし、左右前後坐作進退、皆法度有り、而して戰鬪の際、變化測られず、奇を出して窮り無きなり、善く文を作る者は、窮言竭論して、意已に盡ぐるが如く、忽ち又一轉、更に人の意表に出づ、而して右を照らし左に應じ、前を結び後を起し、未だ嘗て範圍の外に出でず、兵は敵に克つを以て主と爲す、奇を出して克たずんば、惡んぞ其の奇たるに在らんや、文は意を達するを以て主と爲す、奇を出して達せずんば、又惡んぞ其奇たるに在らんや、文は意を以て主と爲し、氣を以て輔と爲し、辭を以て奴と爲す、是れ千古不易の定論なり、造語巧なりと雖も、而も氣脈貫かず、主意明かならずんば、是れ奴婢強くして主輔弱きなり、故に能く奴婢を役使し、而して奴婢の役使と爲らざる、斯に文を善くすと謂ふ可し、喋々千言、意晦く氣弱ければ、將た焉んぞ文を用ひん、作らざるの愈れるに如かざるなり。

文之強弱在氣而不在辭、世有以艱澁爲強、以平易爲弱者、東坡之文、平易著明、于鱗之文、艱澁隱晦、然孰強孰弱、孰優孰劣、孰奇孰拙、具眼者必能辨之、魏文曰、文以氣爲主、氣之清濁有體、不可力強而致、是千古之確論也、

韓文公論文曰、氣水也、言浮物也、水大而物之浮者、大小畢浮、氣之與言猶是也、氣盛則言之長短、與聲之高下皆宜、可謂作文之要訣矣、

有經語、有史語、有小說家之語、有語錄隨筆之語、論記序書尺牘之類、文體已異、語氣自別、斷斷不可混用也、

有套語、有歇後之語、用之詩尺牘小文辭、猶

文の強弱は氣に在つて辭に在らず、世に艱澁を以て強と爲し、平易を以て弱と爲す者有り、東坡の文は、平易著明、于鱗の文は、艱澁隱晦然も孰れか強、孰れか弱、孰れか優、孰れか劣、孰れか奇、孰れか拙、具眼者必ず能く之を辨ぜん、魏文曰、文は氣を以て主と爲す、氣の清濁體有り、力強して致す可からずと、是れ千古の確論なり、

韓文公、文を論じて曰、氣は水なり、言は浮物なり、水大なれば而ち物の浮ぶ者、大小畢く浮ぶ、氣と言とは猶ほ是のごときなり、氣盛んなれば則ち言の長短と、聲の高下と皆宜しと、文を作るの要訣と謂ふ可し、

經語有り、史語有り、小説家の語有り、語錄隨筆の語有り、論記序書尺牘の類、文體已に異り、語氣自ら別る、斷々として混用す可からざるなり、

套語有り、歇後の語有り、之を詩尺牘小文辭に用ふるは

可也、至作大議論、大文章、則必不可用也、世之陋儒、大抵不能辨文體、粗心讀書、見西土人或用語、俗語、或用套語、或用歇後之語、不辨古今、不問文體、以爲文章皆如此、遂妄用之、曰、我有證據、是可笑之甚者、文體之不同、猶畫工之於草木禽獸各別體也、今若畫桃施之以蘭葉、畫虎施之以鹿毛、孰不笑其謬戾也、故欲學作文者、辨體之爲急務、

作文須一筆寫去、首尾粲然而後稍加添刪、則自然有活潑流動之氣、若銖積寸累、則死氣滿紙、使讀者厭倦、思睡也、

文能達意、非易事也、議論排冪縱橫如意、而天地景物千態萬狀、及日用常近眼前、鑽細之事、任筆寫來、未嘗停手、斯能達其意矣、是

猶ほ可なり、大議論、大文章を作るに至つては、則ち必ず用ふ可からざるなり、世の陋儒、大抵文體を辨する能はず、粗心書を讀み、西土人の或は俗語を用ひ、或は套語を用ひ、或は歇後の語を用ふるを見て、古今を辨せず、文體を問はず、以爲へらく文章は皆此の如しと、遂に之を妄用す、曰、我れに證據有り、是れ笑ふ可きの甚しき者、文體の同じからざるは、猶畫工の草木禽獸に於て各體を別にするがごときなり、今若し桃を畫いて之に施すに蘭葉を以てし、虎を畫いて之に施すに鹿毛を以てせば、孰れか其謬戾を笑はざらんや、故に文を作るを學ばんと欲する者は、體を辨するを之れ急務と爲す。

文を作る、須く一筆に寫し去るべし、首尾粲然として後稍、添刪を加ふれば、則ち自然に活潑流動の氣有り、若し銖積寸累すれば、則ち死氣滿紙、讀者をして厭倦睡らんことを思はしむるなり。

文能く意を達するは易事に非ざるなり、議論排冪縱橫意の如く、而して天地景物千態萬狀、及び日用常近眼前、鑽細の事、筆に任せて寫し來り、未だ嘗て手を停めず、斯に能く其意を達す、是れ西土の人に在りても亦之を難

在「西土人」亦難之、況於我乎、東坡論文曰、大略如行雲流水、初無定質、但常行於所當行、常止於不可不止、文理自然、姿態橫生、孔子曰、言之不文、行之不遠、又曰、辭達而已矣、夫言止於達意、疑若不文、是大不然、求物之妙、如繫風捕影、能便是物了、然於心者、蓋千萬人、而不一遇也、而況能使了然於口與手者乎、是之謂辭達、辭至於能達、則文不可勝用矣、近日文人有分達意脩辭爲二者、又謂艱澁之文爲脩辭、謂平易之文爲達意、可發一祭夫辭不脩則意不可達、意不達則不可以爲辭、王弼州藝苑卮言曰、孔子曰、辭達而已矣、又曰、脩辭立其誠、蓋辭無所不脩、而意則主於達、今易繫禮經家語魯論春秋之篇、存者

んず、況んや我に於てをや、東坡文を論じて曰、大略行雲流水の如く、初めより定質無し、但常に當に行くべき所に行き、止まらざる可からざるに止まる、文理自然、姿態橫生す、孔子曰、言の文ならざる之を行ふ遠からずと、又曰、辭達して已むと、夫れ言の達意に止まるは、不文の若きを疑ふ、是れ大に然らず、物の妙を求むる、風を繫いで影を捕ふるが如し、能く是の物をして心に了然たらしむるもの、蓋千萬人にして一遇せざるなり、而るを況んや能く口と手とに了然たらしむる者をや、是を之れ辭達すと謂ふ、辭能く達するに至つて、則ち文用ふるに勝ふ可からず、近日文人達意脩辭を分つて二と爲す者有り、又艱澁の文を謂ひて脩辭と爲し、平易の文を謂ひて達意と爲す、一祭を發す可し、夫れ辭脩まらずんば、則ち意達す可からず、意達せずんば、則ち以て辭と爲す可からず、王弼州藝苑卮言に曰、孔子曰、辭達して已む、又曰、辭を脩めて其誠を立つと、蓋辭脩めざる所無し、而して意は則ち達を主とす、今、易繫禮經家語魯論春秋の篇、存する者抑も何ぞ嘗て工ならざらんや、揚雄氏は其の達を避け、故に之を晦して法言を作る、太史は其晦を避け、故に譯して之を達して帝王本紀を作る、俱に聖人の意に非ざるなりと、亦知言なり。

抑何嘗不工也、揚雄氏避其達、而故晦之作、法言太史避其晦、故譯而達之、作帝王本紀也、俱非聖人意也、亦知言也、

光明正大、法度森嚴、而若然、齟然、奏刀、騞然、莫如韓文公焉、縱心委腕、篇法政嚴、序次詳備、麗句層出、愈多而愈不亂、莫如柳柳州焉、婉曲周折、法度閒暇、詞意醇厚、氣調員美、莫如歐陽公焉、縱橫排奐、才鋒俊偉、奇奇怪怪、不與法期、而與之合、莫如蘇文忠焉、

陳後山談叢云、法在人、故必學、巧在己、故必悟、余謂兩箇工夫、不可闕一也、蓋無師友琢磨、則規矩準繩、不可得而知也、故必學焉、夫運用之妙、存於一心、在我自得、不可恃他人也、故必悟焉、

光明正大、法度森嚴、而して若然、齟然として刀を奏して、騞然たるものは韓文公に如くは莫し、縱心委腕、篇法政嚴、序次詳備、麗句層出、愈よ多くして愈よ亂れざるは柳々州に如くは莫し、婉曲周折、法度、閒暇、詞意醇厚、氣調員美なるは歐陽公に如くは莫し、縱橫排奐、才鋒俊偉、奇々怪々法と期せずして之と合するは蘇文忠に如くは莫し。

陳後山談叢に云、法は人に在り、故に必ず學ぶ、巧は己に在り、故に必ず悟ると、余謂ふ、兩箇の工夫、一を闕く可からざるなり、蓋師友の琢磨する無くんば、則ち規矩準繩得て知る可からざるなり、故に必ず學ぶ、夫れ運用の妙は一心に存し、我が自得するに在り、他人を恃む可からざるなり、故に必ず悟る。

韓學孟、歐學韓、終不見其蹊徑、張無垢所謂
 欄柄入手、開導之際、改頭換面、隨宜說法、使
 殊塗同歸、是可以悟作文之法、夫孟韓歐蘇
 之所同者、在其法度結構、爾不可求同於字
 句之末矣、荀子曰、禹行而舜趨、子張氏之賤
 儒也、由是言之、豈惟文而已哉、

觀文辭者、願其運用如何而已、古今雅俗、皆
 自此而判也、猶良匠製器、衆材一經其手、精
 巧可喜、如夫拙者、雖有美材、適足以傷之耳、
 故其妙用不在其材、而在其手、不在其手、而
 在其心、靈丹一粒、點鐵成金、運用之妙、存於
 一心、豈惟道家與兵家之謂哉、

客問曰、六經、左國、史漢、皆古文也、篇章之間、
 固非無法、然豈一一合後人所說哉、作古文

韓は孟を學び、歐は韓を學んで、終に其蹊徑を見ず、張無
 垢が所謂欄柄手に入る開導の際、頭を改め、面を換へ、宜
 しきに隨ひ、法を説き、殊塗をして同歸せしむ、是れ以て
 文を作るの法を悟る可し、夫れ孟韓歐蘇の同じうする所
 の者は、其の法度結構に在るのみ、同を字句の末に求む
 べからず、荀子曰、禹行して舜趨するは、子張氏の賤儒なり
 と、是に由つて之を言へば、豈に惟に文のみならんや、

文辭を觀るには、其の運用如何と願ふのみ、古今雅俗皆
 此よりして判るるなり、猶ほ良匠の器を製するがごと
 し、衆材一たび其手を経れば、精巧喜ぶ可し、如し夫れ拙
 者は、美材有りと雖、適に以て之を傷るに足るのみ、故に
 其妙用は、其材に在らずして、其手に在り、其手に在らずし
 て、其心に在り、靈丹一粒、鐵を點じて、金と成す、運用の妙
 は、一心に存す、豈に惟だに道家と兵家とを之れ謂はん
 や、

客問ふて曰、六經、左國、史漢、皆古文なり、篇章の間、固
 より法無きに非ず、然も豈一一後人の説く所に合はん
 や、古文を作る者は、必らずしも法に拘はらずして可なる

者不必拘法可。余曰否。子欲知議論文法、且試讀孟子莊子、欲知敘事之法、且試讀左傳史記、反覆以索其結構之法、久之自了然矣。不必須多辯也。今夫世人孰不讀孟莊左史、但粗心讀過、生吞活剝、不知其法之所在耳。且夫韓柳歐蘇八家之文、已爲千載之宗師、後之學文者、不得不依其法、猶作詩者、不得不依沉約之韻也。李笠翁曰、未有沉休文、詩韻以前、大同小異、或可叶入詩中、既有此書、卽三百篇之風人復作、亦當俯就範圍。李白詩仙、杜甫詩聖、其才豈出沉約下、未聞以才思縱橫而躍出韻外、況其他乎、設有一詩於此、言中的、字字驚人、而以東冬江陽並叶互施、吾知司選者必加擯黜、豈有以才高句美、

やと、余曰否。予議論の文法を知らんと欲せば、且試みに孟子莊子を讀め、敘事の法を知らんと欲せば、且試みに左傳史記を讀め、反覆以て其結構の法を索む、之を久しふして自ら了然たらん、必ずしも多辯を須むざるなり。今夫れ世人孰れか孟莊左史を讀まざらん、但だ粗心讀過し、生吞活剝、其法の在る所を知らざるのみ、且夫れ韓柳歐蘇八家の文は、已に千載の宗師と爲る、後の文を學ぶ者、其法に依らざるを得ず、猶ほ詩を作る者の沉約の韻に依らざるを得ざるがごとし、李笠翁曰、未だ沉休文の詩韻有らざる以前、大同小異、或は叶して詩中に入る可し、既に此書有り、卽ち三百篇の風人復た作るも、亦た當に俯して範圍に就くべし、李白の詩仙、杜甫の詩聖、其才豈に沉約の下に出でんや、未だ才思の縱橫を以て韻外に躍出するを聞かず、況んや其他をや、設し此に一詩有り、言々に中り、字々人を驚かす、而して東冬江陽を以て並び叶へ互に施さば、吾れ司選者の必擯黜を加ふるを知る、豈に才高く句美なるを以て破格にて之を收むる者有らんや、合韻合韻方に才を言ふ可し、否らずんば、則ち八斗は、升合に克ち難く、五車は、片紙に敵せず、多と雖も、富と雖も、亦奚を以てせん、余謂ふ、文を學ぶ者は、先

而破格收之者乎、合譜合韻、方可言才、否則八斗難克、升合五車不敵、片紙雖多、雖富亦奚以爲、余謂學文者、先學字法、句法、章法、篇法、猶學詩者、先學平仄、排比、句法、韻脚也。

余幼少好文、不知篇法、信手漫寫、觀於他人之所作、亦猶是也、因謂文章如是、易爲耳、後反覆讀孟荀莊騷及唐宋明諸家之文、稍稍知篇法之所在、愈久愈明、始知篇法嚴然、不可胡亂下筆也、今夫連篇累牘、帥心安作、以誇多、我恐不免識者之旁觀匿笑也。

明清人作時文有定法、所謂一冒一腰六腹一尾等之類是也、其法本亦自古文出也、然不與古文同、譬猶古詩之與近體也、古詩無定法、而恰有法、然非如近體之平仄一定、配

づ字法、句法、章法、篇法を學ぶ、猶ほ詩を學ぶ者先づ平仄排比句法韻脚を學ぶがごとし。

余幼少にして文を好んで篇法を知らず、手に信せて漫寫す、他人の作る所を觀るに、亦猶ほ是のごとし、因つて謂ふ、文章は是の如し、爲し易きのみと、後反覆孟荀莊騷及び唐宋明諸家の文を讀み、稍篇法の在る所を知る、愈久しふして愈明かなり、始めて篇法嚴然として胡亂に筆を下す可からざるを知る、今夫れ連篇累牘、帥心安作し、以て多きに誇る、我れ識者の旁觀匿笑を免かれざらんことを恐る。

明清人の時文を作る、定法有り、所謂一冒一腰六腹一尾等の類是れなり、其法、本亦古文より出づ、然も古文と同じからず、譬へば猶ほ古詩と近體とのごとし、古詩に定法無くして恰も法有り、然も近體の平仄一定、配比切對、句必ず五七字、韻必ず一韻に限り、嚴然として移易す

比切對句必五七字、韻必限一韻、嚴然不可移易也、古文無定法、只是言語之次第、承接得宜者是耳、或譬喻、或波瀾、首尾結構、各相喚應、而氣脈流貫、句句欲活、乃成言語、乃是好文章也、若承接無法、則支離決裂、如口吃者之語、豈成文辭哉。

世儒論詩文、輒以世代爲高下、是耳食之言耳、詩文之佳惡、在人而不在世、在詩文而不在人、惟具明眼、而能公判者、可與論詩文矣。柳子厚論韓文曰、退之所敬、司馬遷、揚雄、遷於退之、固相上下、若雄者、如太玄、法言、及四愁賦、退之獨未作耳、決作之、如恢奇、至他文、過揚雄、遠甚、雄文、遺言措意、頗短局滯澁、不若退之、猖狂恣睢、肆意有所作、楊升菴曰、歐

べからざるが如きに非ざるなり、古文に定法無し、只是れ言語の次第承接宜しきを得る者は是れのみ、或は譬喻或は波瀾首尾結構、各相喚應し、而して氣脈流貫し、句句活せんと欲して、乃ち言語を成す、乃ち是れ好文章なり、若し承接に法無くんば、則ち支離決裂して、口吃者の語の如し、豈に文辭を成さんや。

世儒の詩文を論ずる、輒ち世代を以て高下を爲す、是れ耳食の言のみ、詩文の佳惡は人に在つて世に在らず、詩文に在つて人に在らず、惟だ明眼を具へて能く公判する者は、與に詩文を論ず可し。

柳子厚、韓文を論じて曰、退之の教する所は、司馬遷、揚雄、遷は、退之に於て固より相上下す、雄の若きは、太玄、法言、及び愁賦の如きは、退之獨り未だ作らざるのみ、決して之を作らば、恢奇を加へん、他文に至つては、揚雄に過ぐる遠きこと甚だし、雄が文、言を遺り意を措く、頗る短局滯澁、退之が猖狂恣睢、意を肆まにして作る所有るに、若かず、楊升菴曰、歐陽公蘇東坡の文、昔前に古人無し、老泉の

陽公蘇東坡之文、皆前無古人矣、至老泉之文、若求其侶、在孟荀之間、史漢之上、方正學詩曰、前宋文章配兩周、盛時詩律亦無儔、今人未識崑崙派、卻笑黃河是濁流、如三子者可謂具正法眼矣。

明都元敬、鐵網珊瑚曰、今人收畫多、賞古而賤今、且如山水花鳥、宋之數人超越往昔、但取其神妙、勿論其世代可也、余謂書畫詩文皆不拘世代可。

余常持左氏不及司馬之說、其略曰、人皆知班之不及馬、而不知左氏亦不及司馬也、子長之文猶文人高士爲水墨山水、略有筆墨、而妙處在筆墨之外、左氏猶畫匠之著色山水、固守規矩、而不敢胡亂下一筆也、然求其

文に至つては、若し其侶を求むれば、孟荀の間、史漢の上、に在りと、方正學の詩に曰、前宋の文章兩周に配す、盛時の詩律亦儔無し、今人未だ識らず、崑崙派、卻つて笑ふ、黃河是れ濁流と、三子の如きは、正法眼を具ふと謂ふ可し。

明の都元敬が鐵網珊瑚に曰、今人畫を收むる、多く古を貴んで今を賤しむ、且つ山水花鳥の如き、宋の數人、往昔に超越す、但だ其神妙を取る、其世代を論する勿くして可なりと、余謂ふ、書畫詩文皆世代に拘はらずして可なり。

余常に左氏が司馬に及ばざるの説を持す、其略に曰、人皆班の馬に及ばざるを知つて、左氏も亦司馬に及ばざるを知らざるなり、子長の文は猶ほ文人高士の水墨山水を爲るがごとし、略筆墨有つて、妙處は筆墨の外に在り、左氏は猶ほ畫匠の著色山水のごとし、固く規矩を守つて、敢て胡亂に一筆を下さざるなり、然も其神采秀發、氣韻流動を求むるに、多く得可からざるなり、左氏一部、首よ

神采秀發、氣韻流動、不可多得也。左氏一部、自首至尾、唯是一法、少變化。至史記、則縱橫變幻、使人把捉不得、所謂神明於法者。

左氏之不及司馬、猶列子之不及莊子也。朱子曰、孟子、莊子、文氣俱好、列子便有迂僻處。莊子全寫列子、又變得奇峻。胡元瑞筆叢曰、大抵列之文法、莊之文奇、列猶丘明、莊猶司馬、列規矩、剛而易入、莊崖岸、峻而難攀、兩段議論、皆所謂眼透紙背者。

前人不_レ必勝後人、如列子之不及莊子、左氏之不及司馬、范曄之不及陳壽、晉書之不及五代史、諸皆是也、豈得拘世代哉。

修史者知記歷代事實及文物制度、而不知摸寫其人之氣象、好尚、文章、言語之各殊、則

り尾に至る、唯た是れ一法、變化少し、史記に至つては、則ち縱橫變幻、人をして把捉し得ざらしむ、謂はゆる法に神明なるものなり。

四〇

左氏の司馬に及ばざるは、猶ほ列子の莊子に及ばざるがごとし、朱子曰、孟子、莊子、文氣俱に好し、列子は便ち迂僻の處あり、莊子は全く列子を寫し、又變じ得て奇峻なり、胡元瑞筆叢に曰、大抵列の文は法、莊の文は奇、列は猶ほ丘明のごとく、莊は猶ほ司馬のごとく、列は規矩剛れて入り易く、莊は崖岸峻にして攀ち難し、兩段の議論、皆謂はゆる眼、紙背に透る者なり。

前人必ずしも後人に勝らず、列子の莊子に及ばざる、左氏の司馬に及ばざる、范曄の陳壽に及ばざる、晉書の五代史に及ばざるが如きは、諸ろ皆是れなり、豈に世代に拘はるを得んや。

史を修する者は、歴代の事實及び文物制度を記すを知つて、其人の氣象、好尚、文章、言語の各殊を摸寫するを知ら

不足以爲史矣。故修史之難、在不失其時世之本色、使千載之下讀者如身在其時、親見其事也。司馬子長作史記、自黃帝迄漢武、上下三千餘年、論著纔五十萬言、而三代之時、自是三代之時、春秋戰國之時、自是春秋戰國之時、下至秦漢之際、又自是別樣、時人之氣象、好尙各自不同、使讀者想見其時風人品、是所以爲良史也。今倘有人編修我國史、亦宜效之、至如言語文章、則勢不可得、寫其本色焉。然亦求隨其時世、而少存其風趣可也。然此等妙筆、從何處得來、亦恐是可言而不可行者。

古書無謂我爲身者。蓋漢末俗語始有之也。三國志張飛曰、身是張翼德、是可以見其時

す。則ち以て史と爲すに足らざるなり。故に史を修するの難きは、其の時世の本色を失はずして、千載の下、讀者をして、身、其時に在つて、親ら其事を見るが如くならしむるに在り。司馬子長の史記を作る、黃帝より漢武に迄るまで、上下三千餘年、論著纔かに五十萬言、而して三代之時は自ら是れ三代之時、春秋戰國の時は、自ら是れ春秋戰國の時、秦漢の際に至つては、又自ら是れ別樣、時人の氣象、好尙各自、自ら同じからず、讀者をして、其時風人品を想見せしむ、是れ良史たる所以なり。今倘し人有り、我が國史を編修せば、亦宜しく之に效ふべし。言語文章の如きに至つては、則ち勢其本色を寫すを得可からず、然も亦其時世に隨つて、少しく其風趣を存するを求めて可なり。然も此等の妙筆、何れの處よりか得來らん、亦恐らくは是れ言ふ可くして行ふ可からざる者。

古書に我を謂つて身と爲す者無し。蓋漢末の俗語に始めて之有るなり。三國志張飛曰、身は是れ張翼德と、是れ

世之語氣矣、五代史王彥章曰、豹死留皮、人死留名之類、亦可想見其人之氣象矣、陳歐之所以爲良史也。

觀文辭者先須察其結構大勢如何、此果佳有小瑕累、未足爲病也、柳子厚云、古今號文章爲難、非謂比興之不足、恢拓之不遠、鑽礪之不工、頽頽之不除也、得之爲難、知之愈難耳、苟或得其高朗、探其深曠、雖有蕪敗、則爲日月之蝕也、大圭之瑕也、曷足傷其明、黜其實哉、善哉子厚之論文也、今人以其井蛙之見、妄評品文章、偶見小疵、譁言攻之、并其全體之美、棄擲不顧、矧其指以爲疵者、未必然耶、且其所自作、果無一疵可指乎、排人傳己、薄俗誠可歎、朱子嘗與門人同觀東坡之文、門

以て其時世の語氣を見る可し、五代史王彥章曰豹は死して皮を留め、人は死して名を留むの類、亦其人の氣象を想見す可し、陳歐の良史たる所以なり。

文辭を觀る者は、先づ須らく其結構の大勢如何と察すべし、此れ果して佳ならば、小瑕累有るも未だ病と爲すに足らざるなり、柳子厚云古今文章を號して難しと爲すは、比興の足らざる、恢拓の遠からざる、鑽礪の工ならざる、頽頽の除かざるを謂ふに非ざるなり、之を得るを難しと爲す、之を知る愈々難きのみ、苟も或は其高朗を得て其深曠を探らば、蕪敗有りと雖も、則ち日月の蝕なり、大圭の瑕なりと爲す、曷ぞ其明を傷つけ其實を黜くるに足らんやと、善いかな、子厚の文を論ずるや、今人其井蛙の見を以て、妄りに文章を評品し、偶々小疵を見るや、譁言之を攻めて其全體の美を并せ棄擲して顧みず、矧や其指して以て疵と爲す者、未だ必らずしも然らざるをや、且其自ら作る所、果して一疵の指す可き無きか、人を排して己を售る、薄俗誠に歎す可し、朱子嘗て門人と同じく東坡の文を觀る、門人其瑕を指摘す、朱子曰、渠が文大勢佳なり、小瑕有りと雖も其佳を妨げずと、公何と謂

人指摘其瑕、朱子曰、渠文大勢佳、雖有小瑕、不妨其佳、可謂公判矣。

凡觀人詩文者、虚心平氣、反覆數過、而後須思、我作之、果能勝之否、果能及之否、抑不可及、否、然後論其佳否、庶幾不謬、今人率以愛憎之口、妄加譏評於人文、否則矮人觀場、從人啼笑耳。

論文不問其美惡、惟簡短而後可、則濡墨吮筆、可一朝駕歐蘇之上、惟繁長而後可、則綴字滿紙、皆可壓倒孟韓、視字之多少、以爲文之高下、則三歲童子皆可以論定古今文章矣、楊升菴曰、繁非也、簡非也、不繁不簡亦非也、難非也、易非也、不難不易亦非也、繁有美惡、簡有美惡、難有美惡、易有美惡、惟求其美

ふ可し。

凡そ人の詩文を觀る者は、虚心平氣、反覆數過して後、須らく思ふべし、我れ之を作らば、果して能く之に勝るや否や、果して能く之に及ぶや否や、抑も及ぶ可からざるや否やと、然して後其佳否を論ぜば、庶幾くは謬らざらん、今人率ね愛憎の口を以て妄りに譏評を人の文に加ふ、否らずんば、則ち矮人の場を觀る、人に從ふて啼笑すのみ。

文を論じて其美惡を問はず、惟だ簡短にして後可ならば、則ち墨を濡ほし筆を吮へば、一朝にして歐蘇の上に躡す可し、惟だ繁長にして後可ならば、則ち字を綴つて紙に滿つ、皆孟韓を壓倒す可し、字の多少を視て、以て文の高下を爲さば、則ち三歳の童子皆以て古今の文章を論定す可し、楊升菴曰、繁は非なり、簡は非なり、繁ならず、簡ならず、亦非なり、難は非なり、易は非なり、難ならず、易ならず、亦非なり、繁に美惡有り、簡に美惡有り、難に美惡有り、易に美惡有り、惟だ其美を求むるのみと、知言なかる。

而已、知言哉。

大概西土人、性通達寬厚、喜同惡異之弊少、故互美其長、而棄其短、本土人性苛塞狹隘、動輒異同相軋、務護己短、好毀人長、一切莫不皆然、猜忌妬媚、雖出於沉溺名利之深、然亦其資性然也、好艱澁之文者、笑平易之文、喜平易之文者、譏艱澁之文、不知其各有美也、人情僻於好惡、不止詩文、試思之、天地之間、日月山川草木禽獸、賦形不同、千品萬殊、而各有其用、各有其美、是天地之所以爲大也、若以日毀月、以山譏川、以草木訕禽獸、則幾何不爲天地笑、

王武子云、未知文生於情、情生於文、此言極佳、先有意趣、而後下筆、所謂文生於情也、是

大概西土の人、性通達寬厚、同を喜み異を惡むの弊少し、故に互に其長を美として、其短を棄つ、本土の人性苛塞狹隘、動もすれば輒異同相軋り、務めて己が短を護り、好んで人の長を毀る、一切皆然らざるは莫し、猜忌妬媚、名利に沈溺するの深きに出づと雖も、然も亦其資性然なり、艱澁の文を好む者は平易の文を笑ひ、平易の文を喜む者は艱澁の文を譏る、其各、美を有するを知らざるなり、人情、好惡に僻す、止だ詩文のみならず、試みに之を思へ、天地の間、日月山川草木禽獸、賦形同じからず、千品萬殊、而して各、其用有り、各、其美有り、是れ天地の大と爲す所以なり、若し日を以て月を毀り、山を以て川を譏り、草木を以て禽獸を訕れば、則ち幾何か天地の笑と爲らざらん。

王武子云、未だ知らず、文の情に生ずるか、情の文に生ずるか、此言極めて佳、先づ意趣有つて後に筆を下す、謂

人人靡不知焉、隨筆而意生、隨意而筆轉、一轉更妙於一轉、所謂情生於文也、斯謂之妙境、然能解此者鮮矣。

言語妙處可意會而不可言傳也、故古今人論文談詩、其所說著者、纔其皮膚耳、至其妙處、則言語不可以狀焉、但才人獨能意會之而已、故才人之言、儘有味焉、若夫憤憤者之言、愈多愈可厭。

諸家傳注爲經史子集之累者不少矣、蓋著作之與考據家、肝腸意見絕不相同、訓詁人往往好牽強附會、斷章別句、遂使精意妙義索然嚼蠟無味、其爲累豈淺淺哉。

造語雅馴、一氣流貫、縱橫馳騁、不失法度、乃稱作手、造語雖巧、然氣脈不貫、則是剪綵之

はゆる情に生ずるなり、是れ人々知らざる辭し筆に隨つて意生じ意に隨つて筆轉す、一轉更に一轉よりも妙なり、謂はゆる情、文に生ずるなり、斯に之を妙境と謂ふ、然も能く此を解する者は鮮し。

言語の妙處は意會す可くして言傳す可からざるなり、故に古今人、文を論じ詩を談す、其の説著する所の者、纔かに其皮膚のみ、其妙處に至つては、則ち言語以て狀す可からず、但才人獨り能く之を意會するのみ、故に才人の言儘味有り、若し夫れ憤々者の言は、愈よ多くして愈よ厭ふ可し。

諸家の傳注、經史子集の累を爲す者少からず、蓋著作と考據家と、肝腸意見絶えて相同じからず、訓詁人、往々にして牽強附會を好み、章を斷ち句を別ち、遂に精意妙義をして索然として嚼蠟味ひ無からしむ、其累を爲す、豈に淺々ならんや。

造語雅馴、一氣にして流貫し、縱横し馳騁し法度を失はず、乃ち作手と稱す、造語巧なりと雖も、然も氣脈貫かざれば

花終無生氣矣、縱橫馳騁、無規矩法度、則是風顛漢之絮語、豈成言語哉。

柳子厚評韓文曰、世之模擬竄竊、取青媲白、肥皮厚肉、柔筋脆骨、而以爲辭者之讀之也、其大笑固宜、是子厚譏世之辭勝而氣弱者也。

敘事之奇古者、莫如檀弓穆天子傳焉、漢武飛燕內外傳、亦野史之古者、文家不容不讀、邦人論文者、大抵知字法與句法而已、未嘗知有篇法也、論文及篇法者、獨太宰德夫而已、然擇而不精、語而不詳、故其所作亦多失於此、豈不惜哉。

或曰、所謂抑揚頓挫、非文法也、西土及第場屋朗誦試卷之音節耳、余笑曰、音節固有抑

ば、則ち是れ剪綵の花、終に生氣無し、縱橫馳騁して、規矩法度無くんば、則ち是れ風顛漢の絮語、豈言語を成さんや。

柳子厚、韓文を評して曰、世の模擬竄竊、青を取り白を媲べ、肥皮厚肉、柔筋脆骨にして、以て辭と爲す者の之を讀むや、其大笑する固より宜なりと、是れ子厚世の辭勝ちて氣弱きを譏るなり。

敘事の奇古なる者は、檀弓穆天子傳に如くは、莫し、漢武飛燕內外傳も、亦野史の古なる者、文家讀まざる容からず。邦人の文を論ずる者は、大抵字法と句法とを知るのみ、未だ嘗て篇法有るを知らざるなり、文を論じて篇法に及ぶ者は、獨太宰德夫のみ、然も擇んで精しらかず、語つて詳ならず、故に其作る所亦多く此に失す、豈惜しからずや。

或ひと曰、謂はゆる抑揚頓挫は文法に非ざるなり、西土の及第場屋に試卷を朗誦するの音節のみと、余笑つて

揚頓挫、而文法亦有之、今試讀孟韓諸家之文、其抑揚頓挫之法、可一一指示、是何關音節哉、如子之言、所謂知其一、而未知其二也、藝苑名言曰、唐人拗體律詩有二種、其一單句拗第幾字、則偶句亦拗第幾字、抑揚抗墜、讀之如一片宮商、是所謂音節之抑揚也、清儲欣評韓文公答呂監山人書曰、抑極忽揚、抑處盡揚處倍、有聲光氣饒得、司馬子長之神、是所謂文法之抑揚也、何關音節哉、鹽鐵論經世實用之書、儒者固不可不讀、而其文辭亦漢文之傑然者。

陸宣公奏議、其經世之略、與賈太傅、伯仲、可謂真才實學矣、而其文辭典質溫雅、雖不免駢儷之體、然亦唐文之傑出者。

曰、音節固より抑揚頓挫有り、而して文法にも亦之れ有り、今試みに孟韓諸家の文を讀むに、其抑揚頓挫の法一々指示す可し、是れ何ぞ音節に關せんや、子の言の如きは、謂はゆる其一を知つて未だ其二を知らざるなり、藝苑名言に曰、唐人、拗體律詩二種有り、其一單句、第幾字を拗すれば、則ち偶句も亦第幾字を拗す、抑揚抗墜、之を讀めば一片の宮商の如しと、是れ謂はゆる音節の抑揚なり、清の儲欣、韓文公が呂監山人に答ふる書を評して曰、抑極まつて忽ち揚がる、抑處盡きて揚處倍す、聲光氣饒有り、司馬子長の神を得たりと、是れ謂はゆる文法の抑揚なり、何ぞ音節に關せんや。

鹽鐵論は經世實用の書なり、儒者固より讀まざる可からず、而して其の文辭も亦漢文の傑然たる者なり。

陸宣公奏議、其經世の略、賈太傅と伯仲す、真才實學と謂ふ可し、而して其文辭典質溫雅、駢儷の體を免れずと雖も、然も亦唐文の傑出せる者なり。

柳子厚狀段太尉逸事、咄咄如生、與馬遷相上下、而其作南霽雲廟碑、皆駢儷之語、蓋柳文佳者絕佳、而不免駁雜、固不如韓文之篇篇皆高古絕妙也。

李翱、字習之、韓門之高足也、樂善好士、見人有一善一能、稱譽振拔、必達而後止、自謂引薦賢俊、如朝饑求飧、如久曠思通、如見天鹿而不得、親其爲人可知也、當時韓文公亦愛好士、然習之以爲未足、貽書切切刺譏、習之文逼似昌黎、其拜禹言曰、惟天地之無窮兮、哀生人之常勤、往者吾弗及兮、來者吾弗聞、已而已而、讀之亦可以想見其賢矣。

唐孫樵作文高潔、如刻武侯碑陰、簡明雅健、頓挫入妙、其與文論文書、及與王霖秀才書、

柳子厚段太尉逸事を狀す、咄々生けるが如し、馬遷と相上下す、而して其南霽雲廟碑を作る、皆駢儷の語なり、蓋柳文の佳なる者は絶佳なり、而して駁雜を免れず、固より韓文の篇々皆高古絶妙なるに如かざるなり。

李翱字は習之、韓門の高足なり、善を樂み士を好む、人の一善一能有るを見て、稱譽振拔、必ず達して後止む、自ら謂ふ、賢俊を引薦する、朝饑の飧を求むるが如く、久曠の通を思ふが如く、天鹿を見て親むを得ざるが如く、其人と爲り知る可きなり、當時韓文公も亦士を愛好す、然ども習之以て未だ足らずと爲し、書を貽つて切々として刺譏せり、習之の文は昌黎に逼似す、其拜禹言に曰、惟れ天地の窮り無き、生人の常に勤むるを哀み、往く者は吾れ及ばず、來る者は吾れ聞かず、已まん已まん、之を讀むも亦以て其賢を想見す可し。

唐の孫樵、文を作る高潔、武侯の碑陰に刻するが如き、簡明雅健、頓挫妙に入る、其友と文を論ずる書、及び王霖秀才

自述淵源、謂得作文之真訣、蓋非虛妄也、著孫氏西齋錄、論編年史法、如高祖殺太子建成者何、黜功循愛、譏失教也、李勣立皇后武氏者何、忘諫贊匪、懲廢命也之類、數條蓋朱子綱目之權輿也、孫樵自鈔其文三十五篇、編成十卷、又自序之、在唐中和四年。

歐陽公五代史、伶官傳尤妙、與馬遷相上下、范曄陳壽皆不能及也。

王荆公作文、繁簡皆妙、如七仁宗萬言書、最繁而最美者、如讀柳宋元傳、讀孟嘗君傳、至簡而至美者。

韓文公之學孟子、蘇長公之學莊子、毫無模擬剽竊之痕、居然有閉門造車、開門合轍之妙。

才に與ふる書、自ら淵源を述べ、讀ふ文を作るの真訣を得たりと、蓋、虛妄に非ざるなり、孫氏西齋錄を著して、編年史法を論ず、高祖太子建成を殺すは何ぞ、功を黜け、愛に循ふ、教を失ふを譏るなり、李勣の皇后武氏を立つるは何ぞ、諫を忘れ、匪を贊す、命を廢するを懲らすなどの類の如き數條、蓋、朱子綱目の權輿なり、孫樵自ら其文を鈔すること三十五篇、編して十卷と爲し、又自ら之に序す、唐の中和四年に在り。

歐陽公の五代史、伶官傳尤も妙なり、馬遷と相上下す、范曄陳壽皆及ぶこと能はざるなり。

王荆公文を作る、繁簡皆妙に仁宗に上る萬言書の如き、最も繁にして最も美なる者、柳宗元の傳を讀む、孟嘗君の傳を讀むの如きは、至簡にして至美なる者なり。

韓文公の孟子を學び、蘇長公の莊子を學ぶ、毫も模擬剽竊の痕無し、居然として門を閉ぢて車を造り、門を開いて轍に合ふの妙有り。

明焦竑、焦氏筆乘云、近世談文、率宗史記、然子長精神結構、茫然未解、第襲其語耳、此史公之盜臣也、向讀荆公短文數首、真可與其論贊相頡頏、讀刺客傳、伍子胥廟銘、觀其筆力曲折、真脫胎換骨手也、余謂明人所謂古文皆第剽竊古語耳、至其法度神妙、則未嘗夢見、弱侯之言確哉。

古往今來、天地之間、事物之盡善盡美者、蓋少矣、雖聖人猶未免焉、如湯之有慙德、武之未盡善、伯夷之隘、柳下惠之不恭、是也、如韓文公之文、可謂前無古人、後無來者矣、然其文亦未免瑕類、如送孟東野序、戶絃家誦者、而人或譏其臧孫辰、荀卿與孟子竝稱、然是猶可、余按此篇首句曰、大凡物不得其平、

明の焦竑の焦氏筆乘に云、近世の文を談ずる、率ね史記を宗とす、然ども子長の精神結構、茫然として未だ解せず、第だ其語を襲ふのみ、此れ史公の盜臣なり、向に荆公の短文數首を讀むに、其論贊と相頡頏す可し、讀刺客傳伍子胥廟の銘、其筆力の曲折を觀るに、真に脱胎換骨の手なりと、余謂ふ明人の謂はゆる古文は皆第だ古語を剽竊するのみ、其法度の神妙に至つては、則ち未だ嘗て夢見せず、弱侯の言確なるかな。

古往今來、天地の間、事物の善を盡くし美を盡くす者蓋少し、聖人と雖も猶未だ免かれず、湯の慙徳有る、武の未だ善を盡くさざる、伯夷の隘、柳下惠の不恭の如きは、是れなり、韓文公の文の如き、前に古人無く、後に來者無しと謂ふ可し、然れども、其文亦未だ瑕類を免かれず、孟東野を送る序の如き、戶絃家誦する者、而して人或は其臧孫辰、荀卿と孟子と竝稱するを譏る、然ども、是れ猶ほ可なり、余按するに、此篇首句に曰、大凡物其平を得ざれば、則ち鳴ると、若し夫れ孔孟之を不平の鳴と謂ふも、可なり、畢兩禹、堯伊、周公の如き、皆身順境に在り、其道の

則鳴、若夫孔孟謂之不平鳴可也、如阜陶禹、夔伊尹、周公、皆身在順境、其道之行、毫無遺憾、豈可謂之不平哉、洪景盧容齋隨筆亦詳辯之、今不煩舉、王羲之書家之龍鳳也、楊升菴卅鉛總錄云、王右軍書帖多悞字、皆玉瑕錦類、不可效尤、由是視之、文如退之、書如羲之、皆未免疵病、天地之大、人猶有所憾、日月之明、有時而蝕、奚足傷其大且明哉。

戰國策杜赫曰、譬之如張羅者、張之於無鳥之所、則終日無所得矣、張於多鳥處、則又駭鳥矣、必張於有鳥無鳥之際、然後能多得鳥矣、文奇甚、惟坡翁獨得此妙、其禮以養人為本論曰、禮未始有定論也、然而不可以出於人情之外、則亦未始無定論也、執其無定、以

行はるる、毫も遺憾無し、豈之を不平と謂ふ可けんや、洪景盧の容齋隨筆亦詳かに之を辯ず、今煩舉せず、王羲之は書家の龍鳳なり、楊升菴の卅鉛總錄に云、王右軍書帖に悞字多し、皆玉瑕錦類、尤に效ふ可からずと、是に由つて之を視れば、文退之の如き、書羲之の如き、皆未だ疵病を免かれず、天地の大なる、猶ほ憾む所有り、日月の明かなるも時有時て蝕す、奚ぞ其大且明を傷つくるに足らんや。

戰國策に杜赫曰、之を譬ふるに羅を張る者の如し、之を鳥無きの所に張れば、則ち終日得る所無く、鳥多き處に張れば、則ち又鳥を駭かさん、必ず鳥有り鳥無きの際に張り、然る後に能く多く鳥を得んと文の奇なる甚し、惟、坡翁獨り此妙を得たり、其禮は人を養ふを以て本と爲すの論に曰、禮は未だ始めより定論有らざるなり、然り而して以て人情の外に出づ可からず、則ち亦未だ始めより定論無きにあらざるなり、其無定を執つて以て定論と爲さば、則ち塗の人皆以て禮を爲す可しと、又、王者夷狄を

爲定論、則塗之人皆可以爲禮、又王者不治夷狄、論曰、是故以不治治之、治之以不治者、乃所以深治之也、又清風閣記曰、所謂身者、汝之所寄也、而所謂閣者、汝之所以寄、所寄也之類甚多、坡翁之文自莊子國策轉化來、雄辯痛快、奇奇怪怪、無復滯碍。

王弼州云、讀子瞻文、見才矣、然似不讀書者、余謂是乃子瞻之所以妙於文也、子瞻豈盜竊古語者哉、不止子瞻、韓歐亦然、不止韓歐、孟荀莊列一切古文皆然、凡爲文、多援典故、多用古語、皆未至者也、借喪馬誇富者、可愧之甚、柳子厚與楊誨之書曰、足下所爲書言文章極正、辭奧雅、但用莊子國語文字太多、反累正氣、果能遺是、則大善矣、視子厚之言、

治めざる論に曰、是の故に治めざるを以て之を治む、之を治むるに治めざるを以てするは、乃ち深く之を治むる所以なりと、又清風閣の記に曰、謂はゆる身は汝の寄する所なり、而して謂はゆる閣は汝の寄する所を寄する所、以なりの類甚だ多し、坡翁の文、莊子國策より轉化し來る、雄辯痛快、奇々怪々、復滯碍する無し。

王弼州云、子瞻の文を讀めば才を見る然も書を讀まざる者に似たりと余謂へらく、是れ乃ち子瞻の文に妙なる所以なり、子瞻豈古語を盜竊する者ならんや、止に子瞻のみならず、韓歐亦然り、止に韓歐のみならず、孟荀莊列一切の古文皆然り、凡そ文を爲るに、多く典故を援き、多く古語を用ふるは、皆未だ至らざる者なり、喪馬を借りて富に誇るは愧つ可きの甚だしきなり、柳子厚が楊誨之に與ふる書に曰、足下爲る所の書、文章を言ふこと極めて正しく、辭奧雅、但だ莊子國語の文字を用ふる太だ多し、反つて正氣を累す、果して能く是を遺れば、則ち大に善しと、子厚の言を視れば、乃ち元美の憤憤たるを知るなり。

乃知元美之慣慣也。

大家之詩文別有一種雄豪之氣、自不與小
 家而目同也、世有詩文精巧足以名家、而終
 不可列大家品目者、是其才力有限、非一時
 勉強可能及也、是在其詩文之氣力、而不
 著作之多少也、故名家百篇不能敵大家之
 一文一詩、是可與知者道也、或以著作之多
 少、分大家小家、果然則小兒之學語數百篇
 皆可以厭倒古人大家矣、豈可矣哉。

元許衡劉因以道學名、皆博學能文、其他有
 文名者、元好問趙孟頫吳澄姚燧馬祖常范
 德機楊仲弘虞集揭傒斯張雨楊廉夫姚樞
 黃潛柳貫吳涑危素十數人、或文或詩、要可
 比宋之小家數、至明文運又旺、名家不啻千

大家の詩文、別に一種雄豪の氣有り、自ら小家の面目と
 同じからざるなり、世に詩文の精巧以て家に名くるに足
 りて、終に大家の品目に列す可からざる者有り、是れ其
 才力限り有り、一時勉強の能く及ぶ可きに非ざるなり、
 是れ其詩文の氣力に在つて、著作の多少に在らざるな
 り、故に名家の百篇は、大家の一文一詩に敵すること能は
 ず、是れ知者と道ふ可きなり、或は著作の多少を以て、大
 家小家を分つ、果して然らば則ち小兒の語を學ぶ數百
 篇皆以て古人大家を厭倒す可し、豈可ならんや。

元の許衡劉因は道學を以て名あり、皆博學能文なり、其
 他、文名有る者、元好問趙孟頫吳澄姚燧馬祖常范德機
 楊仲弘虞集揭傒斯張雨楊廉夫姚樞黃潛柳貫吳涑危
 素の十數人、或は文、或は詩、要は宋の小家の數に比す可
 し、明に至つて、文運又旺なり、各家世に千百のみなら
 ず、然も亦皆宋人に髣髴すること能はず、獨り王陽明は
 宋の大家と比肩して立つ可し。

百然亦皆不能髣髴宋人、獨王陽明可與宋
大家比肩而立矣。

明文之佳者、莫如王陽明焉、遺言措意、縱橫
開闔、靡不如意、方正學、徐文長亦恢恢乎疾
馳矣、簡潔雅馴、莫如劉青田、富瞻雄偉、莫如
宋景濂、王弇州、藝苑卮言曰、宋景濂如酒池
肉林、直是豐饒、而寡芍藥之和、方希直如奔
流滔滔一瀉千里、而濛洄混濛之狀頗少、可
謂具論矣。

從前論明文者、未嘗及王陽明、余讀陽明文
錄、縱橫俊偉、出入高下、靡不如意、古人云、杜
詩韓筆愁來讀、似倩麻姑痒處搔、余於王文
亦云、嘗聞木順菴先生甚好韓文、後又喜陽
明、平居不釋手、偃武以來、詩貴盛唐、先生爲

明文の佳なる者は、王陽明に如くは莫し、言の遣り意を措く、縱橫開闔、意の如くならざるは靡し、方正學、徐文長亦恢々乎として疾馳す、簡潔雅馴なるは劉青田に如くは莫し、富瞻雄偉なるは宋景濂に如くは莫し、王弇州の藝苑卮言に曰、宋景濂は酒池肉林の如し、直に是れ豐饒にして芍藥の和寡し、方希直は奔流の滔々として一瀉千里なるが如く、而して濛洄混濛の狀頗る少しと、具論と謂ふ可し。

從前、明文を論ずる者、未だ嘗て王陽明に及ばず、余陽明文錄を讀むに、縱橫俊偉、出入高下、意の如くならざるは靡し、古人云、杜詩韓筆愁ひ來つて讀めば、麻姑を倩て痒處を搔くに似たりと、余、王文に於ても亦云、嘗て聞く、木順菴先生甚だ韓文を好む、後又陽明を喜び、平居手を釋かずと、偃武以來、詩、盛唐を貴ぶは、先生ふ觸矢たり、夫れ先生學德純厚、詩文を以て顯はれず、然れども慧眼炬の

矯矢、夫先生學德純厚、不以詩文顯、然可謂
慧眼如炬矣。

朱文公之文、白香山之詩、皆不依放古人、獨
別創一體、讀之似平穩、而實甚奇、俱可見其
膽識之大、楊升菴曰、剖析性理之精微、則日
精月明、窮詰邪說之隱遷、則神搜靈擊、其感
激忠義、發明離騷、則苦雨凄風之變態、其泛
應人事、游戲翰墨、則行雲流水之自然、其紫
陽之文乎、是善論朱子之文者。

余在昌平學舍、閱寫本呂東萊先生左氏博
議、比之舶來印本、及本邦翻刻諸本、其文繁
長、竹數亦多、印本蓋後人厭其繁蕪、而刪之
者、意王弼州之徒爲之歟、然未能考也、讀博
議、亦知東萊學殖之富、才力之雄、林下偶譚

如しと謂ふ可し。

朱文公の文、白香山の詩、皆古人に依放せず、獨り別に一
體を創む、之を讀むに平穩に似たり、而して實は甚だ奇
なり、俱に其膽識の大を見る可し、楊升菴曰、性理の精微
を剖析すれば、則ち日精月明、邪說の隱遷を窮詰すれば、
則ち神搜靈擊、其忠義に感激し、離騷を發明すれば、則ち
苦雨凄風の變態、其人事に泛應し、翰墨に游戲すれば、則
ち行雲流水の自然あるもの、其れ紫陽の文か、是れ善
く朱子の文を論ずる者。

余昌平學舍に在り、寫本の呂東萊先生が左氏博議を閱
す、之を舶來の印本及び本邦翻刻の諸本に比するに、其
文繁長、竹數も亦多し、印本は蓋し後人其繁蕪を厭ふて
之を刪れる者なり、意ふに王弼州の徒之を爲すか、然も
未だ考ふること能はざるなり、博議を讀んで亦東萊が學
殖の富、才力の雄を知る、林下偶譚に云、東萊早年、文章詞
科中に在りて、最も傑然の者と稱す、然も滿續排比の態、

云、東萊早年、文章在詞科中、最號傑然者、然藻績排比之態、要亦消磨未盡、中年方就平實、惜其不多作、而遂無年耳。

一日書賈攜陳龍川文集來示余、求價甚高、余貧不能償、乃借得一月讀之、議論恢奇、如其爲人、至如武庚祿父般之孝子、管叔蔡叔般之忠臣之論、怪奇驚人、然亦原於坡翁、武王論龍川名亮、字同甫、朱文公之友也、往復論學、見文集、其學雖詭、要亦一世豪傑也、方正學謂使孝宗用龍川、足以恢復中原、可謂公論確言矣、及龍川沒、朱子題其墓曰龍川陳先生之墓、亦可見其始終友誼相全矣、陸象山、余讀其語錄、未見其文集也、東萊屢稱其文、象山少朱子、殆二十歲、而朱子敬重之、

要亦消磨して未だ盡くさず、中年方に平實に就く、惜むらくは其多く作らずして遂に年無きのみ。

一日書賈陳龍川文集を携へ來つて余に示し價を求むること甚だ高し、余貧にして償ふこと能はず、乃ち借り得る一月にして、之を讀むに、議論怪奇其人と爲りの如し、武庚祿父は般の孝子、管叔蔡叔は般の忠臣の論の如きに至つては怪奇人を驚かす、然も亦坡翁の武王論に原く、龍川名は亮、字は同甫、朱文公の友なり、往復學を論ず、文集に見ゆ、其學、詭と雖も、要するに亦一世の豪傑なり、方正學謂ふ、孝宗をして龍川を用ひしめば、以て中原を恢復するに足らんと、公論確言と謂ふ可し、龍川没するに及び朱子其墓に題して龍川陳先生の墓と曰ふ、亦其始終友誼の相余きを見る可し、陸象山、余其語錄を讀むも、未だ其文集を見ざるなり、東萊屢稱其文を稱す、象山は朱子より少きこと殆んど二十歲、而して朱子之を敬重す、象山、嘗て君子小人義利に喩るの章を講ず、朱子經を下座に執つて之を聽く、鬻湖の命に、象山詩を作り、謂朱子を陵す、而して朱子次韻の詩、益と濃厚和敬盛徳の氣象、瀾然

象山嘗講君子小人喻義利之章、朱子執經下座聽之、鵝湖之會、象山作詩語侵朱子、而朱子次韻之詩、益溫厚和敬、盛德之氣象、滿然可掬焉、學朱子者、不可不知也、近世偏固怪僻、妄自尊大、毫髮不與己合者、輒與之絕交、而託名於道學、吁是其爲道學可知也已。

宋吳氏林下偶譚曰、歐公凡遇後進投卷可采者、悉錄之爲一冊、名曰文林、公爲一世文宗、於後進片言隻字、乃珍重如此、今人可以鑒矣、余謂是即公之所以爲文宗也、嘗讀公與劉原父書曰、得介甫新詩數十篇、皆奇絕、喜此道不寂寞、以相告、又答梅聖俞書曰、讀蘇軾書、不覺汗出、快哉快哉、老夫當避路放

として掬す可し、朱子を學ぶ者、知らざる可からざるなり、近世偏固怪僻、妄りに自ら尊大にし、毫髮も己と合はざる者は、輒ち之と交りケ絶つ、而して名を道學に託せり、吁是れ其道學たる知る可きのみ。

宋の吳氏林下偶譚に曰、歐公凡そ後進投卷采る可き者に遇へば悉く之を録して一冊と爲し、名けて文林と曰ふ、公は一世の文宗たり、後進の片言隻字に於て、乃ち珍重すること此の如し、今人以て鑒す可し、余謂ふ是れ即ち公の文宗たる所以なり、嘗し公の劉原父に與ふる書を讀むに、曰、介甫の新詩數十篇を得たり、皆奇絶、喜ぶ此道寂寞ならざるなり、以て相告ぐと、又梅聖俞に答ふる書に曰、蘇軾の書を讀むに、不覺汗出づ、快なるかな快なるかな、老夫當に路を避け、他に一頭を出すの地を放つ可きなり、喜ぶ可し、喜ぶ可しと、公人の善を喜び、人の美を

他出一頭地也、可喜、可喜、公喜人之善、成人之美、如此、蓋以其天分甚高耳、明胡宗憲示茅坤以白鹿表、茅坤咤曰、是非吾荆川不能作也、唐荆川蓋其師也、既而知徐文長所作、乃曰、惜末弱耳、是其妬媚之情不能自掩也、大抵明儒相忌相排、不翅一茅坤也、視於歐公、可以見人品薰蕕之別矣、余讀茅氏文集、不得一佳作、蓋不足爲文長之奴、宜乎其不能猜忌也、古人曰、毀生於嫉、嫉生於不勝、信哉言也。

徐文長善書、所著玄鈔類摘、纂古今書法、頗精博、又能畫、嘗自次第其所能、曰書一詩二文三畫四、以余觀之、其詩非無奇句妙語、然近詭僻、不如文之恢奇精妙也、袁中郎評文

成すこと此の如し、蓋し其天分甚だ高きを以てのみ、明の胡宗憲茅坤に示すに白鹿表を以てす、茅坤咤して曰、是れ吾が荆川に非ずんば作ること能はざるなりと、唐荆川は蓋其師なり、既にして徐文長の作る所なるを知つて、乃ち曰、惜むらくは末弱なるのみと、是れ其妬媚の情自ら掩ふ能はざるなり、大抵明儒相忌み相排す、翅に一茅坤のみならず、歐公に視べて人品薰蕕の別を見る可し、余茅氏文集を讀むに一佳作を得ず、蓋し文長の奴と爲るに足らざるなり、宜なるかな其猜忌に堪へざるや、古人曰、毀は嫉に生じ、嫉は勝たざるに生ずと、信なるかな言や。

徐文長書を善くす、著す所の玄鈔類摘、古今の書法を纂むること頗る精博、又畫を能くす、嘗て自ら其所能を次第して曰、書一詩二文三畫四と、余を以て之を觀るに、其詩奇句妙語無きに非ず、然も詭僻に近し、文の恢奇精妙に如かざるなり、袁中郎、文長の詩を評して、有明一人と

長之詩爲有明一人恐僻其所好耳。

明李于鱗王元美剽竊古語以爲古文不知文之古今在結構而不在于字句之末也結構合古法雖用俗語不害爲古且夫古文之美者莫如孟子莊子左氏公穀國語國策史記果剽竊詩書耶其引詩書必曰詩云云書云云至自撰之語未嘗摭詩書一語是韓文公之所以去陳言也物茂卿云退之去陳言而古則荒矣吁陳言腐語可以爲古哉不思之甚如于鱗比玉集序讀之似謎語誠俳優之語哉。

何李李王之詩文譬猶劇場中正末淨丑戲子之語言模擬文飾太過強笑強哭毫無神氣故乍讀之可喜再讀之使人羞赧。

爲す恐らくは其の好む所に僻するのみ。

明の李于鱗王元美古語を剽竊して以て古文と爲す知らず文の古今は結構に在り而して字句の末に在らざるなり結構古法に合へば俗語を用ふと雖も古たるに害せず且つ夫れ古文の美なる者は孟子莊子左氏公穀國語國策史記に如くは莫し果して詩書を剽竊せるか其の詩書を引く必ず曰く詩に云々書に云々と自撰の語に至つては未だ嘗て詩書の一語を摭まず是れ韓文公の陳言を去る所以なり物茂卿云退之陳言を去る而して古は則ち荒すと吁陳言腐語以て古と爲す可けんや思はざるの甚し于鱗の比玉集の序の如きは之を讀むに謎語に似たり誠に俳優の語なるかな。

何李李王之詩文は譬へば猶ほ劇場中の正末淨丑戲子の語言のごとし模擬文飾太過ぎたり強笑強哭毫も神氣無し故に乍ち之を讀めば喜ぶ可きも再び之を讀めば人をして羞赧せしむ。

王弇州喜于鱗之文、晚年稍悟其非、遽慕東坡、然不及矣、觀弇州續稿、可以見焉。

明文人歸震川、唐荆川之輩、與于鱗、元美互相排笑、獨元美晚年稍悟其非、弇州續稿與徐宗伯書曰、弟數年來甚推轂韓歐諸賢、以爲大雅之文、故當於熙甫不薄、第無由相聞耳、可見其悔悟也、第于鱗讀書不博、且早逝、未及悟耳、歸有光、字熙甫、震川其號、與荆川皆宗歐、蘇然氣弱不振、蓋亦非善學者也。

在漢文、好剽竊他書者、淮南鴻烈是也、明人所謂古文辭之祖也、王元美作序、極稱揚之、然其書元非出於劉安一手、故頗冗複割裂、不足以爲法也、余幼時再三讀之、後稍覺可厭、以其無生氣也。

王弇州于鱗の文を喜び、晩年に稍其非を悟る、遽かに東坡を慕ふ、然も及ばず、弇州續稿を觀て以て見る可し。

明の文人歸震川、唐荆川の輩、于鱗、元美と互に相排笑す、獨り元美晩年に稍其非を悟る、弇州續稿、徐宗伯に與ふる書に曰、弟數年來甚だ韓歐の諸賢を推轂す、以爲へらく、大雅の文なりと、故に當に熙甫に於て薄からざるべし、第相聞するに由無きのみと、其悔悟を見る可きなり、第于鱗讀書博からず、且つ早逝す、未だ悟るに及ばざるのみ、歸有光、字は熙甫、震川は其號なり、荆川と皆歐蘇を宗とす、然も氣弱にして振はず、蓋し亦善く學ぶ者に非ざるなり。

漢文に在つて、好んで他書を剽竊する者は、淮南鴻烈是れなり、明人の所謂古文辭の祖なり、王元美序を作り、極めて之を稱揚す、然も其書元と劉安の一手に出づるに非ず、故に頗る冗複割裂せり、以て法と爲すに足らざるなり、余幼時再三之を讀み、後稍厭ふ可きを覺ゆ、其生氣無きを以てなり。

蘇老泉曰、今夫繡繪綿縠衣服之翳美者也、尺寸而割之、錯而紉之、以爲服、則締縉之不若、李王物服所謂古文辭者、無乃類此乎。

善文不必博學、博學不必善文、古人曰、好箇歐九可惜不讀書、而歐文之妙與日月爭光、是善文不必博學也、宋劉原父、明楊升菴、其學該博、古今少比、而文章竝皆不絕佳、是博學不必善文也、若我先輩、鳩巢之學、不如東涯之博、東涯之文、不如鳩巢之佳、則文章豈以才識爲先歟。

袁中郎作山水遊記甚輕妙、讀之使人想見其景勝、飄然在其地矣、至於議論非其所長也。

清人之文、能入細而不能爲大、秦漢古文、大

蘇老泉曰、今夫繡繪綿縠は衣服の美を翳めたる者なり、尺寸にして之を割き錯して之を紉し、以て服と爲せば、則ち縉縉にも之れ若かずと、李王物服の謂はゆる古文辭は乃ら此に類する無からんか。

文を善くす、必ずしも博學ならず、博學なるは、必ずしも文を善くせず、古人曰、好箇の歐九惜む可し書を讀まずと、而して歐文の妙は日月と光を争ふ、是れ文を善くす、必ずしも博學ならざるなり、宋の劉原父、明の楊升菴、其學該博、古今比少し、而して文章竝に皆絶佳ならず、是れ博學なるは必ずしも文を善くせざるなり、我が先輩の若き、鳩巢の學は東涯の博きに如かず、東涯の文は鳩巢の佳なるに如かず、則ち文章は豈んど才識を以て先と爲すか。

袁中郎、山水遊記を作る、甚だ輕妙之を讀むに人をして其景勝を想見し、飄然として其地に在らしむ、議論に至つては其長する所に非ざるなり。

清人の文能く細に入る、而して大を爲す能はず、秦漢の

抵龔枝大葉之文、氣骨雄壯、豪蕩不羈、所以爲高也、清人之文、唯於枝葉上粉澤、是所以不及也。

偃武以來、諸儒輩出、然風氣未開、讀書率生吞活剝、未能詳解文理、享保年間、物徂徠出、才氣超卓、始悟西土之文理、自以爲獨得之祕、於是蔑視先儒、傲睨海內、造爲新說、名曰古學、高言虛喝、以風靡一世、當時諸儒不心服者、欲與之抗辯、而才力不足、徒憤惋而已、可勝歎哉。

物服二子之文、謬誤不少矣、然有二子之才學者、求之今日、未易得也、浮薄之徒、攻排詆訶、不遺餘力、甚者竄改其文、以求勝焉、然視其所作、不足爲二子之奴、豈能駕而上之哉、

古文は、大抵龔枝大葉の文、氣骨雄壯、豪蕩不羈なり、高しと爲す所以なり、清人の文は、唯だ枝葉上に於て粉澤す、是れ及ばざる所以なり。

偃武以來、諸儒輩出す、然も風氣未だ開けず、讀書率ね生吞活剝、未だ詳に文理を解する能はず、享保年間、物徂徠出づ、才氣超卓、始めて西土の文理を悟り、自ら以て獨特の祕と爲す、是に於て先儒を蔑視し、海内に傲睨し、新説を造爲し、名づけて古學と曰ふ、高言虛喝、以て一世を風靡す、當時の諸儒、心服せざる者、之と抗辯せんと欲す、而して才力足らず、徒らに憤惋するのみ、歎するに勝ふ可けんや。

物服二子の文、謬誤少からず、然も二子の才學有る者は、之を今日に求むるも未だ得易すからざるなり、浮薄の徒、攻排詆訶、餘力を遺さず、甚しき者は、其文を竄改して以て勝つを求む、然も其作る所を視るに、二子の奴たるに足らず、豈能く駕して之に上らんや。

茂卿篤信李王、終身不疑、然其才實出李王之上、茂卿之文、氣骨矯矯、筆力俊利、李王迂僻、不快利、清人斥李王之詩文爲僞體、太宰德夫縣次公、皆茂卿之徒也、譏李王之文爲併體、皆確論不誣也、噫、李王捨命作詩文、而取笑於天下後世、悲夫。

伊藤東涯謂徂徠之文、譬猶著鬼臉、恐嚇嬰兒、是尤善狀其文也。

徂徠之才、豪蕩不羈、子遷之才、輕妙俊利、但恨過信李王、誤用其才。

偃武以來、物服之外、能文者莫如室鳩巢、藤東野焉、善詩者莫如新井白石、梁蛟巖焉、東野名煥圖、字東壁、學于徂徠、年三十七歿、有遺稿三卷、鍛鍊未精、然文有氣力、有光燄、可

茂卿篤く李王を信じて終身疑はず、然も其才實は李王の上に出づ、茂卿の文、氣骨矯々、筆力俊利、李王は迂僻にして快利ならず、清人李王の詩文を斥けて僞體と爲す、太宰德夫縣次公、皆茂卿の徒なり、李王の文を譏つて併體と爲す、皆確論にして誣ひざるなり、噫、李王命を捨て、詩文を作り、而して笑ひを天下後世に取る、悲いかな。

伊藤東涯徂徠の文を謂ふ、譬へば猶ほ鬼臉を著けて嬰兒を恐嚇するがごとしと、是れ尤も善く其文を狀するなり。

徂徠の才は豪蕩不羈、子遷の才は輕妙俊利、但恨むらくは李王を過信し、其才を誤用せり。

偃武以來、物服の外、文を能くする者は、室鳩巢、藤東野に如くは莫し、詩を善くする者は、新井白石、梁蛟巖に如くは莫し、東野名は煥圖、字は東壁、徂徠に學ぶ、年三十七にして歿す、遺稿三卷有り、鍛鍊未だ精ならず、然も文に氣力有り、光燄有り、其才の高きを見る可し、天若し假すに

見其才之高矣。天若假以年則非物服諸子之所及也。蛻巖名邦美、字景鸞、始學宋詩、歐蘇范陸無所不讀、又喜徐文長、袁中郎、晚年一宗李杜、其詩縱橫肆睢、靡所不有、雖頗多瑕類、然要之非當時諸家之所及也。備前湯元禎、文會雜記曰、蛻巖與東野、未嘗相知、而彼此慕其才、東野嘗仕某侯、無幾致仕、蛻巖與其友謀欲薦東野於水府、使爲史館修撰、乃始相見於東都、吳服街、有唱和之詩、後十餘日、東野卒、蛻巖歎惜不已云、夫二子學術文詩、趨向不同、然相知至深、不與世儒以井蛙之見而黨同伐異者同也。

新井白石、經世之才、可比賈太傅、陸宣公、如詩文、特其餘事耳、著述贍富、皆俚言國字、而

年を以てせば、則ち物服諸子の及ぶ所に非ざるなり、蛻巖名は邦美、字は景鸞、初め宋詩を學ぶ、歐蘇范陸讀まざる所無し、又徐文長、袁中郎を喜び、晚年一に李杜を宗とす、其詩縱橫肆睢、有らざる所、靡し頗る瑕類多しと雖も、然も之を要するに當時諸家の及ぶ所に非ざるなり、備前の湯元禎の文會雜記に曰、蛻巖、東野と未だ嘗て相知らず、而して彼此其才を慕ふ、東野嘗て某侯に仕ふ、幾ばくも無くして致仕す、蛻巖其友と謀つて、東野を水府に薦め、史館修撰たらしめんと欲す、乃ち始めて東都吳服街に相見、唱和の詩有り、後十餘日、東野卒す、蛻巖歎惜已まざりきと云ふ、夫れ二子の學術文詩は、趨向同じからず、然も相知る至つて深し、世儒の井蛙の見を以て同に黨し異を伐つ者と同じからざるなり。

新井白石は經世の才、賈太傅、陸宣公に比す可し、詩文の如きは、特に其餘事のみ、著述贍富、皆俚言國字、而して誠

識見超卓、考據精博、其豪邁英特、蓋千古一人耳、豈可與世之齷齪腐儒同年而談焉哉、
 西土船商來、長崎者、動輒欺瞞邦人、程赤城亦船商也、長崎譯官問赤城曰、貴國近日有何奇物、赤城妄言曰、有橄欖鳥、形狀大小皆似橄欖、因以得名、譯人訖以爲奇、因屢託赤城船載來、赤城笑曰、聊相戲耳、先是林珍何情願長卿共來長崎、時有高坂芝山者、質以文章、皆曰、子之文、韓柳不能過焉、是其爲侮弄也、明矣、大抵渠黠者、蔑視我、以爲不學無知、因侮弄以供笑資、邦人不察、扣以詩文、奉其言以爲金科玉條、豈不謬哉、近船商某生亦頗黠者也、極口譏物服諸子之詩、其言妄誕無據、其所作亦拙劣、不足爲物服之奴、

見超卓、考據精博、其豪邁英特、蓋千古の一人のみ、豈世の齷齪たる腐儒と年を同じうして談す可けんや。

西土船商の長崎に來る者、動もすれば輒ち邦人を欺瞞す、程赤城も亦船商なり、長崎の譯官、赤城に問ふて曰、貴國近日何の奇物か有ると、赤城妄言して曰、橄欖鳥有り、形狀大小皆橄欖に似たり、因つて以て名を得たりと、譯人訖して以て奇と爲す、因つて屢、赤城に託し、船載して來らしむ、赤城笑つて曰、聊か相戲むらのみと、是より先き、林珍何情願長卿共に長崎に來る、時に高坂芝山といふ者有り、質すに文章を以てす、皆曰、子之文は韓柳も過ぐる、こと能はずと、是れ其侮弄たるや明かなり、大抵渠れ黠者、我を蔑視し以て不學無知と爲す、因つて侮弄して以て笑資に供す、邦人察せず、扣くに詩文を以てし、其言を奉じて以て金科玉條と爲す、豈謬らざるや、近ごろ船商某生亦頗る黠者なり、口を極めて物服諸子の詩を譏る、其言妄誕無し、其作る所亦拙劣、物服の奴たるに足らざるなり、邦人の寡陋なる者、妄りに之を信じて以て是れ西土人の言必ず據有りと爲す、是れ察せずるの甚しき者なり、夫れ唐宋元明名家の文を論する、猶ほ未だ差

也、邦人之寡陋者、妄信之、以爲是西土人之言必有據矣、是非察之甚者、夫唐宋元明名家論文、猶未免有差謬、明桑悅祝允明論文、皆肆口橫議、歷詆韓歐、不遺餘力、聞者但嗤其妄而已、況舶商海賈、豈可信焉哉、柳柳州答杜溫夫書曰、足下用助字、不當律令、所謂乎歟耶哉夫者、疑辭也、矣耳焉也者、決辭也、今足下則一之、宜考前聞人所使用、與吾言類、且異、慎思之、則一益也、西土書生猶且陋劣如此、況商賈哉、

明人務求勝宋人、然其學術文章、曾不能髣髴宋人、大抵宋人能自爲一家、不肯踏襲前人、明人好剽竊古人、是其膽識已迥然不同也、清人長於考據、指摘前人之謬誤、旁引博

譌有ることを免かれず、明の桑悅祝允明文を論ずる皆肆口橫議韓歐を歴詆して、餘力を遺さず、聞く者但其妄を嗤ふのみ、況や舶商海賈、豈信す可けんや、柳柳州が杜溫夫に答ふる書に曰、足下助字を用ふる律令に當らず、謂はゆる乎歟耶哉夫は疑辭なり、矣耳焉也は決辭なり、今足下は則ち之を一にす、宜しく前聞人の使用する所を考ふべし、吾が言と類するか且つ異なるか慎んで之を思ふは、則ち一益なりと、西土の書生猶且陋劣此の如し、況や商賈をや、

明人務めて宋人に勝たんことを求む、然も其學術文章曾て宋人に髣髴すること能はず、大抵宋人は能く自ら一家を爲す、皆て前人を踏襲せず、明人は好んで古人を剽竊す、是れ其膽識已に迥然として同じからざるなり、清人は考據に長じ、前人の謬誤を指摘す、旁引博證、往々、其背

證、往往中其肯綮、然短於著作、其不及、明人猶明之於宋也。

文欲雅健而婉曲、此用工夫在字法與句法、又欲氣脈流貫而變化曲折、不支離旁斥、此用工夫在章法與篇法、作句大抵欲曲而不欲直、欲省而不欲增、曲則有味、省則不弱、作篇欲前面伏後面、前段生後段、枝節相生、則自然活潑不死矣、鍊字鍊句、易著工夫、而篇章之際、尤難爲巧、至於變化縱橫、出奇無窮、則是出於天資妙才、非工夫所能及也。

緊に中る然も著作に短なり、其明人に及ばざる、猶ほ明の宋に於けるがごとし。

文は雅健にして婉曲ならんことを欲す、此れ工夫を用ふる、字法と句法とに在り、又氣脈流貫して變化曲折し、支離旁斥せざらんことを欲す、此れ工夫を用ふる、章法と篇法とに在り、句を作る、大抵曲を欲して直を欲せず、省を欲して増を欲せず、曲は則ち味ひ有り、省は則ち弱ならず、篇を作る、前面は後面を伏し、前段は後段を生ぜんことを欲す、枝節相生せば則ち自然に活潑にして死せず、字を鍊り、句を鍊るは、工夫を著け易し、而して篇章の際尤も巧を爲し難し、變化縱橫奇を出して窮り無きに至つては、則ち是れ天資の妙才に出づ、工夫の能く及ぶ所に非ざるなり。

4

松陰快談卷之二終

松陰快談卷之三

伊豫 長野確 孟確 著

宋吳可有藏海詩話曰、和平常韻、要奇特押之、則不與衆人同、如險韻、當要穩順押之、方妙、余謂押韻之文、讀之如無韻者、方妙、至如古賦五七言古詩歌行、尤不可有押韻之痕、如東坡赤壁賦、縱橫馳騁、議論排奐、如讀散文、不爲韻字窘束、是所以雄才驚人、李杜韓白之古詩、皆展拓開張、一氣如話、其用韻毫無痕跡、是所以爲大家而不可及也。

余久疑沉約平上去入四聲、不與宮商角徵羽五音合、一日讀米元章畫史、曰、沉隱侯只

宋の吳可有の藏海詩話に曰、和平常の常韻は、奇特之を押すを要す、則ち衆人と同じうせず、險韻の如きは常に穩順に之を押すを要すべし、方に妙なり、余謂ふ押韻の文は之を讀めば韻無きが如き者、方に妙なり、古賦五七言古詩歌行の如きに至つては、尤も押韻の痕有る可からず、東坡の赤壁の賦の如き、縱橫馳騁議論排奐、散文を讀むが如し、韻字に窘束せられざる、是れ雄才人を驚かす所以なり、李杜韓白の古詩は皆展拓開張、一氣話の如し、其韻を用ふる、毫も痕跡無し、是れ大家たり而して及ぶべからざる所以なり。

余久しく沉約平上去入の四聲は、宮商角徵羽の五音と合はざるを疑ふ、一日、米元章の畫史を讀むに、曰、沉隱侯

知四聲、求其宮聲、不得、乃分平聲爲二、以欺後學、幾于千年、無人辨正、愚陋之人從而祖述、作字母、謹守前說、陸德明亦吳音、傳其祖說、故以東冬爲異、中鍾爲別、以象爲獎、以上爲賞、因其吳音、以轉後學、莫之能正、余於是、以五方立五行、求五音、乃得一聲於孟仲季位、因金寄土、了然明白、字字調聲、五音皆具、削去平上去入之號、表以宮商角徵羽之名、有聲無形、互相假借、千載之後、疑誤判清、大初漏露、神姦鬼祕、無所逃形、著云大宋五音正韻、余讀之、多年之疑、渙然冰釋、然古人定制、後人明知其非、而勢不可改者、亦不少、豈特音韻而已哉、但今人據四聲、以紛紛爭音韻之是非者、豈不太陋哉。

只四聲を知る、其宮聲を求むるに得ず、乃ち平聲を分て二と爲し、以て後學を欺く、千年に幾し、人の辨正する無し、愚陋の人従つて祖述し字母を作り、謹んで前説を守る、陸德明も亦吳音其祖説を傳ふ、故に東冬を以て異と爲し、中鍾を別と爲し、象を以て獎と爲し、上を以て賞と爲し、其吳音に因つて以て後學を弊し之を能く正す莫し、余是に於て五方を以て五行を立て、五音を求め、乃ち一聲を孟仲季位に得、金に因つて土に寄せ、了然明白、字字調聲、五音皆具す、平上去入の號を削去し、表するに宮商角徵羽の名を以てす、聲有りて形無く、互に相假借す、千載の後、疑誤判清し、大初漏露し、神姦鬼祕、形を逃るゝ所無し、著して大宋五音正韻と云はんと、余之を讀み、多年の疑ひ渙然として冰釋す、然も古人の定制、後人明かに其非を知る、而して勢改む可からざる者、亦少なからず、豈特に音韻のみならんや、但今人四聲に據り、以て紛々として音韻の是非を争ふ者、豈太だ陋ならずや。

杜少陵詩甚巧、蓋由苦吟得之、觀太白飯顆山頭之詩、可以見焉、太白天才、所謂以不用意得之者、賈浪仙云、兩句三年得、一吟雙淚流、孟東野云、夜吟曉不休、苦吟鬼神愁、如孟浩然眉毫盡落、裴祐袖手、衣袖至穿、王維走入醋甕、薛道衡構思、聞人聲則怒、陳後山有詩思急歸擁被臥而思之、呻吟如病者、家人爲之逐去、猫犬嬰兒皆寄別家、可謂苦心篤好矣、古人有句云、閉門覓句陳無己、對客揮毫秦少游、無己蓋少陵之流、少游蓋青蓮之流。

王弼州曰、太白不成語者少、老杜不成語者多、凡看二公詩、不必病其累句、不必曲爲之護、正使瑕瑜不掩、亦是大家、此論甚佳、余謂

杜少陵の詩甚だ巧みなり、蓋し苦吟に由つて之を得、太
白の飯顆山頭の詩を觀て、以て見る可し、太白は天才、謂
はゆる不用意を以て之を得る者なり、賈浪仙云、兩句三
年にして得、一吟雙淚流ると、孟東野云、夜吟曉に休まず、
苦吟鬼神愁ふと、孟浩然眉毫盡く落ち、裴祐手を袖にし、
衣袖穿に至る、王維走つて醋甕に入り、薛道衡思を構し、
人の聲を聞けば則ち怒る、陳後山詩思有り、念に歸り被
を擁し、臥して之を思ふ、呻吟病者の如し、家人之が爲に
猫犬を逐去し、嬰兒皆別家に寄るが如き苦心篤行なり
と謂ふ可し、古人句有り、云ふ、門を閉ぢて句を覓む、陳無
己、客に對して毫を揮ふ、秦少游と、無己は蓋し、少陵の流、少
游は蓋し、青蓮の流なり。

王弼州曰、太白は語を成さざる者少し、老杜は語を成さ
ざる者多しと、凡そ二公の詩を見るに、必らずしも其累
句を病まず、必らずしも曲けて之が護を爲さず、正に瑕
瑜をして掩はざらしむ、亦是れ大家なりと、此論甚だ佳

李杜二公詩、固未免取類、然天下萬世作詩者、無能用於二公之上者、是以爲詩聖也。世之陋儒、局量執拗、見人之小疵、乃舉其全體而不之信、或說其所尊信之一謬誤、則憤怒見於色、甚至與其人絕交、是其不曉事、可笑之甚、有客謂余曰、李杜詩聖也、豈有紕謬哉、余笑曰、是不必待多言、子曾看中庸乎、曰、天地之大也、人猶有所憾、朱子解之曰、如覆載生成之偏、及寒暑災祥之不得其正者、夫天地且不免有過、況眇小之軀、生於其間者哉、子之信李杜、過於信天地者、不亦甚乎、其人笑而去。

唐詩有唐詩之妙、宋詩有宋詩之妙、而唐宋諸家各有悟入自得處、都不一般、如韓柳歐

し、余謂ふ、李杜二公の詩固より未だ瑕類を免れず、然れども天下萬世詩を作る者、能く二公の上に出づる者無し、是れ詩聖たる所以なり、世の陋儒局量執拗、人の小疵を見れば、乃ち其全體を、擧げて之を信ぜず、或は其尊信する所の一謬誤を説けば、則ち憤怒色に見はる、甚しきは其人と交りを絶つに至る、是れ其事を曉らず、笑ふ可きの甚しきなり、客有り、余に謂ふて曰、李杜は詩聖なり、豈紕謬有らんや、余笑ふて曰、是れ必らずしも多言を待たず、子曾て中庸を看たるや、曰、天地の大なるや、人猶ほ感むる所有りと、朱子之を解して曰、覆載生成の偏及び寒暑災祥の其正を得ざる者の如し、夫れ天地も且ほ過ち有るを免かれず、況や眇小の軀、其間に生ずる者をや、子の李杜を信ずる、天地を信ずるより過ぐる者、亦甚だしからずやと、其人笑ふて去る。

唐詩には唐詩の妙有り、宋詩には宋詩の妙有り、而して唐宋の諸家各、悟入自得の處有り、都べて一般ならず、韓

蘇王曾之文、歐虞顔柳蔡米蘇黃之書、莫不皆然也、學之者亦各學其所好、其所好者、便其性情之所近也、譬諸飲食、各有所嗜、以我炙、而笑人膾、不已駭乎。

余於詩、無所偏好、唐宋元明諸家之詩、或雄渾、或飄逸、或巧緻、或清麗、凡足以悅吾心者、無所不愛、於時人之詩亦然、不問其風調之異同、佳者取之、但生硬拙俗、諷詠無韻致者、雖曰名人之所作、我則不取也、譬猶肉炙魚膾、凡味於我口者、無所不嗜、而獨糟糠則非所嗜也。

詩貴新奇、非詭怪隱僻之謂也、眼前景物、平常情事、而人未經道者、我能道破之、又務使詞理煊然不煩、思釋、乃稱作手、若舍現在常

柳歐蘇王曾の文、歐虞顔柳蔡米蘇黃の書の如き、皆然らざるは莫きなり、之を學ぶ者亦各其好む所を學んで可なり、其好む所の者は、便ち其性情の近き所なり、諸を飲食に譬ふるに、各嗜む所有り、我が炙を以て人の膾を笑はば、已はだ駭ならずや。

余詩に於て偏好する所無し、唐宋元明諸家の詩、或は雄渾、或は飄逸、或は巧緻、或は清麗、凡そ以て吾が心を悦ばしむるに足る者は、愛せざる所無し、時人の詩に於て亦り、其風調の異同を問はず、佳なる者は之を取る、但、生硬拙俗、諷詠に韻致無き者は名人の作る所と曰ふと雖も、我は則ち取らざるなり、譬へば猶ほ肉炙魚膾の凡て我が口に味ふ者は、嗜まざる所無く、而して獨り糟糠は則ち嗜む所に非ざるがごとし。

詩は新奇を貴ぶ、詭怪隱僻を之れ謂ふに非ざるなり、眼前景物、平常の情事にして、人未だ道ふを経ざる者、我能く之を道破す、又務めて詞理に煊然として思釋を煩はさざらしむ、乃ち作手と稱す、若し現在常近を捨て、必

近而必求之千里之外探之古塚祕笈之中、造語詭怪不解爲何等語、博則博矣、其去詩也遠矣。

白香山詩云、匹如身後有何事、應向人間無所求、匹如人多不解其義、東涯以爲單匹之意、其義始明、蓋香山無子、故云、箇單匹之身、於世無所求、然又視人生匹似風中花之句、則當爲如似之義、匹如匹似、應無異義、豈隨其所用而義變耶。

王漁洋香祖筆記曰、從來學杜者、無如山谷、山谷語必已出、不屑裨販杜語、後山簡齋之屬都未夢見、況其下者乎、余竊謂山谷好用辭典、博則博矣、未必善學杜者、子美五七言古詩、惟韓文公善學之、至於五七律、未知屬

す之を千里の外に求め、之を古塚祕笈の中に探る、造語詭怪何等の語たるを解せざる、博は則ち博なるも、其詩を去るや遠し。

白香山の詩に云、匹如身後何事か有る、應に人間に向つて求むる所無かるべしと、匹如は人多く其義を解せず、東涯以爲らく、單匹の意なりと、其義始めて明かなり、蓋し香山子無し、故に云、箇の單匹の身、世に於て求むる所無し、然も又人生匹似風中の花の句を視るに、則ち當に如似の義と爲すべし、匹如匹似應に異議無かるべし、豈んと其用ふる所に随つて義變するか。

王漁洋の香祖筆記に曰、從來杜を學ぶ者は、山谷に如くは無し、山谷は語必ず己より出づ、杜語を裨販するを屑しとせず、後山簡齋の屬、都て未だ夢見せず、況んや其下なる者をや、余竊かに謂ふ、山谷好んで辭典を用ふ、博は則ち博なり、未だ必らずしも善く杜を學ばざる者なり、子美の五七言古詩は、惟韓文公のみ善く之を學ぶ、五七律に至つては、未だ誰に屬するを知らざるなり、後人の

誰也、後人之詩、不及子美、猶後人之文、不及退之也。前無古人、後無來者、惟二公足以當之矣。

讀書該博、學問純正、而其詩不能巧、無風韻流動之趣者、性情不足也。纔讀數卷書、作詩卻有可觀、故曰、詩有別材、非關書也。然非已有性情、而又能讀破萬卷者、則終不能爲大家矣。

東坡之詩、妙絕千古。如泛頰詩云、畫船俯明鏡、笑問汝爲誰、忽然生鱗甲、亂我須與眉、散爲百東坡、頃刻復在茲之類、理致新奇、言語形容之妙、匪夷所思。誰道坡詩不及其文也。朱子曰、秦少游詩、甚巧、張文潛詩、只一筆寫去、重意重字、皆不問、然好處亦是絕好、余因

詩の子美に及ばざるは、猶ほ後人の文の退之に及ばざるがごとし、前に古人無く、後に來者無しとは、惟二公以て之に當るに足る。

讀書該博、學問純正、而して其詩巧みなること能はず、風韻流動の趣き無き者は、性情足らざればなり。纔かに數卷の書を讀み、詩を作つて、卻つて觀る可きもの有り、故に曰詩に別材有り、書に關するに非ざるなりと、然も已に性情有りて、又能く萬卷を讀破する者に非ずんば、則ち終に大家たること能はず。

東坡の詩千古に妙絶なり。頰に泛ぶ詩に云、畫船明鏡に俯す、笑ふて問ふ汝誰と爲す、忽然鱗甲を生ず、我須と眉とを亂る散じて百東坡と爲り、頃刻にして復た茲に在り、の類の如き、理致新奇、言語形容の妙、夷の思ふ所に匪ず、誰れか道ふ、坡の詩、其の文に及ばずと。

朱子曰、秦少游の詩、甚だ巧みなり、張文潛の詩、只一筆にして寫し去る、重意重字、皆問はず、然も好處亦是れ絶好

謂二子皆蘇門之高足、而朱子評之甚公確、非如後人之滿口皆出於私意也。

文潛之文甚濃厚、坡公云、汪洋淡泊甚似子由、文潛學坡公、氣力稍弱、自然似子由。

作詩者第一性情、第二學問、溫柔敦厚、詩之教也、須子細玩味此四字、所謂性情不出於此矣、而讀書益博、則運用益妙、故曰、第二學問也、或作詩不能巧、乃自諉曰、我所作儒者之詩也、不必求巧於風花雪月之閑言語、是強詞以掩拙耳、夫三百篇之風人、多賢人君子、而其詞皆原於性情、風韻流動、使讀者一唱三歎、未聞別有生硬不韻之詩、名爲儒者之作也。

古之名人、如蘇老泉、曾子固、不必作詩、其所

なりと、余因つて謂ふ、二子は皆蘇門の高足なり、而して朱子の之を評する甚だ公確、後人の滿口皆私意に出づるが如きに非ざるなり。

七六

文潛の文甚だ濃厚なり、坡公云、汪洋淡泊、甚だ子由に似たり、文潛坡公を學んで、氣力稍弱し、自然に子由に似たり。

詩を作る者、第一は性情、第二は學問、溫柔敦厚は詩の教へなり、須らく子細に此の四字を玩味すべし、謂はゆる性情は此に出でず、而して書を讀むこと益博ければ、則ち運用益妙なり、故に曰、第二は學問なり、或は詩を作る、巧みなること能はず、乃ち自ら諉して曰、我が作る所は儒者の詩なり、必らずしも巧を風花雪月の閑言語に求めずと、是れ強詞以て拙を掩ふのみ、夫れ三百篇の風人多くは賢人君子、而して其詞は皆性情に厚く、風韻流動讀む者をして一唱三歎せしむ、未だ別に生硬不韻の詩、名けて儒者の作と爲す有るを聞かざるなり。

古の名人、蘇老泉、曾子固の如き、必らずしも詩を作らず、

存纔一二見而已、豈非其所長耶、有才識之人、善藏拙如此、後人之所當法焉、

世間一種粗拙浮躁之人、動輒杜撰亂道、不知羞愧、好妄罵人、不知他人皆勝已也、可醜之甚、

全篇氣脈流貫、而句中有一兩字未瑩、是所謂有形病也、改換一兩字、則爲佳作矣、字句有可觀、而全首氣脈不貫、其病混然不可指摘、是所謂無形病也、不改作、則終不成言語矣、

范石湖之詩、少瑕類、陸放翁之詩、多瑕類、然至其氣力變化、石湖迥出放翁之下、

放翁之詩、有豪放之氣焉、南宋詩人、蓋無出其右者、近日詩流、學放翁者不少、然有豪放

其の存する所、纔かに一二見のみ、豈んど其長する所に非ざるか、才識有るの人、善く拙を藏すること此の如し、後人の當に法とすべき所なり、

世間一種粗拙浮躁の人、動もすれば輒ち杜撰亂道して、羞愧を知らず、好んで妄りに人を罵る、他人皆己れに勝つを知らざるなり、醜とす可きの甚し、

全篇氣脈流貫して、句中に一兩字の未だ瑩ならざるもの有り、是れ謂はゆる謂有形の病なり、一兩字を改換すれば則ち佳作と爲る、字句觀る可き有りて、全首氣脈貫かざるは、其病混然として指摘す可からず、是れ謂はゆる無形の病なり、改作せざんば則ち終に言語を成さず、

范石湖の詩、瑕類少し、陸放翁の詩、瑕類多し、然も其氣力變化に至つては、石湖は迥かに放翁の下に出つ、

放翁の詩、豪放の氣有り、南宋の詩人、蓋其右に出づる者無し、近日詩流、放翁を學ぶ者少からず、然も豪放の氣有

之氣者、我未之聞也。

清詩人如吳梅村、錢枚、齋朱竹垞、施愚山、王阮亭、宋荔裳、皆無愧於爲名家矣。至於李漁、袁枚、則才學斯下矣。然其論著、間有可觀焉。要之清人著作、非其所長也。考據之學、如毛奇齡、非無可取、但短於著作、故議論未痛快。袁子才隨園詩話、其所喜、祇是香奩竹枝、亦可以見其人品矣。子才意氣欲駕漁洋而上之、然其才學不足、望漁洋、何能上之耶。

古之大賢君子、無不善詩者、讀之可以想見其氣象矣。明道先生有句曰、莫辭薑酒十分醉、只惜風花一片飛。其胸襟洒落、春風愷悌之氣象、自流動於二句中。夫詩賦吟咏、豈非間言語哉。然君子不廢者、以其忠厚惻怛、溫

る者は、我れ未だ之を聞かざるなり。

七八

清の詩人、吳梅村、錢枚、齋朱竹垞、施愚山、王阮亭、宋荔裳の如きは、名家たるに愧つる無し。李漁、袁枚に至つては、則ち才學斯に下れり。然も其論著、間、觀る可き有り、之を要するに、清人の著作は、其長する所に非ざるなり。考據の學、毛奇齡の如きは、取る可き無きに非ず。但、著作に短なり、故に議論未だ痛快ならず。

袁子才の隨園詩話、其喜ぶ所は、祇だ是れ香奩竹枝のみ、亦以て其人品を見る可し。子才意氣、漁洋を駕して之に上らんと欲す。然も其才學、漁洋を望むに足らず、何ぞ能く之に上らんや。

古の大賢君子にして詩を善くせざる者無し。之を讀めば、以て其氣象を想見す可し。明道先生句有り曰、辭薑酒十分、醉酒十分に醉ふを、只惜む風花一片の飛ぶを。其胸襟洒落、春風愷悌の氣象、自ら二句の中に流動す。夫れ詩賦吟咏、豈間言語に非ずや。然も君子の廢せざる者は、其忠厚惻怛、溫柔和樂、一唱三歎の妙有るを以てのみ。孔子、匹婦の辭を採り、書禮春秋と並びに六經に列す。豈意無

柔和樂、有一唱三歎之妙耳、孔子探匹夫匹婦之辭、與書禮春秋、竝列於六經、豈無意耶。余深愛宗忠簡公華陰道中二絕、云、烟遮晃白初疑雪、日映爛斑卻是花、馬渡急流行小庵、柳絲如織映人家、菅茅作屋幾家居、雲確風帘路不紆、坡側杏花溪畔柳、分明摩詰輞川圖、公之忠義照映千古、固不可以詞人論也、而其詞藻妙麗如此、非尋常詩家所及也。先君子篤好儒學、交友皆當時豪傑名士、片山北海、中井竹山、尾藤二洲、江村君錫、葛子琴、合麗、王篠、安道、木孔、恭諸老、或以道德、或以詩文、郵筒往來如織、嘗會諸名士、浪華蟹島、大勝樓、分韻賦詩、金玉盈座、蓋亦一時盛事也。

からんや。

余深く宗忠簡公の華陰道中の二絶を愛す、云ふ「烟遮つて晃白初のは雪かと疑ふ、日映じて爛斑卻つて是れ花、馬は急流を渡つて小庵を行き、柳絲織るが如く人家に映す、菅茅屋を作りて幾家が居る、雲確風帘路紆ならず、坡側の杏花溪畔の柳、分明なり摩詰輞川の圖」と、公の忠義、千古に照映す、固より詞人を以て論ず可からざるなり、而して其詞藻の妙麗なる此の如し、尋常詩家の及ぶ所に非ざるなり。

先君子篤く儒學を好み交友皆當時の豪傑名士、片山北海、中井竹山、尾藤二洲、江村君錫、葛子琴、合麗、王篠、安道、木孔、恭の諸老、或は道德を以て、或は詩文を以て、郵筒の往來織るが如し、嘗て諸名士を浪華の蟹鳴、大勝樓に會し、韻を分ち詩を賦す、金玉座に盈つ、蓋亦一時の盛事なり。

先君子好詩有遺稿三卷今謹錄數首秋江
 或遊山壑或郊坰復向江干杖暫停柿實
 垂垂秋水岸鷗翎拍拍夕陽汀樹間深住漁
 人舍橋畔斜橫買客船安借晉時虎頭手目
 中風景入丹青送矢野敬士遊浪華曰海門
 遙惹夕陽流堪羨騷人千里遊白鳥雙雙飛
 送客青山點點出迎舟雲將片雨瀟殘暑樹
 帶微風報早秋想得蒹葭洲上月勝情深倚
 讀書樓漫興曰宦身卻與隱倫同客少幽居
 酒亦空籬菊衰時多冷露庭柯踈處足凄風
 浮生萬事夢何妄苦思十年詩未工似助主
 人之歎息通宵啣啣月前蟲題某處士幽居
 曰攜酒何人最往還板橋斜架小溪灣茅茨
 檐短宜邀月枳殼牆低好見山風裡落花新

先君子詩を好み遺稿三卷有り今讀んで數首を録す秋
 江に曰或は山壑に遊び或は郊坰にす復た江干に向ふ
 て杖暫く停る柿實は垂々たり秋水の岸鷗翎拍々たり
 夕陽の汀樹間深く住す漁人の舍橋畔斜めに横ふ買客
 の船安んぞ晉時虎頭の手を借りて、目中の風景丹青に
 入らんと、矢野敬士が浪華に遊ぶを送る曰海門遙かに
 夕陽を惹いて流る羨むに堪へたり騷人千里の遊白
 鳥雙々飛んで客を送り青山點々出でて舟を迎ふ雲は
 片雨を將て殘暑を瀟ひ樹は微風を帯びて早秋を報す
 想ひ得たり蒹葭洲上の月勝情深く倚る讀書樓と漫興
 に曰宦身卻つて隱倫と同じ客少く幽居し酒亦空し籬
 菊衰ふる時冷露多し庭柯踈なる處凄風足る浮生萬事
 夢何ぞ妄なる苦思十年詩未だ工ならず主人の歎息を
 助くるに似たり通宵啣々月前の蟲と某處士の幽居に
 題して曰酒を攜へて何人が最も往還す板橋斜に架す
 小溪の灣茅茨檐短く月を邀ふるに宜し枳殼牆は低う
 して山を見るに好し風裡の落花新白髮雨餘の荒
 蕪蒼蒼顔任深くして咎無く又譽名し耕讀多年多少
 の間と江村君錫に寄す曰諸孫盡く著く老萊の衣七
 十君の如き古亦稀なり吟袖風を受けて花徑に歩し醉

白髮、雨餘荒蘚蒼顏、住深无咎又无髮、耕
 讀多年多少間、寄江村君錫曰、諸孫盡著老
 萊衣、七十如君古亦稀、吟袖受風花徑步、醉
 筇支月草堂歸、重重雲樹望方遠、渺渺烟波
 夢不違、好寄相思千里信、一行斜鴈暮天飛、
 寄賴千秋曰、帳前一別幾年華、因聽幣招君
 挈家、載酒會尋江上月、寄書今問府中花、異
 途官守情無隔、鯨海買帆望不遐、藉藉名聲
 新教授、雄藩富庶竟何加、秋懷曰、城頭雨霽
 夕陽通、寂寂平郊望不窮、斷續砧聲催落葉、
 高低鴈影過寒空、朱絃曲舊知音外、白壁光
 飛按劍中、宋玉當年裁賦後、人間百感動
 秋風。

先君子刻意杜少陵、當時交遊中井竹山、江

筇月に支へて草堂に歸る、重々たる雲樹望み方に遠く、
 渺々たる烟波夢途はず、好し寄せん相思千里の信、一行
 の斜鴈暮天に飛ぶ、と、賴千秋に寄す、曰、帳前一別幾年
 華、因つて聽く幣招君家を挈ふと、酒を載せ會て尋ぬ江
 上の月書を寄せて今は問ふ府中の花、途を異にするも
 官守情隔つ無し、海に駕す買帆望み遐ならず、藉々たる
 名聲新教授、雄藩の富庶竟に何ぞ加へん、と、秋懷に曰、城
 頭雨霽れて夕陽通す、寂々たる平郊望み窮らず、斷續の
 砧聲落葉を催し、高低の鴈影寒空を過ぐ、朱絃曲は舊し
 知音の外、白壁光は飛ぶ、按劍の中、宋玉當年賦を裁する
 の後、人間の百感秋風に動く下。

先君子、杜少陵に刻意す、當時交遊中井竹山、江村君錫の

村君錫諸老皆謂逼似杜樊川蓋善學少陵者莫如樊川二老意豈在此乎確不肯之所不敢論也。

吾鄉有字南海先生者爲人溫厚澹雅毫無鄙吝之氣作詩清麗先君命確受句讀於先生時確年六七歲先生憐確幼好讀書教誨愛撫靡所不至確當時雖不能悉解其言然知其爲君子人也先生姓字田川諱龍字子雲南海其號又稱養軒家世業醫沒無嗣鄉人至今傳誦其詩。

余與亡友服維彰同遊不忍池時方晚夏余得一絕句曰尖蒲獵獵雜圓荷紅綠蜻蜓各自過吹面涼颺無定度一番少少一番多維彰亦有詩情不記得距今十七年恍如昨日。

諸老皆謂ふ杜樊川に逼似すと蓋善く少陵を學ぶ者は樊川に如くは莫し二老の意豈んど此に在るか確不肯の敢て論ぜざる所なり。

吾が郷に字南海先生といふ者有り人と爲り溫厚澹雅毫も鄙吝の氣無し詩を作る清麗先君確に命じて句讀を先生に受けしむ時に確年六七歳先生確が幼にして讀書を好むを憐み教誨愛撫至らざる所靡し確當時悉く其言を解すること能はずと雖も然も君子人たるを知る先生姓は字田川諱は龍字は子雲南海は其號なり又養軒と稱す家世業を業とす歿して嗣無し郷人今に至るまで其詩を傳誦す。

余亡友服維彰と同じく不忍池に遊ぶ時方に晚夏余一絶句を得たり曰尖蒲獵々圓荷に雜はる紅綠の蜻蛉各自に過ぐ面を吹くの涼颺定度無し一番は少々一番は多しと維彰亦詩有り惜むらくは記得せず今を距ること十七年恍として昨日の如し今昔の感に勝へず。

不勝今昔之感。

王阮亭袁子才論詩各有得失近日詩流喜子才者罵阮亭學阮亭者排子才所謂以宮笑角以白貶青不亦固乎然阮亭之才學非子才之所企及也則我不得不左袒阮亭也客問余曰子學詩唐耶宋耶曰我不必唐不必宋又不必不唐宋可見不必二字是我宗旨也東坡云作詩必此詩定知非詩人可謂知言矣竊視世之詩流不問詩之巧拙黨同伐異忿爭如狂是雖狹見使然不亦已駭乎有人極口罵白石南郭以爲僞詩余請觀其詩立意陳腐但多用生字以掩其拙余因謂曰白石南郭誠作僞詩吾子誠作眞詩然吾子之詩譬眞瓦也二子之詩譬僞玉也眞瓦

王阮亭袁子才詩を論ず各得失有り近日の詩流子才を喜ぶ者は阮亭を罵り阮亭を學ぶ者は子才を排す所謂宮を以て角を笑ひ白を以て青を貶る亦固ならずや然も阮亭の才學は子才の企及する所に非ざるなり則ち我は阮亭に左袒せざるを得ざるなり。

客余に問ふて曰子の詩を學ぶ唐か宋か曰我は必らずしも唐ならず必らずしも宋ならず又必ずしも唐宋ならずんばあらず見る可し不必の二字是れ我が宗旨なりと東坡云詩を作るに此詩を必せば定めて知る詩人に非るをと知言と謂ふ可し竊かに世の詩流を視るに詩の巧拙を問はず黨同伐異忿爭狂せんとするが如きは是れ狹見然らしむと雖も亦已だ駭ならずや人有り口を極めて白石南郭を罵り以て僞詩と爲す余請ふて其詩を見るに意を立つる陳腐但多く生字を用ひ以て其拙を掩ふ余因つて謂つて曰白石南郭は誠に僞詩を作る吾子は誠に眞詩を作る然ども吾子の詩は譬へば眞瓦なり二子の詩は譬へば僞玉なり眞瓦の價は廻に僞玉の下に在り。

之價、迴在僞玉之下。

王弼州藝苑卮言曰、潮陽蘇福八歲賦初月詩、氣朔盈虛又一初、嫦娥底事半分無、卻於無處分明有、恰似先天太極圖、惜哉十四而天、此詩載隨園詩話爲蘇神童之作、余因疑子才未讀藝苑卮言也、宋曹希蘊新月詩曰、禁鼓纔聞第一敲、忽見新月挂林梢、誰家寶鏡新藏匣、蓋小參差掩不交、謝疊山蠶婦吟曰、子規啼徹四更時、起視蠶多怕葉稀、不信樓頭楊柳月、玉人歌舞不曾歸、皆載隨園詩話、一以爲蘇神童、一以爲無名氏、蓋失考耳。

袁子才論詩不貴用典、可謂確言矣、一涉填砌、則乏風韻流動之趣、愈多愈可厭、且夫國風雅頌、何曾有典來、直敘性情、而其芬芳悱

王弼州の藝苑卮言に曰、潮陽の蘇福、八歳にして初月の詩を賦す、「氣朔盈虛又一の初め、嫦娥底事ぞ半分無し、卻つて無處に於て分明に有り、恰も先天太極の圖に似たり」と、惜いかな、十四にして天すと、此詩隨園詩話に載せて蘇神童の作と爲す、余因つて疑ふ、子才未だ藝苑卮言を讀まざるかと、宋の曹希蘊が新月の詩に曰、禁鼓纔に聞く第一敲、忽ち見る新月の林梢に挂かるを、誰が家の寶鏡か新たに匣に藏す、蓋小參差掩ふて交らずと、謝疊山が蠶婦の吟に曰、子規啼徹す四更の時、起つて蠶の多きを視て葉の稀れなるを怕る、信ぜず樓頭楊柳の月、玉人歌舞して會て歸らずと、皆隨園詩話に載す、一は以て蘇神童と爲し、一は以て無名氏と爲す、蓋し考を失へるのみ。

袁子才の詩を論ずる、典を用ゐるを貴ばずと、確言なりと謂ふ可し、一たび填砌に涉れば則ち風韻流動の趣きに乏しく、愈多くして愈厭ふ可し、且つ夫れ國風雅頌、何ぞ會て典有つて來らんや、直ちに性情を敘して其芬芳悱

側之懷、婉麗溫雅之辭、使讀者一唱三歎、是
 祇由其性情之厚與造語之妙耳、好用典故、
 欲以是誇博、則可、非知詩者也。

古人有點鐵成金之說、鐵豈可成金哉、蓋自
 有妙解、譬猶造器、有鐵之雅觀、反勝金者、倘
 使拙者用金、則變爲鐵矣、有一少年作詩、誤
 聽詩貴新奇之說、一日聞、不借之爲草鞋、軍
 持之爲淨瓶、以爲得佳對、已而聞、夫須之爲
 笠、乃大喜、他日以不借夫須爲對作句、以示
 余、余曰、洵切對也、但恨句不佳、魏了翁句云、
 一雙不借挂木杪、半破夫須衝曉行、寫得旅
 況甚佳、古人胸中多畜字、以俟宜用之時、若
 無宜用之時、則終身不之用也、恐其金變爲
 鐵也、今人偶得未見字、不問其當否、牽強用

側の懷、婉麗溫雅の辭、讀者をして一唱三歎せしむ、是
 極其性情の厚と造語の妙とに由るのみ、好んで典を川
 ふる者、是を以て博に誇らんと欲すれば、則ち可なるも、
 詩を知る者に非ざるなり。

古人鐵を點じて金と成すの説有り、鐵豈金と成す可け
 んや、蓋自ら妙解有り、譬へば猶ほ造器のごとし、鐵の雅
 觀、反つて金に勝る者有り、倘し拙なる者をして金を用
 ひしむれば、則ち變じて鐵と爲る、一少年有り、詩を作り、
 誤つて詩は新奇を貴ぶの説を聽き、一日、不借の草鞋た
 り、軍持の淨瓶たるを聞き、以て佳對を得たりと爲す、已
 にして夫須の笠たるを聞き、乃ち大に喜ぶ、他日不借夫
 須を以て對と爲し、句を作つて以て余に示す、余曰、洵に
 切對なり、但、恨むらくは句佳ならず、魏了翁の句に云、
 「一雙の不借木杪に挂かり、半破の夫須曉を衝いて行く」と、
 旅況を寫し得て甚だ佳なり、古人の胸中、多く字を蓄
 へて以て宜しく用ふべきの時を俟つ、若し宜しく用ふべ
 きじの時無ければ、則ち終身之を用ひざるなりと、其金變
 て鐵と爲るを恐るゝなり、今人偶々未見の字を得ば、其當
 否を問はず、牽強して之を用ひて新奇に誇る、詩文の
 新奇は、眞に在つて字に在らざるを知らざるなり、方孝孺

之、以誇新奇、不知詩文之新奇在意而不在于字也。方孝儒論文曰、不奇其辭而奇其意、洵知言哉。今夫黃金紫氣、白雪陽春、其爲字可謂陳腐矣。然才人用之、化腐爲新、猶良工用朽材作奇器、一經其手、則更覺斬新之妙。使拙者造器、授以金銀珠玉之材、及其成器、觀者皆情傷其美材耳。且夫文字本有定數、無新陳之別、惟世之罕道者似新、故如不惜夫須之類、視以爲生字、而人人用作句、則其爲陳腐不亦大乎。是皆不求新奇於意、而求之於字面之過也。今試舉清人絕句一二、李勉過廢園云、誰家亭院自成春、窻有莓苔案有塵、偏是關心鄰舍犬、隔牆猶吠折花人。林章送人詩云、不待東風不待潮、渡江十里九停櫈。

文を論じて曰、其辭を奇にせずして其意を奇にすと、洵に知言なるかな。今夫れ黃金紫氣、白雪陽春は、其字たる陳腐なりと謂ふ可し。然も才人之を用ひば、腐を化して新と爲す、猶ほ良工の朽材を用ひ、奇器を作るがごとし、一たび其手を經ば、則ち更に斬新の妙を覺ふ。拙き者をして器を造らしめば、授くるに金銀珠玉の材を以てするも、其器を成すに及んで、觀る者皆其美材を傷くを惜まんのみ、且夫れ文字本定數有り、新陳の別無し、惟世の道こと罕なる者、新なるに似たり、故に不惜夫須の類の如き、視て以て生字と爲す、而して人々用ひて句を作せば、則ち其陳腐たる亦大ならずや。是皆新奇を意に求めずして、之を字面に求むるの過ちなり。今試みに清人が絕家句の一二を舉げん。李勉の廢園を過ぐるに云、誰かの亭院が自ら春を成す、窻に莓苔有り、案に塵有り、偏に是れ心に關す。鄰舍の犬、牆を隔て、猶ほ吠ゆ花を折る人。林章の人を送る詩に云、東風を待たず、潮を待たず、江を渡る十里にして、九たび櫈を停む、知らず今夜秦淮の水を送つて、揚州の第幾橋に到ると、高士某の中秋月に對をするに云、籬を隔て、酒を呼び來つて、芋を煮ん、又恐鄰家の酒錢を索むるを、若かず妻と商推し、定めて、門開

不知今夜秦淮水送到揚州第幾橋高士某
 中秋對月云隔離呼酒來烹芋又恐鄰家索
 酒錢不若與妻商權定開門推出月還天是
 等詩何曾有生字來而意新語妙使人眉開
 目朗故善爲新奇者取之方寸不求之千里
 之外取之不禁用之不竭千古萬古日月常
 新者惟我心之謂乎。

朱子曰歐公最喜一人送別詩兩句云曉日
 都門道微涼草樹秋又喜王建曲徑通幽處
 禪房深木深歐公自言平生要道此語不得
 今人都不識這意思只要嵌事使難字便云
 好由是言之不惟作者難得卽求解者亦不
 易得也。

宋嚴羽滄浪詩話曰學詩有三節其初不識

いて推し出だして月天に遶らしめんと是等の詩何ぞ
 曾て生字有つて來らんや而して意は新たに語は妙に
 人をして眉開き目朗かならしむ故に善く新奇を爲す者
 は之を方寸に取り之を千里の外に求めず之を取つて
 禁せず之を用ひて竭きす千古萬古日月常に新たなる
 者は惟我が心を之れ謂ふか。

朱子曰歐公最も一人送別の詩兩句を喜ぶ云く曉日都
 門の道微涼草樹の秋と又王建の曲徑幽處に通じ禪房
 深木深しを喜ぶ歐公自ら言ふ平生此語を道ふを要し
 て得ずと今人都て道の意思を識らず只事を嵌して難
 字を使ふを要して便ち好と云ふ是に由つて之を言へ
 ば惟作者の得難きのみならず卽ち解者を求むるも亦
 得易すからざるなり。

宋の嚴羽が滄浪詩話に曰詩を學ぶに三節有り其初め

好惡、連篇累牘、肆筆而成、既識羞愧、始生畏縮、成之極難、及其透徹、則七縱八橫、信手拈來、頭頭是道矣、明都穆南濠詩話曰、世人作詩、以敏捷爲奇、以連篇累牘爲富、非知詩者也、李東陽麓堂詩話曰、古歌辭賞簡遠、大風歌止三句、予嘗題柯敬仲墨竹曰、莫將畫竹論難易、剛道繁難簡更難、君看蕭蕭祇數葉、滿堂風雨不勝寒、畫法與詩法通者、蓋此類也、王世懋藝圃擷餘曰、詩必自運而後、可以辨體、詩必成家而後、可以言格、故予謂今之作者、但須其才實、學、本性、求情、且莫理論格調、此數段議論、皆與余意合、故鈔出。

才短學貧、纔局於近體短章、而不能縱橫馳騁、展拓開張、是纒線之材、不足成百尺之錦。

是好惡を識らず、連篇累牘、筆を肆にして成る、既にして羞愧を識り、始めて畏縮を生ず、之を爲す極めて難し、其透徹するに及んでは、則ち七縱八横手に信せて拈し來る頭々是れ道と、明の都穆の南濠詩話に曰、世人詩を作るに敏捷を以て奇と爲し、連篇累牘を以て富と爲すと、は詩を知る者に非ざるなりと、李東陽の麓堂詩話に曰、古の歌辭は簡遠を貴ぶ、大風歌は止三句のみ、予嘗て柯敬仲の墨竹に題して曰く、畫竹を將て難易を論ずること莫れ剛に道ふ繁は難し簡は更に難し、君看よ蕭々祇數葉、滿堂の風雨寒に勝へずと、畫法と詩法と通する者、蓋此類なり、王世懋の藝圃擷餘に曰、詩は必ず自ら運して後、以て體を辨ず可し、詩は必ず家を成して後に以て格を言ふ可しと、故に予謂ふ今の作者、但、須らく眞才實學、性に本いて情を求むべし、且つ格調を理論すること莫れと、此の數段の議論、皆余の意と合す、故に鈔出す。

才短く學貧しく、纔かに近體の短章に局して、縱橫馳騁、展拓開張する能はず、是れ纒線の材、百尺の錦を成すに

也、又一種有構思不能入細、粗心妄作、連篇累牘、嵌事徵典、毫無自運之妙、銖積寸累、無段落過接之法、以敏捷掩博自喜者、是、不知萬斛之砂、不如一零之金也、此尤可愧、余作八十韻百韻之詩、前後數十首、其段落過接之際、未慊於心者多、已付之炎火、鷄肋之情、今祇存數首。

人各有長、亦不能無短、或能文而不能詩、能詩而不能文、以杜韓之雄才、而作小詩、未必皆巧矣、王孟之流、才思精妙、而長篇大作、非其所長也、以一人之身、兼衆美而有之者、惟宋蘇子瞻一人而已、然人苟有一長、足以自託、何必兼有哉。

服南郭墨水絕句、膾炙人口、余嘗遊墨水、得

足らざるなり、又一種思を構へて細に入る能はず、粗心妄作、連篇累牘、事を嵌し典を徴し、毫も自運の妙無くして、銖積寸累、段落過接の法無く、敏捷掩博を以て自ら喜ぶ者有り、是れ萬斛の砂は一零の金に如かざるを知らざるなり、此れ尤も愧づ可し、余、八十韻百韻の詩を作る、前後數十首、其段落過接の際、未だ心に慊せざる者多し、已に之を炎火に付す、鷄肋の情、今祇だ數首を存す。

人各、長有り、亦短無き能はず、或は文を能くして詩を能くせず、詩を能くして文を能くせず、杜韓の雄才を以てして小詩を作る、未だ必ずしも皆巧みならず、王孟の流、才思精妙、而して長篇大作は其長する所に非ざるなり、一人の身を以て衆美を兼ねて之を有する者、惟、宋の蘇子瞻一人のみ、然も人苟も一長有らば、以て自ら託するに足る、何ぞ必ずしも兼有せんや。

服南郭が墨水の絶句、人口に膾炙す、余嘗て墨水に遊ん

一絶句曰、紛紛輕薄侮先師、筆下何曾有
一奇、兩岸秋風墨水晚、至今人誦郭翁詩。

學明七子、而極拙極劣、妄竊詩名者、龍草廬
之類是也、學宋詩而不解宋詩、多用生字以
掩其拙者、僧六如之徒是也、故曰、非真材實
學、本性求情者、則未可與言詩也。

石川翁丈山、初名重之、後改、凹號、凹凸窩、又
號、頑仙子、參州人也、仕神君爲近侍、浪華之
役、先登犯法、由是忤旨奪祿、後仕淺野氏、又
去遊京師、不復仕、薙髮自號、丈山居士、幼少
好學、師事惺窩先生、與羅山杏菴二先生友
善、爲人豪邁、能文、隱居自適、超然物外、有林
逋魏野之風、天皇聞其高風、詔召之、固辭弗出
翁沒後、天子觀其琴書、嗟歎久之、世以爲榮

得一絶句を得たり、曰、紛紛たる輕薄先師を侮る筆下何
ぞ曾て一奇あらんや、兩岸の秋風墨水の晩今に至つて
人は稱す郭翁の詩と。

明の七子を學んで極拙極劣、妄りに詩名を竊む者、龍草
廬の類是れなり、宋詩を學んで宋詩を解せず、多く生字
を用ひて以て其拙を掩ふ者、僧六如の徒是れなり、故に
曰、真材實學、性に本づき情を求むる者に非ずんば、則ち
未だ與に詩を言ふ可からざるなり。

石川翁丈山、初めの名は重之、後凹と改め、凹凸窩と號し、
又頑仙子と號す、參州の人なり、神君に仕へて近侍と爲
る、浪華の役、先登して法を犯す、是に由つて旨に忤ひ、祿
を奪はる、後、淺野氏に仕ふ、又去つて京師に遊び、復仕へ
ず、薙髮して自ら丈山居士と號す、幼少にして學を好み、
惺窩先生に師事す、羅山杏菴二先生と友とし、善し、人と
爲り、豪邁能文、隱居自適して物外に超然たり、林逋魏野
の風有り、天皇其高風を聞き、詔して之を召す、固辭して
出でず、翁没して後、天子其琴書を觀、嗟歎之を久しうし
たまふ、世以て榮と爲す、今其佳句一二を錄す、曰、間花游
客を惹き、修竹殘僧を續す、高樹秋容早く、密林霜氣遲し、

今錄其佳句一二曰、問花惹游客、修竹鎖殘
 價、高樹秋容早、密林霜氣遲、露冷蛩聲細、天
 暝螢影長、至其遣雷霆小蟬噪、日月兩螢流、
 可以見翁之氣象矣、古之真隱必豪傑、有治
 亂之才、足以馳逐於世、時人不能用、乃發憤
 棄去、不復反顧、是必非醒齷子者託名隱
 遁也、說與時人、休問我、英雄回首卽神仙、信
 哉斯言也、翁之故居、在京城外東數里、墳墓
 亦在焉、余作詩七絕句弔之、曰、擬取閑身寄
 林下、悉收豪氣入詩來、掉頭不顧君王喚、笑
 殺開元奪錦才、其二曰、山前古墓埋豪骨、似
 聽軍中揮稍聲、今日弔君君好笑、紛紛來去
 腐儒生、其三曰、文章人品價難論、我意於君
 無間言、縱酌濁醪澆墓下、休將醜句駭詩魂、

露冷にして蟬聲細く、天暝くして螢影長し」と、其雷霆小
 蟬噪き、日月兩螢流ると道ふに至つては、以て翁の氣象
 を見る可し、古の真隱は必ず豪傑なり、治亂の才有り、以
 て世に馳逐するに足る、時人用ふること能はず、乃ち發
 憤棄去して復た反顧せず、是れ必ず醒齷子たる者の名
 を隱遁に託するに非ざるなり、時人に說與す我に問ふ
 を休めよ、英雄首を回らせば卽ち神仙と信なるかな斯
 の言や、翁の故居は京城外の東數里に在り、墳墓亦在り、
 余詩七絕句を作つて之を弔す、曰、閑身を取つて林下に
 寄せんと擬す、悉く豪氣を收めて詩に入れ來る、頭を掉
 つて顧みず君王の喚ぶを、笑殺す開元奪錦の才、其二に
 曰、山前の古墓豪骨を埋む、聽くに似たり、軍中稍を揮ふ
 聲、今日君を弔す君好笑せん、紛々來去す腐儒生、其三に
 曰、文章人品價論じ難し、我意君に於て間言無し、縱ひ濁
 醪を酌んで墓下に澆ぐも、醜句を將て詩魂を駭かすを休
 めよ、其四に曰、爭ふて説く新奇能く詩を作ると、篇々駭
 ふ可し竹枝の辭、唯今誰れか吾が翁の句に似ん、黃梅花
 に過る些子兒、其五に曰、唐宋明詩各、情を敘す、今人相
 訕る大癡生、九原誰れか又君を喚び起し、談笑一揮忿争
 を休めん、其六に曰、城外の寒村一徑開く、吟霜端的君を

其四曰、爭說新奇能作詩、篇篇可厭、竹枝辭、
唯今誰似吾翁、句清過梅花些子兒、其五曰、
唐宋明詩各敘情、今人相訕太癡生、九原誰
又喚君起、談笑一揮、休忿爭、其六曰、城外寒
村一徑開、吟筇端的弔君來、不須別採香花
去、宜匝幽居唯種梅、其七曰、當日琴書幸無
恙、至今清氣逼人寒、君王來覽頻嗟歎、何羨
幽居帝畫看。

寶曆年中、京師有賣茶翁者、幼少薙髮師事
獨洪禪師、遂於佛理深惡、近世釋氏毫無解
悟、妄自尊大、於是一朝脫袈裟、賣茶爲業、乃
姓高、名遊外、設席於花前水次、陳列茶具、瀟
灑可喜、騷人墨客慕其風者、爭投錢喫茶、嘗
自爲贊曰、髭鬚照雪、踈髮鬚鬆、瘦杖扶老、鶴

弔し來る、須ひず別に香花を捧けて去るを、宜しく幽居
を匝つて唯、梅を種うべし、其七に曰、當日の琴書幸に
恙が無し、今に至つて清氣人に逼つて寒し、君王來り覽
て頻りに嗟歎す、何ぞ羨まん幽居帝畫いて看るを」と。

寶曆年中京師に賣茶翁といふ者有り、幼少より薙髮して
獨洪禪師に師事す、佛理に遠く深く近世の釋氏毫無解
悟無く、妄に自ら尊大するを惡む、是に於て一朝袈裟を
脱し、茶を賣つて業と爲す、乃ち姓は高、名は遊外、席を花
前水次に設けて、茶具を陳列す、瀟灑可喜し、騷人墨客
其風を慕ふ者、争ふて錢を投じ、茶を喫す、嘗て自ら贊を
爲つて曰、髭鬚雪を照し、疎髮鬚鬆、瘦杖老を扶け、鶴容
を敵ふ、具籃荷ひ去つて、洛東に獨歩す、賣茶の生計、衰窮

繁蔽容、具籃荷去、獨步洛東、賣茶生計、足養
 衰躬、非儒非釋、又非道、一箇風頓睛禿翁、天
 正年中、有津田宗及者、少有隱操、善茶儀、豐
 太閤屢召見之、宗及弗喜、乃薦弟子千利休、
 初利休賣藥爲生、及見太閤寵遇日隆、竟爲
 茶儀之祖、諸公皆慕其名、爭聘召之、士庶聞
 其風者、以識面爲幸、門如市堂、如肆、兢持茶
 具、請其鑒裁、以定真假、方今五尺童子、莫不
 知千利休者、然視之宗及遊外、則人品迥別
 也、今世喜茶術者、獨宗利休、而不及二子、何
 哉、遊外之爲人類、唐陸羽、唐國史補曰、竟陵
 僧有、於水濱得嬰兒者、育爲弟子、稍長、自筮
 得蹇之、漸繇曰、鴻漸于陸、其羽可用爲儀、乃
 姓陸、名羽、字鴻漸、羽有文學、多意思、恥一物

を養ふに足る、儒に非ず釋に非ず、又道に非ず、一箇の風
 頓睛禿翁と、天正年中、津田宗及といふ者有り、少くして
 隱操有り、茶儀に善し、豐太閤屢召して之を見る、宗及
 喜ばず、乃ち弟子千の利休を薦む、初め利休藥を賣つて
 生を爲す、太閤に見ゆるに及んで、寵遇日に隆なり、竟
 に茶儀の祖と爲る、諸公皆其名を慕ひ、争ふて之を聘召
 す、士庶其風を聞く者、面を識るを以て幸と爲す、門の
 如く、堂肆の如し、競ふて茶具を持し、其鑒裁を請ふて、以
 て真假を定む、方今五尺の童子も千の利休を知らざる者
 莫し、然も之を宗及遊外に視れば、則ち人品迥かに別な
 り、今世茶術を喜ぶ者、獨り利休を宗として、二子に及ば
 ざるは何ぞや、遊外の人と爲り、唐の陸羽に類す、唐國史
 補に曰、竟陵の僧、水濱に於て嬰兒を得る者有り、育ふて
 弟子と爲す、稍長じて、自ら筮して蹇の漸に之を得たり、
 繇に曰、鴻漸に漸す、其羽用て儀と爲す可しと、乃ち姓
 は陸、名は羽、字は鴻漸とす、羽、文學有り、意思多し、一物
 の者其妙を盡くさざるを恥づ、茶術尤も著る、鞏縣の陶
 多く、鞏縣人を爲り、陸鴻漸と號す、數十の茶器を買へば、
 一鴻漸を得、市人若を沽りて利あらずんば、顧ち之に灌
 注す、羽江湖に于て、竟陵子と稱し、南越に于て、茶聖翁と

不盡其妙、茶術尤著、鞏縣陶者多爲藝偶人、號陸鴻漸、買數十茶器、得一鴻漸、市人沽茗、不利、輒灌注之、羽子、江湖稱、竟陵子、于南越、稱桑苧翁、與顏魯公、厚善、及玄真子、張志和爲友、羽少事、竟陵禪師智積、異日、在他處、聞禪師去世、哭之甚哀、乃作詩寄情、其略云、不羨白玉盞、不羨黃金爨、亦不羨朝入省、亦不羨暮入臺、千羨萬羨、西江水、曾向竟陵城下、來、見、全唐詩話者、與此少異。

吹毛求疵、舉一而廢十、是論人者之所當慎也、評品文詩、亦然、孔子見人一善、而忘其百非、善善之心長、而惡惡之心短、今人見人一非、而棄其百善、亦可見其不好善矣。

袁中郎曰、休取古人來比我、同林各夢不相

稱、顏魯公と厚ふして善し、及び玄真子、張志和友たり、羽少くして、竟陵の禪師智積に事ふ、異日、他處に在つて、禪師が世を去るを聞いて之を哭すること甚だ哀し、乃ち詩を作つて情を寄す、其略に云、羨ます白玉盞、羨ます黃金爨、亦羨ます朝にして省に入る、亦羨ます暮にして臺に入るを、千羨萬羨、西江の水、曾向、竟陵城下に向つて來ると、全唐詩話に見ゆる者、此と少しく異なり。

毛を吹いて疵を求め、一を擧げて十を廢す、是れ人を論する者の常に慎むべき所なり、文詩を評品するも亦然り、孔子は人の一善を見て、其百非を忘る、善を善とするの心長くして、惡を惡とするの心短し、今人、人の一非を見て、而して其百善を棄つ、亦其善を好まざるを見る可し。

袁中郎曰、古人を取り來つて我に比するを休めよ、同林

于、此句甚有見解、蓋古人自古人、而我自我矣、故似古人亦可、不相似亦可、我但學其法耳、我得其法、而作吾詩、作吾文、猶同牀而各夢也、奚必倣優孟之像、孫叔敖哉。

古詩工於用韻者、莫如杜韓焉、杜詩長篇、或用一韻、短篇卻屢換韻、千變萬化、可以見其出入縱橫之才矣、六一居士詩話曰、退之筆力、無施不可、予獨愛其工於用韻也、蓋其得韻寬、則波瀾橫溢、泛入傍韻、乍還乍離、出入回合、殆不可拘以常格、如此日足、可惜之類、是也得韻窄、則不復傍出、而因難見巧、愈儉愈奇、如病中贈張十八之類、是也、余嘗與聖俞論此、以謂譬如善馭良馬者、通衢廣陌、縱橫馳逐、惟意所之、至於水曲蟻封、疾徐中節、

各夢相干せず」と、此の句甚だ見解有り、蓋、古人は自ら古人、而して我は自ら我なり、故に古人に似るも亦可なり、相似ざるも亦可なり、我は但、其法を學ぶのみ、我は其法を得て、吾が詩を作り、吾が文を作る、猶ほ同牀にして各夢のごときなり、奚ぞ必ずしも優孟の孫叔敖に像るに倣はんや。

古詩韻を用ふるに工みなる者は、杜韓に如くは莫し、杜詩の長篇、或は一韻を用ひ、短篇は卻つて屢、韻を換ふ、千變萬化、以て其出入縱橫の才を見る可し、六一居士の詩話に曰、退之の筆力は施として不可なる無し、予獨り其韻を用ふるに工みなるを愛す、蓋、其韻を得る寬なれば、則ち波瀾橫溢し、泛して傍韻に入り、乍ち還り、乍ち離れ、出入回合、殆んど拘はるに常格を以てす可からず、此の日惜む可きに足るの類の如き是れなり、韻を得る窄なれば、則ち復た傍出せず、而して難に因つて巧を見はず、愈、儉にして愈、奇なり、病中張十八に贈るの類の如き、是れなり、余嘗て聖俞と此を論じ、以て謂ふ、譬へば善く良馬を馭する者の如し、通衢廣陌、縱橫馳逐、惟、意の之く所、水曲蟻封に至るまで、疾徐、節に中り、而して少しも蹉跌せず、乃ち天下の至工なりと、聖俞戲れて曰、前史に言

而不少蹉跌、乃天下之至工也、聖俞戲曰、前史言、退之爲人木強、若寬韻可自足、而輒傍出、窄韻難獨用、而反不出、豈非其拗強而然哉、坐客皆笑、余謂歐公善論韓詩者、聖俞之言、雖出於一時之戲、亦可以悟古詩用韻之法矣。

余於律詩、首學放翁、後進而學少陵、又退學坡翁、嘗有間適一律、曰、清新未作一家風、入道詩詞似放翁、暫置文章論道德、誰拋富貴付蒼通、棋逢強敵無奇勝、藥待良醫有異功、悟得前賢各成我、精神全在不相同、爲關詩論故錄。

松陰快談卷之三終

ふ、退之人と爲り木強と、寬韻自ら足る可く、而して輒ち傍出し、窄韻獨り用ひ難し、而して反つて出でざるが若し、豈其拗強にして然るに非ずやと、坐客皆笑ふ、余謂ふ、歐公は善く韓詩を論ずる者、聖俞の言は一時の戲に出づと雖も、亦以て古詩韻を用ふるの法を悟る可し。

余、律詩に於て首めに放翁を學び、後に進んで少陵を學び、又退いて坡翁を學ぶ嘗て間適一律有り、曰、清新未だ一家の風を作さず、人は道ふ詩詞放翁に似たりと、暫らく文章を置いて道德を論じ、誰れか富貴を抛つて蒼通に付せん、棋は強敵に逢ふて奇勝無く、藥は良醫を待つて異功有り、悟り得たり前賢各、我を成す、精神全く不同の中に在り」と、詩論に關するが爲めの故に録す。

松陰快談卷之四

伊豫 長野確孟確著

書貴沈著痛快、如古人評書曰怒貌挾石、渴驥奔泉、又曰快劍斫陣、強弩射札、皆狀其沈著痛快也。

米海岳之書雄拔奇快、而學之者有怒張放縱之病、蘇文忠之書勁癡豐妍、而學之者有健肥散慢之病、趙子昂之書斌媚綽約、而學之者失重濁卑俗、董立宰之書古淡清麗、而學之者失枯瘦輕佻、故非善學者皆未免有弊也。

宋朱長文、字伯原、遊程子之門、所著墨池編

書は沈著痛快を貴ぶ、古人書を評して怒貌、石を挾み、渴驥、泉に奔ると曰ひ、又快劍、陣を斫り、強弩、札を射ると曰ふが如き、皆其沈著痛快を狀するなり。

米海岳の書雄拔奇快、而して之を學ぶ者は、怒張放縱の病有り、蘇文忠の書、勁健豐妍、而して之を學ぶ者は、癡肥散慢の病有り、趙子昂の書、斌媚綽約、而して之を學ぶ者は、重濁卑俗に失す、董立宰の書古淡清麗、而して之を學ぶ者は、枯瘦輕佻に失す、故に善く學ぶ者に非ずんば、此未だ弊有るを免れざるなり。

宋の朱長文、字は伯原、程子の門に遊ぶ、著す所墨池編二

二十卷、蒐羅歷代書論筆法、甚精博、余嘗欲摘鈔其要、而未能也。

世間所有朱文公之書、真蹟墨本、皆怒張癡肥、形如斷木、余閱停雲館法帖、中有朱子尺牘、曰、喜僧易拜問、德門慶聚、恭惟均和多祉、云云、書體優美、頸健、因知嚮所觀都是贗蹟、鄭子經衍極古學篇曰、或曰、朱元晦諸賢、其簡筆乎、曰、道德之充乎中、而溢于外也、可謂知言矣。

書家好用淡墨、蓋濃墨難用、以其易滯筆耳、都元敬鐵網珊瑚曰、古人真字隸篆、皆用濃墨、至行草之運筆處、雖如絲髮、其墨亦濃、近世惟吳傳明深得古人筆法、其他不然也、由是視之、明人多好用淡墨、今用淡墨者、反譏

十卷、歷代の書論筆法を蒐羅す、甚だ精博、余嘗て其要を摘鈔せんと欲す、而して未だ能はざるなり。

世間有る所の朱文公の書、真蹟墨本、皆怒張癡肥、形、斷木の如し、余、停雲館法帖を閲す、中に朱子尺牘有り、曰、喜僧易拜問す、德門慶聚る、恭しく惟みれば、均和多祉云々と、書體優美勁健、因つて嚮に觀る所、都て是れ贗蹟なるを知る、鄭子經の衍極古學篇に曰、或ひと曰く、朱元晦の諸賢、其れ簡筆か、曰、道德の中に充ちて外に溢るゝなりと、知言と謂ふ可し。

書家好んで淡墨を用ふ、蓋、濃墨は用ひ難し、其氣を滯し易きを以てのみ、都元敬の鐵網珊瑚に曰、古人の眞字隸篆、皆濃墨を用ふ、行草の運筆の處に至つては、絲髮の如しと雖も、其墨も亦濃、近世惟、吳傳明深く古人の筆法を得たり、其他は然らざるなりと、是に由つて之を視れば、明人多く好んで淡墨を用ふ、今淡墨を用ふる者、反つて濃墨を用ふる者を譏る、亦左ならずや。

用淡墨者、不亦左乎。

草書有連綿遊絲之體、固非妙手不能作也、然余疑其俗、後閱姜堯章續書譜、曰、自唐以前、多是獨草、不過兩字屬、連數十字而不斷、號曰連綿遊絲、此雖出於唐人、不足爲奇、更成大病。

書畫不論巧拙、惟無俗氣、乃可觀焉、去俗莫如多讀書、本邦近世學書畫、而能讀書者蓋少、宜乎其不堪市俗之氣也。

李青蓮之書、見於星鳳樓法帖、筆法頗似懷素、狂草飄逸、洵稱其詩與人。

懷素草書歌、是懷素所自作、特借太白之名耳、如王逸少、張伯英、古來幾人浪得名之句、太白雖狂生、豈爲此語哉、陸放翁入蜀記云、

草書に連綿遊絲の體有り、固より妙手に非ずんば作ること能はざるなり、然も余其俗なるを疑ふ、後、姜堯章の續書譜を閲するに曰、唐より以前多くは是れ獨草、兩字屬に過ぎず、數十字を連ねて斷えず、號して連綿遊絲と曰ふは、此れ唐人に出づると雖も、奇と爲すに足らず、更に大病を成せり。

書畫は巧拙を論ぜず、惟俗氣無ければ乃ち觀る可し、俗を去るには、多く書を讀むに如くは莫し、本邦近世書畫を學んで、而して能く書を讀む者は蓋少し、宜なるかな其の市俗の氣に堪へざるや。

李青蓮の書、星鳳樓法帖に見ゆ、筆法頗る懷素に似たり、狂草飄逸、洵に其詩と人とに稱へり。

懷素の草書の歌、是れ懷素の自ら作る所、特に太白の名を借るのみ、王逸少、張伯英、古來幾人が浪に名を得るの句の如き、太白狂生なりと雖も、豈此語を爲さんや、陸放翁が入蜀記に云、姑熟十詠、及び歸來笑乎笑矣乎、僧伽歌、

姑熟十詠及歸來矣乎笑矣乎僧伽歌懷素草書歌、太白舊集本無之、宋次道再編時、貪多務得之過也。

宋黃伯思法帖刊誤曰、一行之中、洪纖頓異、號子母體、余閱墨帖、古人多好作此、如淳化帖、隋僧智果書、梁武帝評書、字形大小殊不均、至評皇象孔琳之、皆小字、忽楷忽草、變化百端、最覺其妙、

歐陽公集古錄評唐王岳書曰、岳天寶時人、字畫奇怪、初無筆法、而老逸不羈、蓋書流之狂士也、文字之學、傳自三代、以來其體隨時變易、轉相祖習、遂以名家、亦烏有定法耶、後世言書者、非義獻父子、則皆不爲法、然謂必爲法、則初何所據、所謂天下孰知其正法哉、

懷素草書歌、太白舊集本に之れ無し、宋次道再編の時、多きを貪り得るを撈むるの過ちなり。

宋の黃伯思の法帖刊誤に曰、一行の中、洪纖頓に異なるを、子母體と號す、余、墨帖を閱するに、古人多く好んで此を作る、淳化帖に、隋の僧智果が、梁武帝が書を評せるを畫するが如き、字形の大小殊に均しからず、皇象孔琳之を評するに至つては皆小字、忽ち楷忽ち草、變化百端、最も其妙を覺ゆ。

歐陽公集古錄に、唐の王岳の書を評して曰、岳は天寶の時の人なり、字畫奇怪、初めより筆法無し、而して老逸不羈なり、蓋し書流の狂士なり、文字の學、三代より傳はる、以來其體、時に隨つて變易し、轉じて相祖習し、遂に以て家に名く、亦烏ぞ定法有らんや、後世の書を言ふ者、義獻父子に非ずんば、則ち皆法と爲さず、然も必ず法と爲すと謂ふ、則ち初めは何の據る所ぞ、所謂天下孰れか其正法を知らんや、又獻之帖に跋して曰、所謂法帖といふ者は、

又跋獻之帖曰、所謂法帖者、乃晉魏人施於家人朋友、其逸筆餘興、或妍或醜、百態橫生、故後世得之、以爲奇翫、而想見其人也、至于高文大策、何嘗用此、而今人不然、至或率百事弊精疲力、以學書爲事業、是真可笑也、卓哉歐公之言也、古人愛書畫、蓋以想見其人、故不必論其巧拙、但畫有匠氣、而書無士氣者、斯不足觀耳。

奥州多賀城碑、紀四方行程里數也、余觀其搨本、楷法遒勁、洵奇觀也、碑立於天平寶字六年、距今千有餘年、不毀不昉、豈所謂神物呵護、以至今者耶。

讚州豐田郡中姬村有一寺、曰地藏院、有釋空海書急就章一卷、余與二三友同往訪院

松陰快談卷之四

乃ち晉魏の人、家人朋友に施すもの、其逸筆餘興、或は妍、或は醜、百態横生す、故に後世之を得て奇翫と爲し、而して其人を想見するなり、高文大策に至つては、何ぞ嘗て此を用ひん、而して今人は然らず、或は百事を棄て、精を弊り、力を疲らし、書を學ぶを以て事業と爲すに至る、是れ真に笑ふ可きなりと、卓なるかな歐公の言や、古人の書畫を愛する、蓋、以て其人を想見するなり、故に必ずしも其巧拙を論ぜず、但、畫に匠氣有り而して書に士氣無き者は、斯れ觀るに足らざるのみ。

奥州多賀城の碑、四方の行程里數を紀す、余其搨本を觀るに、楷法遒勁、洵に奇觀なり、碑は天平寶字六年に立つ、今を距ること千有餘年、毀せず、昉せず、豈んと謂はゆる神物の呵護、以て今に至る者なるか。

讚州豐田郡中姬村に一寺有り、地藏院と曰ふ、釋の空海の書急就章一卷有り、余、二三友と同じく往きて院主を

主請觀之、運筆之妙、蓋神品也、卷尾署年月日及釋空海書、又數筆抹之、字形略可辨、本文用墨太濃、字勢翩翩如游龍驚蛇、年月以下數十字、墨淡、字有俗韻、無生氣、比之本文、不啻霄壤也、本文爲唐人書、無容疑者、蓋空海平生臨摹者矣、年月以下蓋後人僞作、而不能髣髴本文、因塗抹之、使觀者難辨耳、三十四年前、院主苦其草書難讀、使僧南谷楷字旁注、所謂佛頭上爲罪過者、使人愧怍。物徂徠善書、尤巧草行、但世間多贗蹟、余得多觀其真蹟、運筆之妙、品格之高、假武以來一人而已、近日有書名者、非所得而髣髴也。三宅石菴、宮筠剛、趙陶齋、近日書家之巨擘也、石菴名正名、學顏魯公米海岳、海岳嘗以

訪ひ、請ふて之を觀る、運筆の妙蓋し神品なり、卷尾に年月日及釋空海書と署し、又數筆之を抹す、字形略可辨、本文墨を用ふる太だ濃、字勢翩翩として游龍驚蛇の如し、年月以下數十字墨淡く、字に俗韻有り、生氣無し、之を本文に比ぶるに、實に霄壤なるのみならずなり、本文は唐人の書たる疑を容るゝ者無し、蓋し空海平生臨摹する者なり、年月以下は蓋、後人の僞作、而して本文に髣髴する能はず、因つて之を塗抹し、觀る者をして辨じ難からしむるのみ、三十四年前、院主其草書の讀み難きを苦しみ、僧南谷をして楷字もて旁注せしむ、謂はゆる佛頭上に罪過を爲す者、人をして愧怍せしむ。

物徂徠書を善くして、尤も草行に巧みなり、但し世間贗蹟多し、余多く其真蹟を觀るを得、運筆の妙、品格の高、假武以來一人のみ、近日の書名有る者も、得て髣髴する所に非ざるなり。

三宅石菴、宮筠剛、趙陶齋は近日書家の巨擘なり、石菴名は正名、顏魯公米海岳を學ぶ、海岳嘗て書學博士を以て

書學博士召對、上問本朝以書名世者數人、對曰、蔡襄勅字、沉遠排字、黃庭堅拙字、蘇軾畫字、上問曰、卿如何、對曰、臣書刷字、余觀石菴之書、亦是刷字、可知其善學海岳也、筠圃名奇、字子常、從學伊東涯、書法宗松雪、甚有風韻、又善畫竹、皆爲世貴重、陶齋名養、學衡山松雪、後宗蘇米、其書圓美、比二子更佳。

東坡曰、畫之難易在工拙、不在所畫、工拙之中、又有格焉、畫雖工、而格卑、不害爲庸品、余謂書畫之可貴、在於品高矣、品不高、則愈巧而愈鄙、但人品不高、則書畫之品不高、是不可力強而得也。

近日公侯大夫富貴之家、競著書畫古器、以相誇示、大概其人不學無識、已無賞鑒之才、

召し對せらる。上、本朝畫を以て世に名ある者數人を問ふ。對へて曰、蔡襄は字を勅し、沉遠は字を排し、黃庭堅は字を描し、蘇軾は字を畫す。上問ふて曰、卿は如何對へて曰、臣の書は字を刷すと、余石菴の書を觀るに亦是れ刷字なり、其の善く海岳を學ぶを知る可きなり、筠圃名は奇、字は子常、伊東涯に從學す、書法は松雪を宗とす、甚だ風韻有り、又畫竹を善くす、皆世に貴重せらる、陶齋名は養、衡山松雪を學ぶ、後蘇米を宗とす、其畫圓美、二子に比して更に佳なり。

東坡曰、畫の難易は工拙に在り、畫く所に在らず、工拙の中、又格有り、畫は工と雖も格卑きは庸品たるに害あらずと、余謂ふ、書畫の貴ぶ可きは、品の高きに在り、品高からずんば、則ち愈巧にして愈鄙し、但、人品高からずんば、即ち書畫の品高からず、是れ力強して得可からざるなり。

近日公侯大夫富貴の家、競ふて書畫古器を著へ、以て相誇示す、大概其人不學無識、已に賞鑒の才無く、而して又

而又往往爲姦商狙僧所欺、宜乎其多鑿燕石也、甚者李斯狗柳相如犢鼻之類耳、徒可供一祭。

近日世人收書畫者、不解清賞之雅致、惟論價之高低、或吝不肯示人、其鄙俗已如此、其所收亦可從而知也、米元章畫史曰、書畫博易、自是雅致、今人收一物、與性命俱、大可笑、人生適目之事、看久即厭、時易新玩、兩適其欲、乃是達者。

池無名、字貸成、號九霞山樵、善畫山水、筆法倣梅道人、倪元鎮、用筆簡遠、風韻清高、無一點市俗之氣、蓋本邦一人耳、余嘗讀明顧元慶所著雲林遺事、元鎮可謂異人矣、與貸成氣象亦相類、貸成清貧、家惟四壁立、元鎮頗

往々にして姦商狙僧の欺く所と爲る、宜なるかな其多く燕石を鑿するや、甚しき者は李斯の狗柳相如の犢鼻の類のみ、徒に一祭に供す可し。

近日世人書畫を收むる者、清賞の雅致を解せず、惟、價の高低を論ず、或は吝んで肯て人に示さず、其鄙俗已に此の如し、其收むる所亦從つて知る可きなり、米元章の畫史に曰、書畫の博く易ゆるは、自ら是れ雅致、今人一物を收めて、性命と俱にす、大に笑ふ可し、人生適目の事、看る久しくして即ち厭ふ、時に新玩に易えて、兩つながら其欲に適す、乃ち是れ達と。

池無名、字は貸成、九霞山樵と號し、善く山水を畫き、筆法は梅道人倪元鎮に倣ふ、筆を用ふる簡遠、風韻清高、一點市俗の氣無し、蓋、本邦一人のみ、余嘗て明の顧元慶が著す所の雲林遺事を讀むに、元鎮は異人と謂ふ可し、貸成と氣象亦相類す、貸成清貧、家惟四壁のみ立つ、元鎮は頗る園林の樂み有り。

有園林之樂。

或曰、貸成之畫、今人做之者不少矣、而無能得其筆意者、何哉、曰、貸成人品甚高、今學其畫者、人品果如何、彼其逸氣高簡、豈尋常筆端所得而髣髴哉、人品果不讓貸成、則雖不做貸成、亦必卓越尋常矣、安在其摹做哉。

米元章畫史曰、蘇軾子瞻作墨竹、從地一直起至頂、余問何不逐節分、曰、竹生時何嘗逐節生、運思清拔、出於文同與可、自謂與文拈一瓣香、以墨深爲面、淡爲背、自與可始也、由是視之、名賢之書畫、別自有妙思、非拘牽常見之所及也。

西土人來長崎者、伊孚九方西園、沉南蘋、數人、皆有善畫之名、孚九專寫山水、西園兼能

成ひと曰、貸成の畫、今人之に做ふ者少からず、而して能く其筆意を得る者無きは何ぞや、曰、貸成は人品甚だ高し、今其畫を學ぶ者、人品果して如何、彼れ其逸氣高簡、豈尋常筆端の得て髣髴する所ならんや、人品果して貸成に讓らざれば、則ち貸成に做はずと雖も、亦必ず尋常に卓越せん、安ぞ其摹做に在らんや。

米元章畫史に曰、蘇軾子瞻墨竹を作る、地より一直起して頂に至る、余問ふ、何ぞ節を逐ふて分たざる、曰、竹の生ずる時、何ぞ皆て節を逐ふて生ぜんと、運思清拔、文同與可に出づ、自ら謂ふ、文と一瓣香を拈すと、墨の深きを以て面と爲し、淡きを背と爲すは、與可より始るなりと、是に由つて之を視れば、名賢の書畫は、別に自ら妙思有り、常見に拘牽せらるゝものゝ及ぶ所に非ざるなり。

西土の人長崎に來る者、伊孚九方西園、沉南蘋、數人、皆有善畫之名、孚九は專ら山水を寫し、西園は兼ねて山水

山水花卉翎毛、但水墨不設色、獨南蘋好著色、花卉鳥獸、筆法精工、細入毛縷、但恨帶匠氣、有市俗之氣、清王安節學畫淺說曰、去俗無他法、多讀書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣、張山來虞初新志曰、明畫史有仇十洲者、其初爲漆工、兼爲人綵繪棟宇、後徙而業畫、工人物樓閣、予獨嫌其略帶匠氣、顧不若戴文進爲佳耳、南蘋之畫、蓋仇英之流也、本邦近日裝書畫用紙、生硬多損、古書畫、米元章書史曰、唐背右軍帖、皆硬熟軟紙如綿、乃不損古紙、裝書之家宜效之、

印章之制、蓋昉於周初也、周禮掌節、貨賄用璽節、注、璽節、如今之印章、清朱象賢所著印典八卷、凡璽印淵源、制度、故事、評論、造作、歌

花卉翎毛を能くす、但、水墨、色を設けず、獨南蘋は著色を好む、花卉鳥獸、筆法精工、細、毛縷に入る、但、恨むらくは匠氣を帶びて市俗の氣有り、清の王安節が學畫淺說に曰、俗を去る、他法無し、多く書を讀めば、即ち書卷の氣上升し、市俗の氣下降すと、張山來の虞初新志に曰、明の畫史に仇十洲といふ者有り、其初め漆工たり、兼ねて人の爲に棟宇に綵繪す、後徙つて畫を業とす、人物、樓閣に工みなり、予獨り其略、匠氣を帶ぶるを嫌ふ、顧つて戴文進の佳と爲すに若かざるのみ、南蘋の畫は、蓋し仇英の流なり。

本邦近日書畫を裝するに紙を用ふ、生硬にして多く古書畫を損す、米元章の書史に曰、唐、右軍帖を背するに、皆軟紙を硬熟して綿の如くす、乃ち古紙を損せずと、裝書の家宜しく之に效ふべし。

印章の制は蓋し周初に昉るなり、周禮に貨賄を節するを掌り、璽節を用ふと、注に璽節は今の印章の如しと、清の朱象賢が著す所の印典八卷、凡そ璽印の淵源、制度、故事、評論、造作、歌詠、記紋、具備せざるは莫し、然れども其の引

詠、記、敍、莫不具備、然其引證諸書頗涉詭僻、引春秋運斗樞、春秋合誠圖等之書、以證黃帝堯舜之時、已有璽章焉、不知其書怪妄不足採證也、如五帝時、印章有無未可知也、故余以見周禮、斷爲璽印之原。

印材有金玉銀銅象牙犀角寶石瑪瑙水晶石印、磁印之類、三代蓋多用玉也、及至秦漢、用金銀銅象牙犀角也、寶石瑪瑙水晶石磁之類、蓋昉於六朝唐宋之際、古不以爲印也。古印皆白文耳、六朝始作朱文、蓋非古制也、唐宋制度多尙纖巧、大失古法、其詳見印典、好古者不可不讀也。

印典引梅菴雜志曰、古來印章官爵而外、止有名印、卽表字亦不多見、宋後取閑雜字、作

松陰快談卷之四

證の諸書、頗る詭僻に渉る、春秋運斗樞、春秋合誠圖等の書を引いて、以て黃帝堯舜の時、已に璽章有りしを證す、其書怪妄、採りて證するに足らざるを知らざるなり、五帝の時の如き、印章の有無未だ知る可からざるなり、故に余は周禮に見えたるを以て斷じて璽印の原と爲す。

印材に金玉銀銅象牙犀角寶石瑪瑙水晶石印、磁印の類有り、三代には蓋し多く玉を用ひしなり、秦漢に至るに及び、金銀銅象牙犀角を用ひしなり、寶石瑪瑙水晶石磁の類は蓋し六朝唐宋の際に昉まる、古以て印と爲さざりしなり。

古印皆白文のみ、六朝始めて朱文を作す蓋し古制に非ざるなり、唐宋の制度、多く纖巧を尙び、大に古法を失ふ、其詳は印典に見えたり、古を好む者は讀まざる可からざるなり。

印典に梅菴雜志を引く、曰、古來の印章官爵よりして外は、止だ名印有り、卽表字亦多く見えず、宋後、閑雜の字を

印印於書幅之首爲之引首印極爲杜撰可笑又曰古印有半白半朱者有一白一朱相間者又有一朱三白一白三朱者二朱相竝二白相竝者皆漢後之制余謂私印不必秦漢也採用唐宋制度之清雅者亦可。

余讀明史至孫承宗傳曰承宗自請督師詔給關防敕書因疑關防之爲官物後又讀續文獻通考曰萬歷二年鑄給監督徐州淮安臨清德州天津衛關防因知關防之爲官印今人謂引首印爲關防不知何所據也。

我邦硯材無佳者長州赤間關所出從前貴重之石質堅緻古者色純紫可愛然頑剛不潑墨有高島石佳者頗潑墨然以其易得人

取り印を作つて書幅の首に印す之を引首印と爲す極めて杜撰笑ふ可しと爲す又曰古印に半白半朱なる者有り一白一朱相間はる者有り又一朱三白一白三朱なる者有り二朱相竝び二白相竝ぶ者有り皆漢後の制なり余謂ふ私印は必ずしも秦漢のみならずるなり唐宋制度の清雅なる者を採用するも亦可なり。

余明史を讀むに孫承宗傳に至つて曰承宗自請ふて師を督す詔して關防敕書を給す因つて關防の官物たるを疑ふ後又續文獻通考を讀むに曰萬歷二年鑄て監督徐州淮安臨清德州天津衛關防を給すと因つて關防の官印たるを知る今人引首印謂つてを關防と爲すは何の據る所なるを知らざるなり。

我邦硯材佳なる者無し長州赤間關の出す所從前之を貴重す石質堅緻古者色は純紫にして愛す可し然も頑剛にして墨を潑せず高島石有り佳なる者頗る墨を潑す然も其の得易きを以て人之を重んぜざるなり西土の硯材は端溪を以て第一と爲す歙石洮河石亦皆奇

河石亦皆奇品、好古堂書畫記曰、好事者作硯譜、多博搜羣石、以相矜尙、然無過端歛洮

三種、足盡硯之能事矣、何必他哉、

近日製筆墨紙、百方摹西土、卒不能佳、然筑紙濃紙、別是一種佳品、性緊耐久、宜以粘障格作帳幃、不宜寫字、紙之爲用、寫字爲主、而不宜用、雖美不足貴也、墨貴南都古梅園、然其香色竝皆不及西土、遠甚、筆最難製、東都本郷街靜好堂製筆頗精、殆不讓西土、但小筆佳而大者未能佳、明陸深春風堂隨筆、載製筆之法、云、製筆之法、桀者居前、彘者居後、強者爲刃、要者爲輔、參之以繫、束之以管、固以漆液、澤以海藻、濡墨而試、直中繩、勾中鈎、方圓中規、矩終日握而不敗、故曰筆妙、此數

松陰快談卷之四

品、好古堂書畫記に曰、好事者、硯譜を作る、多く群石を博して、以て相矜尙す、然も端歛洮の三種に過ぐるもの無し、硯の能事を盡すに足る、何ぞ必らずしも他にせんや、

近日筆墨紙を製す、百方西土を摹するも、卒に佳なる能はず、然も筑紙濃紙は別には一種の佳品、性緊にして久しきに耐ゆ、宜しく以て障格に粘して帳幃を作るべし、寫字に宜しからず、紙の用たる寫字を主と爲す、而して用字に宜しからずんば、美なりと雖、貴ぶに足らざるなり、墨は南都の古梅園を貴ぶ、然も其の香色竝びに皆西土に及ばざる、遠きこと甚だし、筆は最も製し難し、東都本郷街、靜好堂、筆を製する頗る精し、殆んど西土に譲らず、但、小筆佳にして大なる者は未だ佳なること能はず、明の陸深の春風堂隨筆に製筆の法を載す、云、筆を製するの法、桀者前に居り、彘者後に居る、強者刃と爲り、要者輔と爲る、之を參するに繫を以てし、之を束ぬるに管を以てし、固むるに漆液を以てし、澤るに海藻を以てし、墨を濡して試む、直は繩に中り、勾は鈎に中り、方圓は規、矩に中る、終日握つて敗れず、故に筆妙と曰ふ、此の數言、簡約なり、未だ誰が作る所なるを知らざれども、題して筆經と爲

言簡約、未知誰所作、可題爲筆經、余按始造、紙者蔡倫、見東觀雜記、始造筆者虞舜、見博物志、又曰蒙恬造。

市中賣手簡紙、高五六寸、濶尺餘、糊而連接之爲卷、橫展書之、長短剪之、以相往來、不知防於何時也、一日讀陸放翁老學菴筆記、曰予淳熙末、還朝、則朝士乃以小紙高四五寸、濶尺餘、相往來、謂之手簡、市肆作手簡紙、賣之、甚售、因知手簡紙防於宋末也、我邦用之、蓋未及百年矣。

摺扇、我邦所製、尤爲精妙、西土古惟、有團扇爾、東坡云、高麗白松扇、展之、廣尺餘、合之止、兩指許、因知西土有摺扇、蓋北宋以後矣、至明始盛、名摺疊扇、亦名聚頭扇、然不及我製

す可し、余按するに、始めて紙を造る者は蔡倫なりと、東觀雜記に見えたり、始めて筆を造る者は虞舜なりと、博物志に見えたり、又曰、蒙恬造ると。

市中に手簡紙を賣る、高さ五六寸、濶さ尺餘、糊して之を連接し、卷と爲す、橫展之に書す、長短之を剪り、以て相往來す、何れの時に防るを知らざるなり、一日、陸放翁が老學菴筆記を讀む、曰、予淳熙の末、朝に還れば、則ち朝士乃ち小紙高さ四五寸、濶さ尺餘なるを以て相往來す、之を手簡と謂ふ、市肆、手簡紙を作つて之を賣る、甚だ售ると、因つて手簡紙の宋末に防まるを知るなり、我邦の之を用ふる、蓋し未だ百年に及ばず。

摺扇は我邦の製する所、尤も精妙たり、西土古惟、團扇有るのみ、東坡云、高麗白松扇、之を展ぶれば、廣さ尺餘、之を合すれば、止だ兩指許り、因つて知る、西土に摺扇有るを、蓋、北宋以後なり、明に至つて始めて盛んなり、摺疊扇と名け、亦聚頭扇と名く、然も我製の精潔輕妙なるには及

之精潔輕妙也。

今俗、人人靡不喫烟、賓客卽坐、寒暄未了、袖間出烟具、噴爲雲霧、滿塞一室、或含烟緩吐、以戲兒童、市肆製烟具、爭極精工、製烟管以金銀、製烟袋以錦繡、可謂極侈矣、烟性猛烈、多喫必有害矣、余亦酷嗜烟、近日頗覺有害、稍稍制減之、未能禁絕、清張晉濤檀几叢書云、烟之性味、苦澁辛烈、本草所不載、不知昉於何年、今遍滿宇內、無人不嗜、名之曰相思草云。

烹庖之法、浪華爲妙、京師次之、東都又次之、東都之論、餽膳者、惟求其豐盛肥濃而已、未免田舍樣、浪華則不然、淡鹹得中、配搭得宜、而清且潔、器什之美、陳列之宜、未下匕箸、已

ばざるなり。

今俗、人々烟を喫せざるは難し、賓客坐に卽いて、寒暄未だ了らず、袖間より煙具を出だし、噴いて雲霧と爲し、一室に滿塞す、或は烟を食んで緩吐し、以て兒童に戲むる、市肆、烟具を製し、争ふて精工を極む、烟管を製するに金銀を以てし、烟袋を製するに錦繡を以てす、極侈と謂ふ可きなり、烟性猛烈、多く喫せば必ず害有らん、余亦酷だ烟を嗜む、近日頗る害有るを覺ゆ、稍々之を制減す、未だ禁絶する能はず、清の張晉濤が檀几叢書に云、烟の性味、苦澁辛烈、本草の載せざる所、何れの年に昉るを知らず、今宇内に遍滿して、人の嗜まざるは無し、之を名けて相思草と云ふと。

烹庖の法、浪華を妙と爲し、京師之に次ぎ、東都又之に次ぐ、東都の餽膳を論ずる者、惟其豐盛肥濃を求むるのみ、未だ田舍樣を免れず、浪華は則ち然らず、淡鹹、中を得、配搭、宜しきを得、而して清且つ潔、器什の美、陳列の宜、未だ匕箸を下さずして、已に喜ぶ可し、風俗の別、脾胃の殊、

可喜、不論風俗之別、脾胃之殊、人人莫不稱善、可以見風俗之一端矣。

東都人嗜松魚、其出在春末夏初、始出一尾、直萬錢、都人爭買之、中下之戶、最先食之、以晚食爲恥、傾囊典衣、惟恐不得也、至四五月之際、出益多、一尾纔百錢耳、宋葉夢得石林詩話曰、浙人食河豚、其方出時、一尾至直千錢、然不多得、非富人家預以金噉漁人、未易致也、是彼此相似者、河豚有毒、往往殺人、松魚亦有微毒、其不鮮者、能中傷人、鮮者亦不宜多食也。

刀刃之利、莫如我邦、歐陽公日本刀歌、極其稱揚、明宋應星天工開物曰、倭國刀背闊不及二分、架于手指上、不復欹倒、不知用何錘

を論ぜず、人々善と稱せざるは莫し、以て風俗の一端を見る可し。

東都の人松魚を嗜む、其出る春末夏初に在り、始めて出づる、一尾の直ひ萬錢、都人争ふて之を買ふ、中下の戸、最も先づ之を食ひ、晚食を以て恥と爲す、囊を傾け衣を典して惟、得ざるを恐るゝなり、四五月の際に至つて、出づること益多、一尾纔かに百錢のみ、宋の葉夢得が石林詩話に曰、浙人河豚を食ふ、其方に出づる時、一尾直千錢に至る、然も多く得ず、富人家の預め金を以て漁人に噉はずに非ずんば未だ致し易からざるなりと、是れ彼此相似たる者、河豚に毒有り、往々人を殺す、松魚も亦微毒有り、其鮮ならざる者は能く人を中傷す、鮮なる者も亦宜しく多く食ふべからざるなり。

刀刃の利、我邦に如くは莫し、歐陽公日本刀の歌、其稱揚を極む、明の宋應星の天工開物に曰、倭國の刀背闊さ二分に及ばず、手指の上に架して、復た欹倒せず、何の錘法を用ふるを知らず、中國未だ其傳を得ず、凡そ備刀斧は

法、中國未得其傳、凡健刀斧皆嵌鋼包鋼、整齊而後入水淬之、其快利則又左礪石成功也、余謂刀之利鈍在錘鍛之巧拙、而礪石次之、其質已鈍雖有磨礪無如之何、我邦造刀之利、蓋得力於水性者多、則西土雖得其傳、亦恐不能快利如我也。

小人之情狀、變化百端、不可測識、然尤有大害、可畏者莫如媚嫉焉、故大學舉休休有容之君子與媚嫉之小人、以示國家治亂之所係、莫大焉、學者之所以宜深察而明辨也。

本邦俗慎正五九月、或請巫祝祈禳、至婚嫁皆避之、不知所據、後讀唐書、正五九之爲三長月、見於本紀、後又讀宋戴埴鼠璞、曰今俗人食三長月素、按釋氏智論、天帝釋以大寶

皆鋼を嵌し鋼を包す、整齊して後水に入れて之を淬す、其快利は則ち又礪石功を成すに在るなりと、余謂ふ刀の利鈍は錘鍛の巧拙に在り、而して礪石之に次ぐ、其質已に鈍なれば磨礪有りとも雖も、之を如何ともする無し、我邦刀を造るの利、蓋力を水性に得る者多し、則ち西土は其傳を得ると雖も、亦恐らくは快利我の如くなる能はじ。

小人の情狀、變化百端、測識す可からず、然も尤も大害有りて畏る可きは媚嫉に如くもの莫し、故に大學に休々有るゝ有るの君子と媚嫉の小人とを擧げて、以て國家治亂の係る所、焉れより大なる莫きを示す、學者の宜しく深察し而して明辨すべき所以なり。

本邦の俗、正五九月を慎む、或は巫祝を請ふて祈禳し婚嫁に至るまで、皆之を避く、據る所を知らず、後、唐書を讀むに、正五九の三長月たる、本紀に見ゆ、後又宋の戴埴の鼠璞を讀むに曰、今の俗人、三長月素を食ふ、按ずるに釋氏智論に、天帝釋、大寶鏡を以て四大州を照らす、毎月一

鏡照四、大州、每月一移、察人善惡、正五九月、照南贍部州、唐人於此三月、不行死刑、曰三長月、乃始知其所由來矣。

有一富翁、性至貪汚、平生凡損人利己者、無所不爲、所謂一善不作、衆惡奉行者、翁常曰、世間有儒者、故有仁義、所謂仁義者、皆是損己利人之道、且儒者多讀書、以驕人、使人失利、於是惡儒如仇、客謂翁曰、翁惡儒者、非以其道與翁之所爲背馳耶、曰然、客曰、吁、翁未察也、夫損己利人者、古之儒也、今之儒者、正與翁之所爲一般、毫無異道也、翁乃欣然曰、洵如客言、則儒是我黨之人、吾亦將學儒、安惡之耶、客笑去。

元周密視聽抄曰、吳諺云、正月逢三亥、湖田

移、人の善惡を察す、正五九月、南贍部州を照らす、唐人此の三月に於て死刑を行はず、三長月と曰ふと、乃ち始めて其由來する所を知る。

一富翁有り、性至つて貪汚、平生凡そ人を損し己を利する者爲さざる所無し、謂はゆる一善作さず、衆惡奉行する者、翁常に曰、世間に儒者有り、故に仁義有り、謂はゆる仁義は皆是れ己を損し人を利するの道なり、且つ儒者は多く書を讀み、以て人に驕り、人をして利を失はしむ、と、是に於て儒を惡むこと仇の如し、客翁に謂ひて曰、翁の儒を惡むは其道、翁の爲す所と背馳するを以てに非ずや、曰、然り、客曰、吁、翁未だ察せざるなり、夫れ己を損して人を利するは古の儒なり、今の儒者は正に翁の爲す所と一般、毫も異道無きなりと、翁乃ち欣然として曰、洵に客の言の如くならば、則ち儒は是れ我黨の人、吾亦將に儒を學ばんとす、安んぞ之を惡まんやと、客笑つて去る。

元の周密の視聽抄に曰、吳諺に云、正月、三亥に逢はば、湖

變成海、謂之水大。余按、文化乙亥、正月元日丁亥、十三日己亥、廿五日辛亥、是歲諸州大水、信如吳諺、可謂一奇矣。

不可一日闕者、莫甚於水火、而可畏者、又莫甚於水火焉。江都失火之患、發輒延及數萬家、冬季春初之際、失火燬數十家者、晝夜不知幾次、撲救之術、無所不至、每坊有軍屯百餘人、梯索水桶、梃棍鈎鋸之類、莫不備具、有望火樓、縣一鼓一鉦、有數人探望、見火則鳴鼓、高唱、方向里名、軍將率騎士疾馳、步卒從之、數隊爭馳、先到火處、速撲滅者得賞、火滅鳴鉦、軍將乃整隊而還、公侯邸第、皆建望火樓、撲救部署、不敢懈弛、火發、近火居人、左提右挈、負擔出避、騷擾狼狽、故又有巡捕邏卒、

田變じて海と成る之を水大と謂ふ、余按するに文化乙亥正月元日丁亥、十三日己亥、廿五日辛亥、是歲諸州大水、信に吳諺の如し、一奇と謂ふ可し。

一日も闕く可からざる者は、水火より甚しきは莫し、而して畏る可き者は、又水火より甚しきは莫し、江都失火の患、發すれば輒ち數萬家に延及す、冬季春初の際、火を失して數十家を燬く者、晝夜幾次なるを知らず、撲救の術、至らざる所無し、每坊軍有り、百餘人を屯す、梯索水桶、梃棍鈎鋸の類、備具せざるは莫し、望火樓有り、一鼓一鉦を懸く、數人有り、探望す、火を見れば、則ち鼓を鳴らして、高く方向里名を唱ふ、軍將、騎士を率ゐて疾馳す、步卒之に従ひ、數隊爭馳す、先づ火處に到り、速かに撲滅する者は、賞を得、火滅すれば、鉦を鳴らす、軍將乃ち隊を整へて、還る公侯の邸第、皆望火樓を建つ、撲救の部署、敢て懈弛せず、火發すれば、火に近き居人、左提右挈し、負擔し出で避けて、騷擾狼狽す、故に又巡捕邏卒有りて、搶火者を禁し、就て之を擒縛す、余都下に在り、三たび大火に遭ふ、幸にして皆靡竺たるを免れたり、然も委頓亦極まる、火發して、勢甚だ猛烈、人家倉廩亦恃む可からず、故に土を鑿ち

察搶火者、就擒縛之。余在都下、三遭大火、幸皆免於爲靡竺矣。然委頓亦極、火發、勢甚猛烈、人家倉廩、亦不可恃。故鑿土爲窟、以藏貨財。謂之穴藏。宋馬永卿懶真子曰、唐永徽二年、玄奘於慈恩寺造甄浮屠、以藏梵本、恐火災也。余因謂瓦磚造庫、已可以免災、而又無卑濕生黴之患矣。不知果可試否。

張子和曰、願爲浮家泛宅、往來苕霅間、是洵隱者佳境、惟恐浮家泛宅、不易辨耳。陸放翁入蜀記曰、大江過一木橋、廣十餘丈、長五十餘丈、上有三四十家、妻子雞犬、白碓皆具、中爲阡陌、相往來、亦有神祠、素所未親也。大者於棧上鋪土作蔬圃、或作酒肆、皆不復入、曠但行大江而已。余又嘗閱一書、今不記其書

て窟と爲し以て貨財を藏す、之を穴藏と謂ふ、宋の馬永卿の懶真子に曰、唐の永徽二年、玄奘慈恩寺に於て甄浮屠を造り以て梵本を藏す、火災を恐るゝなりと、余因つて謂ふ、瓦磚もて庫を造る、已に以て災を免る可し、又卑濕黴を生ずるの患ひ無し、知らず果して試む可きや否や。

張子和曰、願くは浮家泛宅を作つて苕霅の間に往來せんと、是れ洵に隱者の佳境、惟恐らくは浮家泛宅辨じ易からざるのみ、陸放翁の入蜀記に曰、大江に、一木橋に過ぶ、廣さ十餘丈、長さ五十餘丈、上に三四十家有り、妻子雞犬白碓皆具す、中に阡陌を爲つて相往來す、亦神祠有り、素より未だ親ざる所なりと、大なる者は棧上に於て土を鋪き、蔬圃を作り、或は酒肆を作る、皆復た曠に入らず、但、大江を行くのみと、余又嘗て一書を閱す、今其書名を記せず曰、民稅斂の苛を苦み、大棧を作りて江に泛ぶ、妻子圃宅雞犬皆具すと、是れ其の浮家泛宅たる、殆ど

名曰民苦稅斂之苛作大棧泛江妻子園宅
鷄犬皆具是其爲浮家泛宅殆非佳境。

勢州擲筆山相傳昔畫工法眼元信過此觀
山形奇絕不可得而摸乃擲筆而去余屢經
過對山熟視平平無奇不解所謂也恐是好
事者妄說欺世俗至使良工蒙冤耳茶店壁
間題詩甚多皆稱其奇絕矮人觀場可笑余
題一絕曰良工擲筆尖兒是爲溪山無一
奇誤謂丹青描不得幾人駐馬立多時。

浪華城南數里有茶肆稱難波屋者店後有
偃松高不過丈而旁幹四出廣二十丈天矯
如游龍其頂平坦可羣坐觀者靡不稱奇讚
州上田村小菴有松亦似之其地僻遠無人
過而賞之均一松也其遇不遇如此。

佳境に非ず。

勢州の擲筆山相傳ふ昔畫工法眼元信此を過ぎ山形の
奇絶なる得て摸す可からざるを觀て乃ち筆を擲つて
去ると余屢經過し山に對して熟視するに平々にし
て奇無し謂ふ所を解せざるなり恐らくば是れ好事者
の妄說し世俗を欺き良工をして冤を蒙らしむるに至
りしのみ茶店壁間に題詩甚だ多し皆其奇絶を稱す矮
人場を觀る笑ふ可し余一絶を題して曰良工擲筆
筆尖兒是れ溪山一奇無きが爲なり誤つて謂ふ丹青描
き得ずと幾人か馬を駐めて立つこと多時。

浪華城南數里にして茶肆難波屋と稱する者有り店後
に偃松有り高さ丈に過ぎずして旁幹四出し廣さ二十
丈天矯游龍の如し其頂平坦にして羣坐すべし觀者奇
と稱せざるは靡し讚州上田村の小菴に松あり亦之に
似たり其地僻遠人の過ぎて之を賞する無し均く一松
なり其遇不遇此の如し。

豫州有木葉石、剖之自然有紋、或楓葉或柏葉、宛如刻畫、然石質粗硬、不可彫琢、以爲器物、按水經注、石魚山、本名立石山、高八十餘丈、廣十里、石色黑而理若雲母、發一重、有魚形數寸、鱗鬣首尾、有若刻畫、燒之作魚膏、腥可謂至奇矣。

海鱸魚之至大者也、然猶有大焉者、余聞之東人、蝦夷之海有魚名曰翁魚、人無覩其全身者、首尾浮海、如二大島湧出、春南秋北、鼓鱗之勢、海水爲之沸立、聲如震雷、能吞海鱸、猶鱸啖鱸也、漁人見海水變色、海鱸逃走、輒知翁魚將來也、爭收漁具、逃歸、夫莊周說鯤鵬、固寓言耳、今海魚其大至此、可取以徵其

說。

豫州に木葉石あり、之を剖くに、自然に紋あり、或は楓葉或は柏葉、宛として刻畫の如し、然ども石質粗硬にして、彫琢して以て器物と爲す可らず、按するに、水經注に、石魚山、本名は立石山といひ、高さ八十餘丈、廣さ十里、石色は黒くして理あり、雲母の若し、一重を發すれば、魚形の數寸なる有り、鱗鬣首尾刻畫の若き有り、之を燒けば、魚膏の腥を作す、至奇と謂ふべし。

海鱸は、魚の至大なる者なり、然れども猶ほ焉れより大なる者あり、余之を東人に聞くに、蝦夷の海に魚あり、名を翁魚と曰ふ、人、其の全身を覩る者無し、首尾海に浮び、二大島の湧出するが如し、春は南し、秋は北す、鱗を鼓するの勢、海水之れが爲めに沸立す、聲、震雷の如くにして、能く海鱸を吞む、猶ほ鱸の鱸を啖ふがごとし、漁人、海水色を變じ、海鱸逃走するを見れば、輒ち翁魚の將に來らんとするを知るなり、争ふて漁具を收めて逃れ歸る、夫れ莊周の鯤鵬を説く、固より寓言のみ、今海魚、其の大なる此に至れり、取りて以て其説を徵すべし。

東都花市甚盛淺草寺每月十八日、虎門每月十日、麴坊菅廟每月廿五日、春則梅柳桃李海棠牡丹芍藥、夏則荷花石榴燕子、秋則蘭菊木芙蓉、冬則水仙山茶奇松怪竹、爭新競奇、種種無不有也、各盆植之、列置牀上、宛如錦繡、而又有不時之花、若海棠桃李、已以正月開花、然皆出於人力、非受天氣之正者也、其法陶盎植花木、藏之土窖中、周以草秸、而密堊之、最早開者、四周以火、逼之使開也、又有以白梅爲砧根、而紅梅一枝接之、或以紅梅爲砧根、而白梅一枝接之、每盆一株、紅白爭開者、謂之源平梅、蓋本邦武將源氏旗色尙白、平氏旗色尙赤、因以名焉、耳、京師浪華亦有花市、然不如東都之盛也、余嘗詠虎門

松陰快談卷之四

東都花市甚だ盛なり、淺草寺は毎月十八日、虎の門は毎月十日、麴坊菅廟は毎月廿五日、春は則ち梅柳桃李海棠牡丹芍藥、夏は則ち荷花石榴燕子、秋は則ち蘭菊木芙蓉、冬は則ち水仙山茶奇松怪竹、新を争ひ、奇を競ふ、種々有らざるは無きなり、各盆之を植ゑて牀上に列置す、宛として錦繡の如し、而して又不時の花有り、海棠桃李の若し、已に正月を以て花を開く、然も皆人力に出づ、天氣の正を受くる者に非ざるなり、其法は陶盎に花木を植ゑ、之を土窖の中に藏し、周するに草秸を以てして密に之を堊る、最も早く開く者は四周火を以て之に逼つて開かしむるなり、又白梅を以て砧根と爲し、而して紅梅一枝之に接し、或は紅梅を以て砧根と爲し、而して白梅一枝之に接し、毎盆一株、紅白争ひ開く者有り、之を源平梅と謂ふ、蓋本邦の武將源氏の旗色は白を尙び、平氏の旗色は赤を尙ぶ、因つて以て名つくるのみ、京師浪華亦花市有り、東都の盛なるに如かざるなり、余嘗て虎門の花市を詠する絶句五首あり、曰、「雨歇んで城頭曉光を放つ、於菟門外花を賣る忙し、紛々たる浪華人を追ふて去る、知る那の牡丹分外香し、其二に曰、「一番の花信風を待たず、幾多の桃杏誰が爲にか紅なる、恁般隨意春を弄するの手、

花市絶句五首曰、雨歇城頭放曉光、於茲門外賣花忙、紛紛浪蝶追人去、知那牡丹分外香、其二曰、不待一番花信風、幾多桃杏爲誰紅、恁般隨意弄春手、不是明皇羯鼓同、其三曰、磁青盆色玉爭光、植得紅紅白白香、爲是人情都厭舊、笑他花木也新粧、其四曰、門外橋邊約五里、大家爭喚老花師、豪奴乘醉不論價、一擲千錢取一枝、其五曰、怪癖奇葩各自誇、傳言這裡最繁華、誰知野外春如錦、只算城中益植花。

余尊信程朱如神明、在我先輩、獨折服於順菴、鳩巢二先生、鳩巢才德世皆知之、今不必論、至順菴先生、則世唯目以溫厚長者而已、不知先生德量之大、當時無雙也、若夫鳩巢

是れ明皇の羯鼓と同じからず、其三に曰、磁青の盆色玉光りを争ふ、植る得て紅々白白香し、是れ人情の都て舊を厭ふが爲めに、笑ふ他の花木も也、新粧するを、其四に曰、門外橋邊約する五里、大家争ふて喚ぶ老花師、豪奴醉に乗じて價を論ぜず、一擲千錢一枝を取る、其五に曰、怪癖奇葩各自に誇る、傳言す這の裡最も繁華なりと、誰れか知らん野外春錦の如きを、只算す城中に植うる花。

余、程朱を尊信する神明の如し、我が先輩に在つては獨り順菴、鳩巢二先生に折服す、鳩巢の才德は、世皆之を知る、今必らずしも論ぜず、順菴先生に至つては、則ち世唯、目するに温厚の長者を以てするのみ、先生が德量の大なる、當時雙び無きを知らざるなり、若し夫れ、鳩巢、白石觀

白石、觀瀾、南海、芳洲、數人、皆古所謂奇才豪傑、而各擅所長、名聲震曜於天下矣。獨先生默然如無所能者、而前數子皆師事先生、猶七十子之於孔子、無思不服、是豈徒以聲音容貌欺世盜名者之所能得哉。先生教人、各因其材而篤焉、猶孔門之諸子德行、政事、言語、文學、各成其材也。是豈與世之腐儒膠柱鼓瑟、刻舟求劍、懸一定之權衡、以待人同哉。先生愛才好士、稱譽薦達、有唐宋名賢之風度、亦余之所以深服其德量也。

湖南海、芳洲數人は、皆古の所謂奇才豪傑にして各、長ずる所を擅にして、名聲天下に震曜す。獨り先生默然として能くする所無き者の如し、而して前の數子皆先生に師事す。猶ほ七十子の孔子に於ける、思ふて服せざる無きがごとし、是れ豈に徒らに聲音容貌を以て世を欺き名を盜む者の能く得る所ならんや、先生の人を教ふる各、其材に因つて篤くす。猶ほ孔門の諸子德行、政事、言語、文學、各、其材を成すがごときなり、是豈、世の腐儒、柱に膠し、瑟を鼓し、舟に刻し、劍を求め、一定の權衡を懸けて、以て人を待つと同じからんや、先生才を愛し、士を好み、稱譽薦達す、唐宋名賢の風度有り、亦余の深く其德量に服する所以なり。

松陰快談卷之四
大尾

松陰快談跋

日本僻處東瀛百餘年來文教頗盛若物茂卿服安齋神鼎太宰純輩皆能力學好古表彰遺籍誠彼所謂豪傑之士也快談四卷係伊豫長野確所著其中評論古今及詩文書畫之屬援引博洽時具特識以儆物服諸君雅稱後勁且彼邦文獻亦略見于此因亟錄之以廣其傳壬寅春日吳江沈懋懋識